

民國十四年末から、十五年にかけて、國民軍は奉直兩軍の攻撃を受けて、先づ京津において敗れ、次いで南口の守りを失ひ、最後に張家口を棄て、綏遠の奥地に向つて敗退するに至り、全軍殆んど潰亂状態に陥つたが、民國十五年九月十七日、五原に誓師した後、再び十萬の兵を集め、甘肅、陝西をこえて、河南の中原に進出することを得た。

十六年五月、陝西より河南へ出動に際し、國民軍は國民政府の命令によつて、國民革命第二集團軍と改稱し、馮玉祥その總司令となり、全軍を左の九方面軍に分ち、北伐戦争に對する陣容を整へた。

- 第二集團軍總司令 馮玉祥
- 同 南路軍總司令 岳維峻
- 同 北路軍總司令 鹿鍾麟
- 第一方面軍總指揮 孫良誠
- 第三軍長 孫良誠
- 第四軍長 馬鴻逵
- 第五軍長 石友三
- 第二方面軍總指揮 孫連仲

- 第十四軍長 孫德純
- 第二十三軍長 馮治安
- 獨立師長 韓德元
- 第三方面軍總指揮 韓復榘
- 第六軍長 韓復榘
- 騎兵旅長 席液池
- 第四方面軍總指揮 宋哲元
- 第五方面軍總指揮 岳維峻
- 第一軍長 岳維峻
- 第二軍長 李雲龍
- 第三軍長 衛定一
- 第四軍長 劉鵬代
- 第五軍長 鄧寶珊
- 第六軍長 張萬信
- 第七軍長 紀元林

第六方面軍總指揮	石敬亭
第七方面軍總指揮	劉郁芬
第八方面軍總指揮	劉鎮華
第二十五軍長	劉鎮華
第二十六軍長	劉恩茂
第二十八軍長	萬選堂
第九方面軍總指揮	鹿鍾麟
第十八軍長	鹿鍾麟
第二軍長	劉海明
第二十軍長	龐炳勳
第二十一軍長	呂秀文
第二十七軍長	王鴻恩
第三十軍長	劉大章
騎兵旅長	劉大章

以上合計二十六軍總兵數三十萬人と稱せられた。但し右の中、岳維峻軍（前國民第二軍）は所謂客軍

であつて、馮玉祥にまつては常に厄介なる友軍で、十七年春以來、信陽を中心とした河南省南方に盤據し、隙あれば馮玉祥の後方を窺はんこし、同年夏、樊鐘秀軍の反馮運動を起すや、ひそかにこれを援助した。馮玉祥は同年秋に入り、同軍討伐に決し、ぢり／＼壓迫を始めたので、岳維峻は安徽に逃れ、その配下の部隊の一部は馮軍に、一部は武漢軍に編入されたらしい。

同じく客軍ながら、劉鎮華の率ゐる第八軍は、十六年秋、その内部の編制を變へて、馮玉祥の信賴する青年將校を入れ、十七年春季の戦争には大名府正面より山東方面に進出し、大いに直魯軍と戦つた。

劉郁芬の第七方面軍は甘肅にあり、宋哲元の第四方面軍は陝西に駐屯し、國民軍の後方警備の任に當つた。

第一、第二、第三、第六及び第九方面軍は馮玉祥軍の精銳であつて民國十六及び十七年の北伐戦争にあたり、最もよく奮闘した。殊に孫良誠の麾下なる第一方面軍は山東正面に進んで戦功あり、また韓復榘の第三方面軍、鹿鍾麟の第九方面軍は京漢線正面にありて、保定の會戦に際し、津浦及び京漢兩線の間に進出し、奉軍敗退に乗じて、韓軍は山西軍とも、「北京入りのマラソン競争」をなし、目的を達せず、北京附近から南下し、爾來京漢線及び隴海線の中段に駐屯して居る。

民國十七年七月、北京における蔣、馮、閻、李、李の國民革命軍五巨頭會議において、蔣介石より裁兵案を提出し、種々修正の後、可決を見たが、同案は更らに南京における第五次執監大會を通過し、八月末馮玉祥の南京を去つて、開封に歸來するや、裁兵計畫の遂行に取りかかり、十七年十月二日從來の三十四師九方面軍の編制を撤して、十二師制をなし、左の如く師長を任命した。

暫編第一師長	韓復榘	鄭州
暫編第二師長	梁冠英	濟寧
暫編第三師長	吉鴻昌	濟寧
暫編第四師長	馮治安	河南
暫編第五師長	石友三	陝西
暫編第六師長	童玉振	河南
暫編第七師長	程希慶	河南
暫編第八師長	張維璽	陝西
暫編第九師長	宋哲元	陝西

暫編第十師長	劉汝明	陝甘間
暫編第十一師長	佟臨閣	甘肅
暫編第十二師長	孫連仲	陝西

但し、國民革命軍の裁兵は西北軍に云はず、蔣介石軍に云はず、各軍にも表面聲を大にして叫び、軍を師としたり、師の数を減じたりして、形式の上に於ては、大いに裁兵を決行しつゝ、ある如く見せて居るも、果して實際裁兵を行ひ居るや、否やは大なる疑問である。軍縮費を以て軍備擴張費にあてるものも少くない。民國十七年七月の北京における五巨頭會議で裁兵の標準を「質」におく可きを主張した馮玉祥はその配下の裁兵に當り、不良の部隊は「裁兵」の名の下に、裁撤するであらうが、その中堅部隊は裁兵どころか、むしろ裁兵費を轉じて増兵費にあてるのではないかと豫想する者もある。されば國民軍が三十餘萬の兵数を十八萬に減じ、九方面軍を廢して「十二師制」をこれるも、その結果、却て岳維峻軍や、劉鎮華軍の如き、あまり信賴出來ぬ客軍を除いて、精銳のみを集結し、その實勢力は却つて従前より、強くなつたにしても、減退したとは思はれぬのである。

四

西北國民軍は以上の如く、第一、所謂「革命軍閥の卵」たる第二十鎮第八十團第三營をもつて、その起源をなし、第二、第十六混成旅によつて、その基礎を築き、第三、民國十三年の北京クーデタ

一を機として、國民軍を建設し、第四、民國十四、五年の奉直戦において、一度大敗潰亂したが、十五年の秋に至り、五原誓師によつて再興し、第五、翌十六年陝西より河南進出に當りて、新たに國民革命第二集團軍を改稱するに同時に、九方面軍編制をなし、大いに北伐の陣容をこゝのへ、最後に、第六、北伐完成後南京における編遣即ち軍縮會議の決議によつて、十二個師に改編され、大體六期にわたる變革を経て、今日に及んだ。而して組織及び編制上の變革と同時に、思想、標榜、主義、主張等においても、その都度急激なる變遷に會した。即ち、第一、第二十鎮時代は北洋軍閥の時勢におくれた保守的雰圍氣の裡にあり乍ら、少壯士官の一部には早くも反清革命の空氣が浸潤した。第二、第十六混成旅時代に至り、全旅をあげて共和軍となり、復辟を戦ひ、また同時にクリスマス・デネラルとしての馮玉祥を旅長に戴いた同旅はバイブルを操典の一つとなす基督教軍となり、米國公使ラインシユの如き、馮玉祥軍を指して「東西隨一の模範軍」なご賞讃するに至つたが、第三、北京クーデターに際して國民軍を建設するや、「救國愛民誓不擾民」の標語を記した腕章をつけて救國愛民主義を唱へるに同時にソロ／＼基督教から遠ざかつて、「赤いロシア」に近より始め、第四、五原誓師に際しては、國民黨に入黨して、三民主義を信奉し、「我們爲廢除不平等條約而拚生命」の標語を胸に記して、狂烈なる排外政策を鼓吹し、今現にこの方針を繼續しつゝある。

かくして、西北國民軍は既往の二十年間、バイブルから三民主義へ、清朝に忠良なる王社黨から、赤味を帯びた革命軍へ、右から左へ、白から赤へ、信仰から宗教打破へ……まことに急激なる變遷を經過した。然し、かゝる「極端から極端へ」の變革の道程においても終始一貫して變らぬ點も少くない。即ち、國民軍は其創設時代から今日に至るまで、第一、馮玉祥を中心として、常に彼の周圍に結束してゐること、第二、馮玉祥の個性的反影として、禁酒、禁烟が勵行され、將卒の操行頗る良好であること、第三、軍紀嚴肅にして、士官の生活が兵卒化してゐると等の諸點は、時代の變革に係らず、常に國民軍の特色とし、またその誇りとして終始變らぬところである。

五

國民軍は馮玉祥獨創の軍隊である。將卒の士風、軍隊の組織、その戰略等すべてにおいて、馮玉祥その人の個性の反影が認められる。三民公司出版の「馮玉祥革命史」(著者不明)を讀むと、國民軍の特色として、特に左の五點があげられてある。多少賞め過ぎた點もあるが、大體において眞相を擲んでゐるやうに思ふ。

一、西北國民軍は總司令より火夫馬丁に至るまで、服裝一様で、僅かに符號を以て官職を區別するのみ。起居飲食總べて簡素を旨とし、古人の所謂「士卒に甘苦を同じうす」と云ふ風がある。また全軍の將卒一人として、喫烟、飲酒、賭博、放蕩をするものがなく、たゞせば河南省の如き妓

女その跡を絶ち、酒樓蕭條を極めてゐる。軍服を着けたるものは騎馬或は自轉車に乗るこゝを得るも人力車に乗るこゝが出来ない。官邊の宴會は肴は僅かに五種、酒を用ひず、菓汁を以て之れに代へ、それすらもいつもあるわけではない。

高官も雖も、尊大振るこゝなく、某師長の如き「本軍の官長は大抵士兵の出身なので援擢昇進して師長もしくは旅長になつても、兵卒氣分を脱せぬ」と語つたこゝがあるが、これは極めて正直な告白であつて、こゝに西北國民軍の眞精が存するのである。

二、西北國民軍の士卒は總べて家人の如く、互ひに藹々たる態度をこり、嚴なるも酷に流れず、親密なるも狎するこゝなく、そこに相互扶助の精神が自然的に流露してゐるのである。

三、西北國民軍は朝より晩に至るまで一様に一定の課定あり。前線にあつても、敵と對戦中にあらざる限り、課程は平常の如くに進行する。故に士卒の德義學業は日に進み、紀律の嚴正公明なるは當然の結果と云はねばならぬ。

四、西北國民軍は一地點に駐屯する毎に、その地の橋梁及び道路を修築する。軍隊内には常に鐵工、木工、紡織の諸工場を附設し、その軍隊内にて技能を有する者を職工に擇び、部處を分つて仕事を爲さしめ、技能なき者には之を教へ、日給として相當の報酬を與へてゐる。馮氏會つて曰く「勤むるは事業の基礎である。現に兵士の田間より來る者は必ず各自何にか特種の技藝を有し



總司令馮玉祥の兵卒

てゐる。故に予は之を利用し、彼等をして、各自の技能を發揮して、漸次これを習熟せしめ、吾軍に於てあらゆる需要品を自給するやうにし、同時に兵士を練つて、勤勞困苦に耐ふるの習慣を作らうとしてゐる。是れ實に一舉非常の利益あることで、歐米諸國は舉國皆兵なるも、國家太平の時は各自の業務に従はしめてゐる。將來中國も亦斯くせねばならぬ。現に吾軍における軍事以外の工作はたゞ遊民式の軍隊をして職業的軍隊に改變せしむるに過ぎない」と。

五、各長官は軍隊内に在つて、日々愛國愛民の教條を諄々兵士に説き、反覆厭はず繰返へし、積んで習を成さしむ。古人の所謂「日に國人に、求めて而して之れを申敬す」はまさにこの類である。「同仇敵愾」の志氣を發揚して「勇あるものは方を知る」の人才を育成してゐる。これ對内的には、主義ある革命の重鎮たらしめ、他日對外的には眞の愛國々防の強軍たらしめんとする所以である。

六

また左記は民國十六年十二月、上海の教育家五人と新聞記者二人の一行が開封に赴き、西北軍を實地に視察した時の報告で、これもまた馮玉祥及び國民軍に對して讚辭を呈し過ぎた嫌ひはあるが可なり詳しく國民軍の現状を描寫してゐる。

予等一行は十二月五日午前一時開封に着した。此の日夕方、馮總司令も亦、前線より歸來したの

で、六日先づ馮氏を訪問した。馮氏は戦塵に疲れた様子であつたが、元氣は潑刺として、誠摯謙讓、明晰なる頭腦、流暢なる言語でわれ等を應待する態度は、現代軍人中最も傑出した人物なるを思はしめた。

予等は馮氏の許可により、翌日開封駐屯部隊を參觀するこゝなつた。即ち七日未明總司令部外交處科長徐功甫氏の同導で、第三方面軍第六軍第十五師司令部に往く。

司令部は前督軍公署の舊址に在り、師長孫桐萱は直隸交河の人、參謀長賀粹之は直隸文安の人（保定軍官學校卒業）旅長趙仁泉は直隸保定の人、師旅長もに誠摯、謙讓、質朴、全く馮總司令そのまゝで、參謀長も亦謹直な人であつた。

恰度軍中の朝會の際であつた。師長の案内で、室内に小憩し、八時「術科」の開始もこもに營舎に入り、これを參觀した。時に参加者は手槍隊、交通隊、機關槍隊迫撃砲隊で、手槍隊は擊劍術（劈刀術）を、交通隊は銃劍術（刺槍術）を演じたが、總べてなかく練熟したものである。手槍隊の演習の時は皆なしやつ一枚になり、手に大刀をふりかざして、縦横に飛躍す。惜むらくはわれ等武術に暗らくして、僅かに刀光の閃に歩武の整齊たるを見るのみであつた。

聞く所に依るに、最近數次の戰爭に、手槍隊は常に軍の中堅をなし俞々白兵戦に入りて肉搏するときは銃砲は全く用をなさず、手に持つものは大刀のみ。西北軍人は銃彈を尊重するが故に、大

刀を以て殺敵の主なる利器と爲さざるを得ないのである。

機關銃及び迫撃砲の演習に際し、趙旅長は詳細に解説を與へてくれた。機關銃は水壓式で漢口工廠の製作にかゝる。銃量重からず、轉動自在、四面を射撃することが出来る。彈藥箱は銃身の左に在り、自動裝入式で、實戦時における最優秀の利器である。迫撃砲の製作は頗る簡單で、砲内鋼線無く、彈藥は銃口より裝填し、内に撞針あり、彈針と相撃つて發射する装置になつてゐる。彈丸の形は圓錐形にして、上部に四個の鐵片あり、矢羽に似てその効用も亦同じく、方向を定める用を爲すものである。

鐵片の間に火藥包を附す。藥包は形小さく爆炸を助くるものである。此の砲の製造方法たる極めて簡單にして砲彈の價格も亦廉である。國民軍のこれを用ふるは、單にその器の利あるによるのみならず、その甚だ經濟的なるが爲めである。西北軍の機關銃と迫撃砲とは大部分敵から捕獲したものである。軍中將校の談に曰く「吾軍は貧苦甚だしく、兵器を買ふの資無く、こゝに山積する武器は總て皆な命と取換で分捕つたものである」と。その語の悲痛なる玩味すべきものがある。

術科が終つてから、營舎内を參觀する。營庭は掃除が行き届き、纖塵の止むる無く、各室十六人、各人とも木綿の蒲團一枚、毛布一枚を給せられてゐる。土間に草を敷き、草上に蒲團をたゞしく

敷き、上に毛布を重ね、四圍を煉瓦で二重に疊み、縁を取つてある。これが兵士の寢床である。兵士は各々タオル一、齒磨粉及び齒刷子各々一、洗面器一つ宛を有し、刷子と粉とは洗面器の中に入れ、窓側の棚の上に排列し、タオルは床前に釣つた紐に懸けてある。總てが整齊、清潔、秩序整然としてゐる。聞く處に依れば、兵士は皆な軍服を解かずして睡り、一度警報あれば直ちに起つことになつてゐること云ふ。

壁には銃、劍を懸け、窓には手榴彈を配列してある。これを用ふる時、各人一銃一彈、暗夜に雖もその措置實に裕如たるものである。手榴彈はその形杵に類し、杵柄の上端に孔があり、孔内に紐を藏してある。これを擲つや、紐を引いて飛び、爆發するのである。われ等は各室を順次參觀したが、いづれも同一であつた。將校室も亦簡單であつて、一几一榻の外、何等目に附く物も無い。炊事場、竈等、實によく掃除が行き届き、火夫衣、割烹衣等も亦清潔無垢である。參觀が終つてから、室に入り少憩、時已に九時で軍隊では朝飯の時である。われ等は豫め兵卒と同食せんことを願つておいたので、師長と共に外院に至る。兵卒の一團は既に排列して教官より習字を習つて居た。聞く處に依れば軍中では毎食前必ず二字を覚え、一日に四字、日を積み、月を累ね一年には千餘字に及ぶこと云ふことである。習字の課業が終つてから左の吃飯歌を歌ふ。

是等の食事は

人民の與へしもの。

我等は正に

人民の爲めに努力しなければならぬ。

帝國主義は

國民の敵なり。

國を救ひ民を救ふは

吾等の天職である。

食事は野菜のスープ、粟粥各一桶、餅一籠、塩漬一皿にて、各組約十人。スープと粥とは碗に分けて盛り、漬物は一緒に一つついて喰べる。餅はこれを分けて取る。

碗、箸、飯、菜等皆な清潔にして座席の無い者は地に蹲つて食べる。師、旅、團長は教官と同食し、總司令も亦同じ食卓についた。われ等は此の日兵卒の間に入り雜つて、各々餅二枚、粥一碗を食したが、兵卒は皆な懇慫に食を勧めた。食事終るや、小憩後一時半師團司令部前庭にて政治講話が舉行された。この日講演者は王鴻池氏にて演題は「革命軍人の特點」であつた。開講前各部隊集合し、國民革命歌を歌ふ、曰く、

列強を打倒せよ、列強を打倒せよ。

軍閥を除け、軍閥を除け。

國民革命に努力せよ、國民革命に努力せよ。

戦はん哉、いざ戦はん哉、いざ。

十二時、學科が開始された。われ等は先づ火夫馬丁の課業から見ると。授業は「簡単な軍律」云ふのである。教官は營長の董幹郷氏で齒切れの好い調子で説き始めた。

次に參觀したのは歩兵隊で、學科は「精神書」、演題は「革命精神」、教官は參謀の周邊時氏。講義は仲々手に入つたものであつた。

最後に營長以下各級將校の課業を參觀する。學科は曾胡治の兵語録で、この日の議題は「誠實」、教官は賀參謀長でその講義は實に微に入り、細を穿ち、洽なく説き盡してゐる。學科の參觀が終るや、師長は特にわれ等のために、午餐の用意をなし、各將校も會食することゝなつた。座席は主賓雜坐、談論風發、實に愉快であつた。その時坐にあつた營長の某君は右襟に小さな紅い布を一條懸けてゐた。それは曾つて一度名譽の負傷をした標しである。

午餐後小憩、一時半各部隊の体操開始。体操の前に不平等條約撤廢の歌を歌ふ。歌詞に曰く

獨立よ!! 平等よ!! 自由よ!!

吾等は奮起して要求せん。

一切の不平等條約は
残りなく取除かん。

帝國主義の傲慢無禮。

そは吾等萬衆の敵也。

同志よ!! 努力せよ!!

目的を達せざんば止まざる可し。

この日の体操は鐵棒と木馬で、皆な元氣發洩、意氣旺盛、教官の指導懇切を極む。孫師長は危険の拍子毎に「もう好し好し」を掛聲する。即ち時に危険のある事を恐れてである。その態度は親切を極め、一家に於ける兄弟の親しみの如くである。

最後に師長が予等に批評を請うたので、最年長者が代表して詞を述べ、終つて、一同辭去した。

七

西北國民軍は叙上の如く、他の支那各軍とは全くその趣きを異にし、頗る特色の多い軍隊である。従つて同軍には長所もあれば、短所もある。北伐戦争の直後、馮玉祥總司令自らその軍令中に國民軍の長所と短所とを指摘し、全軍の將卒に訓戒を加へたことがある。同軍令の要點を摘記すれば左の如くである。

國民軍の長所は左の六點である。

一、作戰命令はよく統一徹底し、各部隊は常に所定の計畫によつて行動し、且つその行動は比較的迅速である。即ち、命令一下、全軍擧つて手足の如く、極めて機敏に行動する。

二、戦闘精神はや、鈍重の嫌ひあるも、責任觀念強く、また各軍互ひによく策應し、友軍の苦戦を傍觀するが如きずるをきめることなし。曾て文正公曰く「古來義士仁人の用兵の道は惠ら人の急を救ひ、人の圍みを解くことを重んずるにあり」也。國民軍將卒の精神はまさにこの格言に一致す。

三、國民軍の將卒はよく勞役辛苦に耐え、殊に各將領は親ら兵卒の師表となり、よく衆志の一致團結をはかる。衆心團結すれば全軍の精神一致し、その結束を固くす。

四、國民軍の將卒は勇氣ありて死を恐れず、犠牲的精神強く、四方優勢の敵を受くるも、必ず勝利を占む。死を恐れざるの氣概ありてこそ、戰に勝ち得るのである。

五、國民軍將卒の大多數は同軍の使命は個人の利益をはかるにあらず、國家、人民、主義のために奮闘するにあることをよく了知してゐる。

六、國民軍の將卒は人民を愛護し、援助し、農民の作物を大切にし、且つ到るところ、公共衛生を提唱する。その結果國民軍は常に人民の同情と後援を有する。

次に國民軍の短所を擧ぐれば左の如くである。

一、國民軍は北伐大戰後や、もすれば驕慢に流れ、只だ我あるを知つて、人あるを知らず。友軍の缺陷に對してこれを蔑視する傾きがある。共同の戰線上にありては須らく互助の精神を以て終始し、人の我に及ばざる者はつこめて、これを扶助すべきである。

二、國民軍の將卒は軍事及び政治上の知識に乏しい。宜しく諸般の施設を設けて智識の進歩をはからねばならぬ、然らざれば常識淺きが爲め、必ず天然の淘汰を受ける。殊に軍事に對しては常に研究を怠らず、その進歩をはかり、個人の修養につこむべきである。

三、國民軍の將卒は大義に明かならず、素りに嫉妬心をおこす嫌ひがある。自分のなし能はざる事人これをなすを忌み、或は恨む。憂ふべき惡癖である。

四、國民軍の最大缺點は、陽に軍紀を守つて陰に違背するの惡習である。一切の禁令に對し、これを瞞着して實行せず。この種の惡習は上は高級司令部より、下は總指揮部、軍部、師部、旅部に及んでゐる。若しこれを改めなければ將來全軍の覆滅の禍を招くに至るであらう。凡そ各人は自治能力あり、自治精神あつてこそ、始めて軍人としての資格を有するものと云へるのである。

此の短所については各將領も特に注意を要するところである。その「長所論」はあま

國民軍の宣傳部長簡又文も亦、國民軍の長所及び短所に就いて論じてゐる。その「長所論」はあま

りに誇張の讃辭を並べ過ぎて、齒の浮くやうな感があるが、なほ當らずとも遠からぬ點もあり、ここに併記して参考に資する。

國民軍の第一の長所は、その紀律の嚴肅なることである。

「寧ろ餓死するとも、民食を奪はず、凍死するとも民屋を侵さず」とは、國民軍の格言であり、且つ心口一如、言行一致、何處に到るも、秋毫も犯すこと無く、雞犬驚かず、これによつて民心を得、民衆の歡迎する所となる。軍の防備を撤し、他に遷る度毎に、人民は到る所、轅に攀ぢて痛哭し、恰も父母を喪ひ、または、故山を失へるが如くであつて、確かに「民を擾さず眞に民を愛す」の口號にそむかぬ。北京駐屯の三ヶ年間絶えて人民を欺くやうな事件を發生したことなく、却て人民が兵卒を騙したことがあつた位である。即ち奸商は物品を賣るに當り、兵卒が品物を買ふに當り、値切れぬことを知つて、殊更かけ値をつけたものである。然し、強いて値段を争へば、強買強賣の罪によつて軍律に問はれるのである。要するに「國民軍は人民の軍隊なり」とは國民軍の最も大切な口號であり、また同軍本來の特色である。第二の長所は將卒の極めて勇敢なることである。「戦時は猛虎の如く平時は綿羊の如し」とは國民軍の口號である。ひゞ度び戰場に臨むや、全軍の將卒は擧つて、龍虎の如く勇敢に戦ふ。現に前線の指揮に當るは鹿鍾麟、宋哲元、劉郁芬、孫良誠、孫連仲、韓復榘、石友三、馬鴻逵、劉汝明、張維璽、趙守钰、鄭大章、吉鴻昌、

梁冠英、馮治安、門致中、楊虎臣、鄧寶珊、韓占元、韓德元……等の如き勇將であるが、みなひゞしく山を下る猛虎の如く、その戦績は一々詳述に違ないのである。戦酣になれば軍長も師長も常に最前線に臨み、自ら銃を執る者さへある。馮玉祥は戦争毎に、令を下して、各上級長官の前線に赴くを禁じてゐる。これは將官が勇敢冒險に過ぎて犠牲となり部衆を危険に置くを恐るゝからである。奉軍は國民軍を「老綿羊」と呼んでゐる。蓋し國民軍は冬期老羊皮を着る故であらう。一度び「老綿羊」の來るを聽けば、奉軍は即ち心膽を寒うするのである。西北軍中最も精銳なるは大刀隊であつて、大刀隊の兵士はみな一桿の長槍一桿の連發式拳銃一柄の大刀を有してゐる。敵に臨む時には三つの物を前後使用し、暗鳴叱咤、向ふ所敵なく能く抵抗し得るものがない。大刀の向ふ處只だ血肉亂れ飛ぶを見るのみで、死屍山野に横たはり如何なる堅陣も雖も、紛碎せざるは無く、敵を克たざる無き有様である。白露兵は至つて兇悍であるが、唯だ大刀隊のみには收服してゐる。白露兵は彈丸に胸を貫ぬかるゝを恐れないが、大刀隊の襲撃には戦慄して色なく、大刀に斬られて、皮破れ、肉裂け、尙ほ死に切れずに苦しんでゐる戦友を視るときはさすがの白露兵も慄然として敗走するのである。全軍毎師毎旅に總べて大刀隊がある。隊兵の選抜は極めて嚴重で訓練も極めて苦しく、刀法は總べて中國の國技である。以前戦争の際には各兵士臂上に一つの皮章を佩び「我等戦ふ際には先づ彈丸を用ひ、彈丸盡きれば刺刀を用ひ、刺刀役

せざるに至れば、槍を用ひ、槍折るれば拳固を用ひ、拳固碎ければ口を以て咬む」を上書してあつた。故に全軍の兵士はあくまで勇猛にして死すも敵に降る者はない。且つ常に少數の兵で衆敵に勝ち、敗戦を轉じて勝利をなすはひこしく勇氣の致す所で、最近の奉軍閥の苦戦に際し、彈丸缺乏のため、常に闇夜突撃し、唯だ白刃横飛、血肉相ひ搏つ術によつて、頑敵を織滅した如き實に悲壯を始めたのである。

西北軍の弱點の第一はその地盤の不利なところである。

西北軍の地盤は馮玉祥自ら選抜したものである。民國十三年北京クーデターの後、執政府は馮氏に、國民軍のために駐兵地の任意選擇を命じたので、馮氏は武漢もしくは江蘇等の豊饒な地方を要求することも出来たのであるが、然し、馮氏は特に察哈爾、綏遠、甘肅の如き人煙稀薄荒蕪半開の地域を選んだ。蓋し馮氏はかゝる地方に據つてこそ、始めて國民軍は刻苦の生活、耐勞の習慣を養成し得るに信じたからである。西北地方は交通の便少く、省民疲弊して歳入涸渇し、土地の産物は糧食を始め、すべてに缺乏してゐる。されば一度強敵に會し、長期間その攻圍を受くる時は、非常の窮境に陥るのである。

第二の短所は敵の多いことである。古諺に曰く「高木風多し」也。馮玉祥は志を立て、赤心國を愛し、また群雄の間に、高くその頭角をあらはした。馮氏は性來直情徑行、人に迎合し、また妥協す

るを肯ぜない。これがため、馮氏は人に嫌惡され、四方に敵をつくるのである。帝國主義者や、舊軍閥は終始馮氏を敵とし、これが討滅をはかつてゐる。去歲張作霖と吳佩孚の二大勢力が聯盟し、列強またこれを後援し、ために國民軍は腹背敵を受け、全軍敗乏潰亂の苦境に陥つた。たゞ、民國十五年來、南北の國民革命軍聯合一致再學をはかり、漸やく奉魯軍を討伐することが出来た。第三の短所は人材の缺乏である。全軍の士官はみな多年馮玉祥の幕下にあり。その中の劉驥、曹浩霖、石敬亭、唐悅良、蔣篤弼、熊斌、鄧哲熙、何其鞏、吳錫祺、任右民……等は内外の大學を卒業し、學識經驗ともに深い、その他の將領は多く、身を卒伍より起したものである。國民軍の幹部に缺員が出来ても、下級より陞進せしめて外より補充することがない。その結果全軍の團結的精神は鞏固であるが、外から優秀の人材を吸収することが出来ぬ。一旦新領土を得、また勢力を擴張した場合、直ちに人材の缺乏を感じるのである。然し、中國の社會は甚だ不良で未だ總ての優良な人材を信するを得ず。また信じ得るも、未だ能く國民軍に加つて、困苦を嘗め勞苦に耐ゆることが出来ない。馮氏は深く信賴し得る者のみ採つてゐるため、國民軍の結束がたく、また先年大敗後、流離喪失の後も、全軍は尙ほ一体に結合し、再起奮闘することを得たのである。國民軍の將領はみな政客を憎惡し、之れを蛇蝎視してゐる。これまた異分子の潛入を恐れたものに外ならぬ。

第四の短所は政治上の失敗にある。馮氏は軍人であつて、政治家では無い。且つ從來軍人は政治に干渉すべきものでなく、軍隊は政府の指揮下にあつて、たゞ兵を練り、國難を救ふを以て、旨すべきであるとなして來た。従て馮氏は政治方面においては自發的に何等徹底的の主義主張を出さなかつた。北京クーデターの後も段祺瑞に倚り、その執政を擁護し、敢て自家の政見を行はうとしなかつた。かゝる場合人選當を得れば治績あがるも、當を失すれば、政府も亦西北軍も亦その立場を失ふのである。國民軍はその當初たゞ一つの戦闘勢力であつて、政治的もしくは社會的勢力ではなかつた。従つて國民軍に對しては、國內の政治的もしくは社會的勢力にして、これを後援し、または指導するものがなかつた。そのため馮氏は自ら高遠にして雄大な理想を抱負を抱き乍ら、これを遂行することが出來ず、徒らに混沌たる時局の中に、孤軍奮闘して來たのである。漸やく民國十五年九月十七日五原誓師に際して國民黨旗を接受し、全軍黨化も亦、國民黨の主義と政綱を容れ、また黨の指揮下に立つて、到る處、民衆組織の擁護を受け、こゝに全軍の面目一新するに至つた。馮氏は力全身に充足し、また赤誠以て國を愛する。馮氏一度悟るころあれば、全力をつくして、勇往邁進、山をも抜くのである。南方から北上して、西北地方を視察するもの、ひさしく西北領土到るころ正氣勃々たるをおぼゆるも決して異にするに足らぬ。

八

西北國民軍の最大缺陷は何か云へば、それは云ふまでもなく、その財政上の缺乏である。

國民軍は北京、南口、張家口の敗戦以來、軍資と武器にはいつも缺乏し通しである。北伐は成功したが、北京と天津は閻錫山に取られ、一時手に入れた山東省も蒋介石のために取り上げられてしまつた。その地盤たる甘肅、陝西兩省は元來物資に乏しい地方である上に、この兩三年間、凶作のために、人民の餓死するもの幾十萬を算する云ふ状態である。南京の國民政府はその直接配下の第一集團軍に對しては十分なる支給を與へてゐるが、第二集團軍たる國民軍に對する支給はいつも出し過ぎつてゐる。これがため、國民軍の將卒及び西北方面の諸官吏の俸給は最少限度、否な、極めて僅かなものである。一時は士官も兵卒もおしなべて、月五元、文官は二十元平均であつたこともある。北伐完成後、多少はよくなつたであらうが、士官や高級文官に至つては、他の軍、他の省のいづれに比較しても、わりがわるい。たゞに俸給が少いのみならず、酒も飲まれぬ、煙草も吸はれぬ、うっかり淫賣でも買はうなら、恐ろしい罰を加へられる、そして朝起きせねばならぬ、仕事が多い……たまつたものでないのである。しかもなほ數十萬の將卒と青年が馮玉祥の指揮下にあつて彼の手足の如く動くのである。ある人、國民軍の一青年士官に向つて「貴公等は何のあてがあつてかゝる軍律の八釜しい、俸給の少い國民軍に従つてゐるのか」と尋ねたところ、青年士官は「第一、

衣食が保證されてゐる。第二、出世が出来る。第三、家族の生活が安定し得られる」を答へたさうである。

かくして、月々定まつた俸給は甚だ少いが、しかし、部下の吉凶禍福に際し、馮玉祥は思ひ切つて多額の祝儀もしくは見舞金を與へる。たゞへば部下の婚禮祝や、その父母兄弟の弔ひなきについては、まことに手厚い待遇をしてやる。また、國民軍には戦死者の名簿があつて、遺族救済の方法が定めてある。これは他の支那各軍には例のないことである。尤も國民軍でも兵卒になるに、その出身や家族なき不明のものが多く、従つて戦死者の名簿をつくつても、その遺族として救済を受けるものは甚だ少い。しかし、國民軍に戦死者名簿がそなへられ、且つ遺族救済法が定めてあること云ふ一事は、國民軍の兵卒に對して、多大の慰安であらねばならぬ。これも亦馮玉祥式兵卒收攬策の一つである。

國民軍の特色の一つはその移動式士官學校である。馮玉祥は河南全省を手に入れて後、軍官學校を新設し、中等學校卒業程度の青年千五百人を選抜して入校せしめた。三年卒業で、軍事と政治と兩方面にわたる教育を與へ、將來國民軍の中堅たるべき「新らしき士官」を養成してゐる。但し、國民軍の軍官學校は一定の校舎をもたない。その所在地もきまつてゐない。即ち國民軍の軍官學校は馮總司令の行くところに伴はれ、馮の鄭州にある時は、鄭州にあり、開封に行けば、またそこへ移

る。馮玉祥の北京もしくは南京等へ一時出張する如きこのあつた場合も、一部の學生は必らず、彼に隨行し、行先地において馮の講義を聞くのである。蓋し馮玉祥は自ら軍官學校を統裁し、自ら教鞭をこり、自分の理想とする型にはまつた士官を養成しやうとしてゐるのである。總司令まことに移動する士官學校は國民軍のそれを以て矯矢しなければならぬ。

馮玉祥は昨年夏北伐戦争のいよく完成を告げた時、國民軍の將卒に向つて、訓令を下し、各自大いに讀書して、智識を涵養すべきを命じ、讀書獎勵の理由として特に左の四點をあげた。

第一、各將卒は漸次年々昇任する。而して位置が高くなれば、なるほぎ、責任が重くなつて来る。従つて讀書せざれば、位地の向上に應ずるだけの智識に缺乏を感じる。恰度店を擴げて、その貨物が小店時代と同じであるやうなことを、なるであらう。

第二、世界の智識は日々急進してゐる。我等にして讀書せず、智識の向上をはからぬならば、牛車にあぐらかいて飛行機を競争するやうなことを、ならう。

第三、我等個人は枝葉のやうなもので、國家は幹である。幹を救ふのが枝葉の生活を保つ所以である。救國の事業は三民主義を知つて始めてその大成を期し得る。三民主義は無學では理解が出来ぬ。

第四、五權憲法には考試の規定がある。官吏は考試に及第せねばならぬ。平生讀書せねば考試に

及第することが出来ない。今や、戦争は終つて世は太平である。諸士は此の時に學問せねばならぬ。

▼ 巨大な兵卒 ▲

北伐戦争の初め、馮玉祥の潼關から鄭州行きの際、副官處では特に總司令乗用のため、特別車を仕立て、おいたところ、馮玉祥は驛に到るや、特別車には參謀官達ちをのせ、自身は兵卒の乗つてゐる無蓋貨車に乗り込み、兵卒もこもに風雨にさらされ乍ら、鄭州に向つた。列車の鄭州に着くや、漢口から北上した國民政府委員等が多數驛頭に出迎へたが、特別車には馮總司令の姿が見へない。まご／＼してゐるうちに、無蓋車の中から灰色木綿のナツバ服を着て、背中に雨傘と饅頭袋をを負ふた一人の「巨大な兵卒」がこ／＼と降りて來た。それが總司令馮玉祥であるこ聞いて一同は思はず相顧みて驚嘆し、暫らく呆然たるものがあつた云ふ。

十三 馮玉祥を繞る人

子飼の乾兒・人材主義・全軍馮姓たゞ一人・國民軍
の五元老・國民軍の新幹部・軍屬出身の文官・客將
ご外様政客・國民軍も畢竟支那軍隊か・韓復榘は明
智光秀か・李徳全ご馮洪國

馮玉祥の人を用ふるや、先づ勤務年數を第一の條件とする。如何に優秀なる人材でも、長く部下として用ひた上でなければ容易に信頼を置かない。従つて輕々しく重要な地位を與へない。彼は配下の士官にして勤務年數の四年に滿たざる者に對しては、如何なる場合においても、絶對の信用をおくことがない。されば西北國民軍の將領の多くは、馮の第二十鎮時代、もしくは第十六混成旅長以來の部下である。即ち馮が十數年間その幕下において、その人物ご才能を試験し、長所も短所も見抜いたいはゞ「子飼の乾兒」なのである。

今一つ、馮玉祥幕下の將領について特筆すべきことはその出身地の區々なることである。支那の政界及び軍閥間では、その出身地が重用なる關係を有する。段祺瑞が安徽及び福建出身者を以て安徽派をつくれる、曹錕の下に直隸派の覇を唱へたる、皆なその出身地によつて勢力をなしたのである。また支那の海軍は福建閥に據り、外交官は多く浙江出身者である。然るに國民軍の將領には郷土關係の拘束がなく、張之江ご鹿鍾麟は直隸省出身で、李鳴鐘は河南省、宗哲元は山東省、薛篤弼は山西省、而して馮玉祥自身は直隸省に生れ、籍を安徽省に置く。かくして國民軍の巨頭は各省出身の寄合である。これは武人としての馮玉祥の生立ちたる第二十鎮第八十團及びその立志の基礎をなせる第十六混成旅の將卒が、偶然各省出身者のより集りであつた關係もあらうが、しかし、その

主なる原因は、要するに馮玉祥の人材主義にあると見なければならぬ。

また馮玉祥の配下の將領には、兵卒出身者が多い。従つて軍官學校、陸軍大學または外國留學出身者が少い。これもまた馮玉祥が、自身卒伍より身をおこしたことに因るに同時に、士官の登用に當り、人材主義をこつて、學歷等に拘泥しなかつたことにも因るにしなければならぬ。支那官界及び軍閥の通弊は人の登用に當り、第一、郷土關係によつて黨同伐異をなし、第二、親族故舊を重用することにある。馮玉祥は前記の如く郷土關係には少しも拘泥したことがないのみならず、また特に親族を重用したこともない、孟憲章は馮玉祥の人材登用方針に就いて、記して曰く

馮氏の用人標準は「親しみの如何を問はず、只だ其の賢なるを採る。郷土の何所かを問はず、只だ其の能あるを採る」にある。曾て彼と同姓の親戚某が遙々洛陽からやつて來て、馮氏に何か官職を與へんことを懇請した。然し馮氏は某の碌々として何の取柄も無きを知り、「本軍には馮三云ふのは只だ余一人のみ」にて、つひに登用しなかつた。馮氏の實兄某は人皆な「馮大人」三云ふて居るが、只だ「馮大人」三尊稱するに過ぎず、未だ何等責任ある官職に就いたことがない。馮氏には一人の義弟があるが大學を卒業し、相當の才能があるので、電報翻譯所で採用したことがある。即ち親戚だからとて、必らずしもこれを避ける三云ふ譯けてでもない。

二

馮玉祥幕下の最故參者にしてまた従つて馮の信賴最も厚きは、誰か三云へば、先づ張之江、鹿鍾麟、宋哲元、李鳴鐘及び劉郁芬の五人をあげなければならぬ。この五人はともに馮の幕下にあること二十餘年。馮の腹心の部下であつて、常に盛衰喜憂をともにし、國民軍の中堅をなして來たのである。左記は五人の略傳である。



張之江は字子帳、子薑、直隸既山人、本年四十八歳。馮玉祥の將領中、馮の部下たる年數において最先輩である。彼は李鳴鐘、宋哲元、劉郁芬等とともに第二十鎮時代から、馮玉祥の配下にあり、また馮を扶けて、第十六混成旅の建設に當り、その幹部の一人として、大いに盡瘁するところがあつた。張之江は馮玉祥と同じく卒伍より身を起し、馮の下に第十六混成旅の騎兵營長を振出し、同旅の歩兵第二團長を経て、民國十年八月、馮玉祥の第十一師長たるに及び、第二十旅長にあげられ、十二年十月には新編の第七混成旅長に進み、更らに第七師長に累進し、第二奉直戰爭には討逆第三軍第一路司令となり、十三年秋北京クーデターの後察哈爾都統に任ぜられ、張家口に駐在した。

民國十四年秋の奉國戰爭に際し、張之江は國民第一軍の主力を率ゐて京津間に出陣し、李景林軍と對峙して可なりの激戦をやつた。同年十二月三十日、廊坊で徐樹錚暗殺の役に當つたのは、恰度その頃同地に司令部を置いてゐた張之江である。

民國十五年の年頭、馮玉祥が四圍の狀勢の不利なるを見て、下野を決し、外遊を企つるや、張之江は察哈爾都統として西北邊防督辦をかね、馮玉祥代理の大役に當つた。

馮玉祥の下野後、馮の消極策に反して、對奉主戰論を唱へたのは、張之江と鹿鍾麟である。云はれ、彼は鹿等と云ふにも、國民軍を率ゐ、南口死守、北京奪回の戦局に當つたのである。しかし、その頃吳佩孚と張作霖の提携成つて、討赤聯合軍おこり、岳維峻の第二軍先づ河南に破れ、次いで孫岳の第三軍も亦天津役以來潰亂して、友軍悉く四分五裂し、國民第一軍獨力を以て奉直聯合の討赤軍に對抗したるが、衆寡敵せず、その金城湯地を頼んだ、南口の嶮も漸く危殆に瀕したる折柄、熱河の多倫諾爾方面より奉軍の奇襲を受け、遂ひに國民全軍の大敗退を來たした。

この大敗北以來張之江は馮玉祥の信任を失つたものか、馮のロシアから歸つて以來、再び張を重要な地位におかず。一説によれば、五原誓師に際し、張之江は張家口敗退の罪によつて、半日跪坐の刑に處せられたと云ふ。その後北伐戦に際し、その部下が、軍需品の購入に際して、私腹を肥やしたことが發覺し、その責任を負うて、暫らく謹慎状態に置かれてゐたが、昨年來南京に派遣さ

れ、禁烟委員會長の閑職にある。



鹿鍾麟は字瑞伯、張之江と同じく、直隸人で、定縣に生れ、本年四十四歳。第十六混成旅の砲兵團長として馮玉祥の知遇を受けたのが出世のもので、爾來累進して、今や張之江の失脚後、馮玉祥幕下における將官中の筆頭である。

鹿鍾麟は、第一奉直戰爭後、馮玉祥の河南督軍に任ぜられることも、十一年河南警務處長となり、馮玉祥一流の禁酒、禁煙、女郎撲滅等の所謂「善良なる暴君振り」を發揮したものである。十一年十二月、第十一師砲兵第十一團長に任じ、十三年三月同第二十二旅長に進んだ。同年十一月、第二奉直戦に際しては、北京クーデターの主役を務め、京師警衛總司令に就任し、曹錕の幽閉、宣統廢帝の放逐等において、大いに赤味を帯びた辣腕をふるひ、同年十二月第一師長を兼任し、その間十四年十二月日本驅逐艦砲撃事件及び楊村における難波軍曹殺害事件をひきおこした。

馮玉祥の下野後、國民軍を率ゐて、先づ北京の防守戦に當り、ついで南口の嶮に據つたのは鹿鍾麟である。民國十五年春の北京防守戦は可なり猛烈なもので、連日奉軍の飛行機が、北京の上空を飛んで、幾百かの爆弾を投じ、また北京南方郊外では連日連夜砲聲ひびき北京は非常な危急状態に

おかれたが、しかもその間北京の秩序は一寸も亂れず、殊にその北京撤退に當つて、見事な退却振りを見せたことは鹿鍾麟をして敗け乍ら名をなさしめたのである。北京退却後、鹿は察哈爾都統を兼ね、南口の天險によつたが、民國十五年春四ヶ月間の奮闘もつひに、もちこたえず、全軍敗退潰亂した。

鹿鍾麟は張之江にも對奉主戰論の急先鋒として、南口敗退の責任者であるので、五原誓師に際して、一日跪坐の上、桿棒をもつて打たれ、厳しい體刑を受けた。しかし張之江は五原誓師後、豫備役に入れられたが、鹿鍾麟は直ちに一方の總指揮にあけられ、今日に至るも、馮玉祥の片腕となつてゐる。同じく南口及び張家口敗退の責任者であり乍ら、張之江のみしりぞけられ、鹿ひこり重く用ゐられてゐるは一見奇きすべきも、それには一つの理由がある。それは鹿が京師警衛總司令時代にためこんだ六百萬元を、五原誓師に際して全部投出し、馮玉祥再起の軍資にあてたからである云ふ。

北伐戰爭の第一期に際し、鹿鍾麟は第九方面軍總指揮となり、次いで第二期戦において北路總司令に任せられ、主として京漢線正面に當り、最初彰德を死守し、北軍の退却を追うて韓復榘軍を併行北進し、十七年七月三日、馮玉祥の先導役として北京に入城した。直隸人であり、また三年前北京の主人公であつた彼としては、そのまゝ、北京に居坐はる希望の切なるものがあつたであらうが、

京津衛戍總司令の地位は直ちに閻錫山に奪はれてしまつた。

北伐戰役終つて、國民政府の建設成り、馮玉祥自ら軍政部長となるや、鹿鍾麟も亦南京に赴き、馮玉祥の下に軍政次長となつた。最近の鹿は主として政治方面に活躍し、反蔣作戰のために東奔西走してゐる。



宋哲元は山東省樂陵人、本年四十三歳。第十六混成旅の營長より累進して、十二年十月第二十五混成旅長に進み、十三年第十一師長、十四年第四師長に昇り、同年十二月國民軍の全盛時代に、奉天派の闕朝璽に代り熱河都統に榮進す。

十五年春の國奉戰爭に際して、宋は北路總指揮兼暫編第一師長として熱河正面の防備に當れるが、戦利あらず、敗退す。

十六年北伐戰爭開始にも、第二集團軍第四方面軍總指揮として出陣し、北伐完成後、陝西省政府主席、國民政府軍事委員となり、編遣後第九師長に任せられ、今、陝西にあつて、甘肅の劉郁芬にも、國民軍の後方警備の重任に當つてゐる。馮玉祥の下野後、宋は國民軍現役將領中の筆頭である。



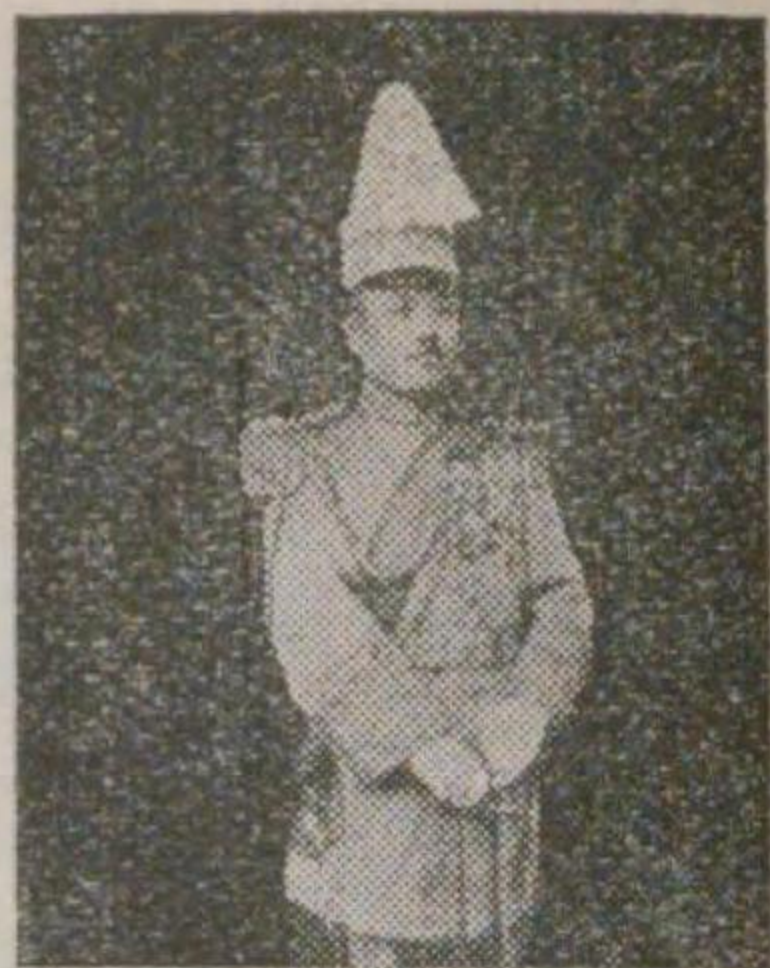
李鳴鐘は字曉東、河南沈邱人、本年四十四歳。新民屯時代から、馮玉祥の部下で馮玉祥の第十六混成旅長であつた頃、その副官をつとめた。馮が第十一師長となるや、第二十一旅長に進み、河南歸德鎮守使となつた。第二次奉直戦と班師回京の當時は、第八混成旅長として吳佩孚の北京入を阻止し、國民軍の編制にも第六師長にあげられ、十四年春國民軍全盛の當時、綏遠都統に榮轉した。

十五年一月、馮玉祥が西北邊防督辦兼甘肅督辦を辭して下野するや、李鳴鐘は甘肅督辦に轉じたるも赴任せず。同年三月鹿鍾麟の前敵司令たる後を襲いで京師警衛總司令に就任す。

馮玉祥のロシアにあつた當時、その國民黨入黨の決意を齎らして廣東に赴き、馮に國民黨本部との提携について、正式の手續きをこり、爾來國民黨本部に隨伴して、廣東より武漢に至り、武漢より南京に来て、今現に國民政府軍事委員會委員である。十七年鄭州市長となる。

北京クーデター直後の一年、國民軍の全盛時代、同軍の將領はその地位によつて、みなそれ／＼蓄財したが、五原誓師に當り、鹿鍾麟と樂哲元とは惜し氣なくその蓄財全部を馮玉祥の前に投出した。李鳴鐘も三十萬元ほぎ出したことは出したが、少々出し過ぎつて、おくれたため、馮の機嫌を損

じ、爾來政治方面に廻され、國民軍の現役に立たない。



劉郁芬は字蘭江、直隸清苑人、本年四十九歳。張之江、鹿鍾麟、孫岳と同じく、直隸省人である。苑縣に生れ、姚村陸軍小學校英文科を卒業し、また保定速成學校英文步兵科を卒へて、陸軍第十九鎮に入り、歩隊第七十四標第一營前隊排長を振り出しに、左隊隊官を経て、第十六混成旅の參謀官

となつたが、英語に通じ、また基督教徒として信仰を同じうした關係で、旅長馮玉祥の信任を受け、立志の基礎をつくつた。それから第十六混成旅補充營々長、第一團々附、歩兵第一團第三營々長、參謀長より、第十一師歩兵第二十二旅四十四團々長を経て、十一年九月鹿鍾麟の後を襲いで、河南警務處長兼警察廳長に轉じ、十三年二月第十一師歩兵第二十一旅々長に進み、また陸軍府將軍にあげられ、國民軍の編制にも暫編第二師長に進み、十四年八月、馮玉祥の甘肅軍務督辦を兼任するや、馮に代つて軍務代行のため、甘肅に入り、十五年一月、馮の下野にも、李鳴鐘に代つて、綏遠都統に任ぜられたが、そのまゝ甘肅に居すわり、國民聯軍駐甘總司令となり、北伐完成にも甘肅省政府主席にあげられ、また現に第七方面軍總指揮、陝甘青寧剿匪總司令となり、國民軍の後方防備の任に當つてゐる。

國民軍には幾多新進氣鋭の將領あり、多士濟々の觀あるが、中にも傑出せる材物を擧ぐれば、左記畧傳を掲けたる孫良誠、石敬亭、孫連仲、張維璽、曹浩霖、熊斌、劉驥、龐炳勛等をその主なるものとしなければならぬ。

三



孫良誠は卒伍より身をおこして累進し、團長、旅長、師長を歴任して、第一方面軍總指揮となり、新進武將中最も深く馮の信任を受け、北伐戰爭に際して殊勳を樹つ。北伐戦後十七年國民政府軍事委員となり、また山東省に駐在中、山東省政府主席委員に任ぜられたが、十八年五月、山東を撤退し、陝西に入る。孫良誠は現に國民軍の精銳を統率してゐる國民軍の再び中原進出する時は、必ず前敵總指揮に當るであらう。

孫連仲も孫良誠と同じく兵卒出身の實戰的武將で、北伐戦役に際し、第二集團軍第十二軍長として出陣し、間もなく第二方面軍總指揮となり、北伐戦後青海政府主席に任ぜられ、また十七年十月、編遣後第二集團軍第十二師長に任ぜられた。



石敬亭は字小珊、山東利津人。新民府中央陸軍第一混成協隨營學堂を出で、更に日本士官學校に學ぶ。十一年河南督辦軍務署長當時の頃より馮玉祥の信任を得、北京クーデターに際して、曹錕幽閉の局に當り、十五年國民軍騎兵第五師長にあげられ、五原誓師後、第六方面軍總指揮兼第廿二軍長として轉戦し、北伐完成後、山東省政府主席となり、間もなく山東省を孫良誠に引きつぎ、最近は國民全軍參謀長の要職にあり、馮玉祥の下野して山西に入れる以來、馮に代つて國民軍最高政策の處理に當つてゐる。

張維璽は北伐戰爭に際して國民軍第十軍を率ゐて戦功あり。戦後、陝西省政府委員及び國民政府軍事委員に任ぜられ、國民軍の改編にも、第八師長として陝西駐屯を命ぜられた。

曹浩霖は江西南昌人。日本陸軍士官學校、日本陸軍大學出身で、馮玉祥幕下における最高軍事智識である。歸國後駐粵滇軍卅一團長、雲南參謀長を歴任し、十三年日本陸軍大學卒業後、馮玉祥の幕下に投じ、參謀長にあげらる。十五年西北國民軍總參謀長として、北伐戰爭に當り、作戰の局に當つた。



熊斌は字哲明、湖北黃安人。北京大學を卒業し、軍界に身を投じて參謀本部第一局第三科員を振り出しに、主として軍政方面に當り、初め直隸派に屬して齊燮元、吳佩孚等に用ゐられたが、中途にして馮玉祥の幕下に入り、北京クーデターの後、北京にあり。十四年十月陸軍次長となり、南口敗退後、馮玉祥の内命を受けてソウエート・ロシアに遊び、馮の訪露の濼踏み役をつとめた。十六年國民黨訓政實施方策委員會警衛委員、十七年湖北省政府委員、國民政府軍事委員會委員にあけられ、また國民軍總參謀、國民政府軍政部航空署長等の職を兼ねてゐる。

龐炳勛は字更陳、直隸新河人、四十五歳。十六年八月國民軍第二集團軍第二十軍長にあけられ、國民軍の改編後、輜編第十四師長に任ぜらる。

劉驥もまた湖北出身で、北伐戰爭中、武漢にあり、武漢政府との交渉の局に當つた。當時國民軍は資金、武器ともに缺乏し、河南を手に入れて、中原に進出したもの、身動きならぬ苦境にあつたが、劉驥は巧みに武漢政府の當局を説きつけて、大砲若干、軍資二百萬元（一説には五百萬元）も

云ふ）を國民軍に提供せしめ、同軍の危急を救つた、こゝがある。劉はその功によつて、軍長にあけられ、また隴海鐵道督辦に任ぜられた。

四

馮玉祥幕下の文官は武官に比して、人材甚だ少く、且つその多くは、馮自身が軍人出身であるため、軍屬出身である。即ち第十六混成旅、第十一師及び國民軍の執法官または主計官から出て、督軍署員、軍政部員、もしくは省政府委員等に累進したものである。馮系文官の筆頭は薛篤弼で、何其鞏、丁春膏、劉之龍等も亦、馮の信任厚く、唐悅良は馮の姻戚で、馮系の唯一外交官である。その略歴は左の如くである。



薛篤弼は字子良、山西解縣人、本年三十七歳。山西法政專門學校を卒へて、民國元年山西河東地方、平陽地方審判廳推事を歴任し、三年馮玉祥の幕僚となりたるが、嚴格なる基督教徒であり、且つその謹嚴率直なる性格によつて深く馮の信任するところとなり、馮の秘書を振り出しに、七年湖南釐金局長兼第十六混成旅執法官、八年常德知事、十年咸陽知事、十一年陝西財政廳長代理、河南財政廳長を歴任し、同年馮の陸軍檢閱使として北京に轉するや、隨伴して北京に來り、京師稅務監

督となり、十二年司法次長代理、十三年司法次長より内務次長に轉じ、北京クーデターの後京兆尹に就任し、その間北京北城の鼓樓を反帝國主義の博物館となしたるこゝなさは有名な話である。十四年夏馮玉祥の甘肅軍務督辦を兼任するや、十月陸洪濤に代つて、甘肅省長となり、蘭州に赴任した。中原進出、北伐完成後十七年河南省政府委員兼民政廳長となり、更らに國民政府の建設成り、馮玉祥の南京に赴いて軍政部長となるや、同時に國民政府内政部長となり、十八年、閻錫山に内政部長の職を讓つて衛生部長に轉じ、中央政治會議委員財政監理委員會委員等の職を兼ね。

薛篤弼は京兆尹當時、北京發行邦字新聞「新支那」の主筆平井潑水氏を顧問とし、甘肅にも同氏を同伴し、最近また南京に招き、同氏に就いて、日本語を學び、頻りに日本との親交を求めんとしてゐる云ふ。



何其鞏は十四年、馮玉祥の秘書長にあけられ、馮の赤露に遊ぶや、これに同行し、五原誓師後、國民軍の代表として武漢に駐在し、北伐完成して、北平に青天白日旗翻へるや、北京特別市長に任ぜられ、京畿一帯において馮玉祥の勢力を代表してゐる。本年三十七歳。



丁春膏は字雨如、貴州織金縣の人、警官學校を卒業して、湖北、直隸、察哈爾に知事、道尹を歴任し、北京クーデター後西北邊防督辦署政務處長となり、北伐戦起るや、天津租界内にありて暗中飛躍し、現に第二集團軍駐平辦公處長及び河北省政府委員として、北平に駐在し、蔣介石の駐平代表何成濬を向ふに廻はして、種々の政治運動に奔走してゐる。

唐悅良は字公度、廣東香山人、本年三十九歳。米國セント、デヨン大學、エール大學等に學び、キユーバ駐在領事たりしこゝあり、馮玉祥幕下における唯一の外交通である。北京クーデターの後西北督辦公署外交處長として、辣腕をふるひ、十七年五月王正廷の國民政府外交部長となるや、その下に次長となつた。彼の夫人は馮玉祥の夫人李徳全の姉で、馮の親族關係にあるこゝも、亦彼の出世の一因をなしてゐる。

劉之龍は字子雲、東三省講武學堂を卒業し、吉林邊務督辦參謀より各地督辦參謀を経て、七年湖南省警務處長となり、その後馮玉祥の幕下に入り十四年崇文門稅關監督となり、現に馮玉祥の政治

顧問として、専ら政治方面に活躍してゐる。

◆ 黄少谷は北京大學教授より、馮玉祥の幕下に投じ、最近馮の秘書長である。本年三十一歳。

五

馮玉祥の指揮下には過去において幾多の客將があつた。北京クーデターの際、國民第二軍總司令胡景翼、同第二軍總司令孫岳の兩將は、國民第一軍總司令たると同時に、國民全軍の總司令たる馮玉祥の麾下に立つたのである。五原誓師の後、國民軍の中原進出にあたり、岳維峻が國民第二軍の殘兵を率ゐてこれに加はり、また陝西の西安を包圍して、馮軍と戦つた劉鎮華軍もまた中途にして國民軍に加はつた。河南進出後更に靳雲鶚軍も亦一時馮の指揮下に立つたことがある。しかしこれ等の客將に對しては馮玉祥の方から何等の信用を置かなかつた。同時に、客將側でも馮に心服せず。胡、孫兩將は早く病死し、靳雲鶚軍は十六年秋、岳維峻軍は十七年夏、相前後して、馮軍のために蹂躪され、靳、岳ともに逃亡して、その存在を失つた。

馮系の外交文官には現在國民政府外交部長王正廷がある。彼は北京クーデターの際、黃郛内閣に入つて外交總長となり、馮玉祥の勢力を背景にして大いに巾を利かせたものである。彼が十七年春黃郛の後を襲いで國民政府外交部長となつたのも、主として馮玉祥の後援によつたのである。しか

し元來王正廷云ふ男は支那式一流の官界遊泳術に長け、最近馮派の旗色振はざるを見るや、いつの間にか、蔣派に鞍替して、その地位の安定をはかつてゐる。

國民黨の領袖の中で、馮系に近しき見られてゐるは于右任であるが、于氏は北京クーデターの直後、北京にあり、また度々張家口に赴いて、馮玉祥と交遊を結び、且つロシアにおいても、同じ頃モスクワに滞在し、馮玉祥に三民主義の手ほさきをしてやつた。その後五原誓師の當時も、國民軍の帷幄に參劃したことがある。これ等の事情から推して、于氏を目して、馮派となすものもあるが、しかし于氏は國民黨の元老を以て自ら任じてゐる人で、政治方面においては、馮の先輩でこそあれ、馮の指揮下に立つを肯んずるものでない。國民黨内において、馮を代表するものは、同黨左派の首領郭春濤であらう。彼は五原誓師後、國民軍に入つてその「政治化」「革命化」運動の局に當つた。北京クーデターの當時、馮玉祥に接近した政客の一人に徐謙がある。彼は馮の張家口にゐた頃、その幕賓として優遇を受けてゐた。武漢政府の倒るゝや、再び馮の許に赴き、その庇護を受けたが、最近彼について何等の消息がない。

六

ある支那政客は、馮玉祥と蔣介石を對照批評して「馮は人物大なれども、狹量である。蔣は人物小なれども、度量が大きい」と語つたことがある。人物と度量の大小を轉倒した矛盾の説の如く聞

えるけれども、一面たしかに事實を穿つた批判である。蔣介石は國民革命軍の總司令としても、また國民政府主席としても、よく清濁併せのむの度量を示して來たが、馮玉祥は人を用ふるに當り、猜疑心深く、容易に人に信頼を置かない。少くも十年以上、彼の配下にあつて、精勤をぬきんでたものでないが、重要な地位を與へない。馮玉祥は師長になつても、また督軍になつても、はた總司令になつても、第十六混成旅長時代の偏狹な性癖がぬけない。そこがそも／＼彼が遠大な經綸を抱く大人物であり乍ら、人を容るゝ度量がなく、偏狹きな所以である。しかし、同時に内部の結果固き國民軍を建設し得た所以も亦實にこの嚴密周到なる人材登用方針にある云はねばならぬ。

私はまた會てある支那の政客から次ぎのやうな話を聞いたことがある。その政客の曰く「若し今日の支那武將をして悉く下野せしめんか、下野後なほその勢力を存續するものは、たゞ一人馮玉祥あるのみであらう。張學良をして現職を去らしめんか、奉天軍は直ちに張作相等の手に歸すべく、また閻錫山にして第三集團軍總司令を罷めんか、山西軍はもはや閻の軍でなくなるべく、蔣介石また然りであらう。李宗仁、李濟琛、白崇禧に至つては、その失脚さにもに廣西軍は四方に離散してしまつた。たゞひゞり馮玉祥だけはたゞひ第二集團軍總司令の職を去つても、國民軍は依然として彼の指揮下に立ち、彼の實勢力は彼の生きてゐる限り、消滅せぬであらう」云。

馮玉祥の既往二十餘年間にわたる波瀾重疊の閱歴を見るに、彼はこれまで三度絶望的苦境に陥り、

その所屬軍の指揮權を棄て、野に下つた。即ち彼が段祺瑞に睨まれ、その手塩にかけて養成しあげた第十六混成旅を奪ひあげられた時がその一つ、第二の失意下野時代は、彼が北京クーデターを敢行してかち得たばかりの直隸省を奉天軍のために奪はれ、その配下の西北國民軍が四離滅裂になつた時のことで、第三は最近蔣介石のために大彈壓を加へられた時のことである。

民國五年當時の段祺瑞は飛ぶ鳥も落す勢力をはつてゐた。彼に睨まれたものは誰もかれも一縮みに縮みあがつたものである。然るに馮玉祥は段の命するがまゝにおこなしく第十六混成旅長の椅子を投げ出し、天臺山に身を隠して、そ知らぬ顔で、時機の至るを待つてゐた。

果然民國六年張勳復辟の旗をあぐるや、馮玉祥は時到来りしなし、天臺山を下つて第十六混成旅長の不在に乗じ、自ら同旅の指揮權をこつて、復辟軍討伐の先鋒となり、北京一番乗りの殊勳をたて、段をしていやく／＼乍らその復職を認許せしめたのである。(第二章參照)

民國十五年、北京クーデターの直後、奉天軍大舉して直隸省に入り、臨時執政府は全く張作霖の傀儡となり、西北國民軍の旗色ふるはず、加うるに同軍の將領間に意見一致せず、鹿鍾麟の如き、北京死守説を堅持して動かさず。馮玉祥はこゝにおいて四圍の形勢不利を見てこり、民國十五年春、西北國民軍の指揮權をあけて、張之江、李鳴鐘等に譲り、自身は家族さきにもにロシアに遊び、數ヶ月間モスクワでソウエート政治の見學に没頭した。

しかも一度廣東軍北伐の師をおこし、國民革命の機熟すを見るや、彼は急遽モスクワより歸來し、綏遠の五原において國民黨旗を受け、北伐完成を誓ふや、十萬の舊部下は立ちどころに彼の麾下に集つて來た。(第六章參照)

然らば馮玉祥は如何にしてその所屬部下の間に、かゝる根底深き勢力を有するか。何故に國民軍は馮玉祥と切つても切れぬ關係にあるか。それには幾多の原因がある。一、今日の國民軍はも馮玉祥が當年非常な努力をもつて自ら編制し、改革してつくりあげた第十六混成旅を基本として出來たものである。國民軍はいはゞ馮玉祥の子飼の軍である。馮玉祥は國民軍の創業者である。二、國民軍の首領は武官も文官も多くは第十六混成旅出身である。馮玉祥の配下にあつて出世したものである。彼等の多くは北洋軍官學校とか陸軍大學等の學歷をもたぬ。彼等は國民軍に籍をおき、馮玉祥の配下にあつてこそ、その存在を認められるが、一本立ちでは出世が出來ぬ。従つてどこまでも馮玉祥の支配下に立つのである。三、國民軍の武將中にはえら物が少くない。然し御大馮玉祥には到底及ばぬ。その体力、腕力、精力、學識、辯舌、機略……等いづれの點においても、馮玉祥は國民軍の第一人者である。従つて彼の部下は悉く彼の前にあたまががらず、馮の命これ従ふの外ないのである。四、馮玉祥は第十六混成旅を創業した頃、大いに基督教を傳道し、各士官は指揮官たると同時に傳道師たらしめ、またその部下の兵卒も八割まで基督教の洗禮を受けさせたものである。かくし

て彼はその部下を同一信仰の下に結束をかためた。また馮玉祥自ら先頭に立つて、軍隊各部隊に向つて講演を奨励し、士卒の操行が改善され、士官と兵卒の關係が精神的に密接した。五、馮玉祥は中途にして基督教から遠ざかつたが、しかし、いつも彼には何等かの主義主張があり、標榜があつて、士卒を精神的に統一し、その結束をかためてゐる。即ち民國十三年の北京クーデターは「救國愛民」の標榜の下に、民國十五年の五原誓師には「被壓迫國解放」を呼號し、現在においては三民主義をかざし、不平等條約の撤廢、帝國主義の打倒を標榜し、いつも必らず何等かの目標をか、けて、部下軍隊の進むべき方向を明示し、以て士氣を鼓舞し、結束を固くする等はその主なるものである。

七

さり乍ら國民軍の將卒も、支那人である。支那人に向つてたゞ日本武士道の如きを求めても出來ないことである。國民軍の將卒が如何に馮總司令に忠實であること云つても、それは決して絶對的のものではない。利害相反すれば、「昨の味方も今の敵となる」こと云ふ支那軍閥離合集散の原則は、結束固き西北國民軍にも、これを適用し得るのである。即ち十八年五月、韓復榘、石友三、馬鴻逵及び席液池軍の叛逆はこれを實證した。

韓復榘は字向方、霸縣人、舊軍校學生にして、最初の模範連兵士より身を起し、民國二年、馮玉祥の配下にあつて、京衛軍に隨ひ、その知遇を受くること十八年。民國十五年夏、西北後防軍を率

るて苦戦に陥り、一時山西軍に編入され、五原誓師にともなひ、國民軍の精銳を率ゐて、陝西及び河南各地に轉戦し、戦功あり。北伐戦の最後の幕には、京漢線に沿うて、山西軍に「マラソン競争」をなして北進を争つたけれども、結局北京を山西軍に奪はれ、爾來河南に入り、河南省政府主席となり、開封にゐるが、本年春、蔣、馮關係悪化し、國民軍にこり、危急存亡の時に當り、彼は突如として、國民軍を離れ、中央擁護を聲明した。

最初韓等の叛反は馮玉祥が特に河南を緩衝地帯と爲さんがために、寢返への芝居を打たせたものであるとの説が傳はつたが、その後判明したところでは、明白なる叛逆であつた。そしてそれは一つの挿話がある。五月十九日潼關における軍事會議に際し、韓復榘が河南撤退に反對の意見を述べ、馮はこれを駁して、韓を罵倒し、諸將の面前で厳しく詰責したことがある。韓の叛逆はこの時に端を發したもので、明智光秀の織田信長に叛いたと同じ圖を見られる。

韓復榘寢がへりの直後、橋樑庵氏は河南省鄭州において彼を訪ねた。その時、韓は橋氏に、十八年間忠誠をつくし來つた長官馮玉祥に弓をひくに至つた事情を述べ、左の如く釋明した。

馮總司令の最初の作戦は潼關及び浙川に鞏固な防禦陣地を設けて、東、南よりする南京軍に備へ、潼關の上流大清關から黄河を越えて西北軍の主力を山西省に入れる計畫であつた。而して長い間の大旱魃で、水は涸れ、架橋材料たる民船の徴收も容易であるのみならず、當時この方面におけ

る山西軍の防備も手薄であつた。殊に西北軍の集中が極めて迅速に行はれたので、この作戦はある程度の成功を収め得る確信があつた。しかし余等は始めからこの計劃に反對であつた。なるほど馮氏個人の立場からいへば、これ以外の途はなかつたかも知れぬが、それは要するに和平統一云ふ國民の輿論に逆行するものであり、西北軍が成功すればするほど、支那は十七年六月の統一以前の暗黒状態に逆轉する外ないであらう。余等十名の同志が五月二十二日附を以て、動亂を早魁に苦しむ河南省民に訴ふる宣言を出し、更に翌日附で、主和の通電を發したのも、たゞ民國を動亂から救はんとする苦衷に外ならない。その必然の結果として山西突入の作戦が廢棄されたのは周知の事實である。

馮氏は一言にしていふと、頗る狷介な性格の人である。今日の失敗も畢竟この性格によるところが多く、この特殊な性格は外國人に對する時、一層鋭く働きかける。従つて馮氏下野の後、河南省が外國人にこつて住み心地のよい地方となることは斷言できる。しかし斷つて置くがかういつたからこゝて余は馮氏に對して何等惡感情をもつものでなく、今日こゝへも馮總司令に深い敬意と好意を抱いてゐる。馮總司令今後の進退はその環境が自然にこれを決するであらう。この兩三日來民間では馮軍が赤旗を掲げたといふ謠言が傳はつてゐるが、これは固より取るに足らぬ妄説である。私は過去十八年間彼の部下として起臥を共にしたものであるから、その心事は十分よく

承知してゐる。如何に苦しい境遇に置かれてゐるかはいへ、今更共產主義者の前に膝を屈するこゝは斷じてなからう。

韓の叛逆に際し、かねて何應欽を通じて蒋介石に接近してゐた石友三が道連れになつた。馬鴻逵及び席液池軍は必らずしも叛逆の意志があつた譯ではないが、退却路を遮斷されたので已むなく河南に止まるこゝになつたものである。

韓、石の叛逆は即ち國民軍も雖も支那軍團の離合集散反覆常なく豹變を事とする共通性を脱却してゐないことを實證したものである。自ら寢返へり、裏切りに巧みな馮玉祥も韓、石の離叛には豫期しなかつたものらしく、河南の獨立には流石の彼も色をなして驚怒した。

しかし、國民軍の大多數は今なほ馮玉祥の統制下である。且離反した韓復榘すら時々使者や信書を馮の許によせて、將來の提携をはかつてゐる云ふ説がある、即ち他の軍閥に比すれば、國民軍はたゞ韓、石の叛亂があつたにしても、なほ且つ結束固く、馮玉祥に對して忠實なる軍隊と云ひ得るであらう。但しこの「結束」も「忠實」もは、たゞ比較的であつて、決して絶對的のものでないことは云ふまでもない。

八

馮玉祥の夫人李德全は北京の基督教婦人會の幹事で、馮は信仰を同じうするところから、縁が

結ばれたのであらう。馮玉祥は嚴格なる基督教徒として、また禁酒、禁煙、禁賭、禁娼を以て八釜しい模範軍人として、他の軍閥巨頭のやうに蓄妾、遊蕩をなさず、それだけ家庭は極めて圓滿である。李德全女史は基督教婦人會の幹事であつた當時から練習した辯舌で、夫君ごにも種々の集會に臨んで、演説をする。河南にゐた頃は、さかんに婦人の放足運動を指揮したものである。

馮玉祥の長子馮洪國は先夫人(陸建章の姪)の子で、馮がロシアに親しんだ頃、モスクワ及びペンシングラードに留學したが、國民軍もロシアとの關係が絶えて以來、ロシアを去り、目下日本に留學してゐる。

▼馮玉祥の嚴父振り▲

馮玉祥がまだ張家口にゐた頃のこと。ある日于右任も馮の長子洪國が、北京から同じ列車で張家口へ着いた。馮は先づ于右任に向つて「先生は何等車で來られたか」と問ふと、于は「三等で來ました」と答へた。次いで、馮は洪國に向つて「お前は何等で來たか」と問ひ、洪國が「一等車で來ました」と答ふるや、父玉祥は眞赤になつて憤怒し「于先生の如き名士ですら、三等車で旅行されるのに、お前は學生のくせに、一等車に乗ることは何事だ」として、その場で、洪國の横つ面をボカ／＼とあの大きな手でた、きつけ、嚴し

く洪國の贅澤をいませめた。その頃の洪國は大の學問嫌ひで屢々學校を抜け出しては遊び歩いたものだ。一日洪國は同級生の病氣見舞ひを口實に密かに邊防公署用の自動車を引ぱり出して田舎道をドライブこしやれた。こゝろで運轉方法になれない彼は忽ち農夫丹靑の麥畑に乗入れ、そこらあたりを滅茶苦茶にした。農夫は非常に憤慨したもの、相手が督辯の子に來てゐるので泣寝入りしてゐたがそれを耳にした馮は早速農夫を訪ねて慰めた。農夫は督辯を見た瞬間禍を恐れて口をつぐんだが馮が「びく／＼するに及ばぬ損失は償ふから」こ優しく言ふので馮も同道して現場に赴き「公子は運轉方法を御存じなかつたからです。損害補填の必要はありません」こ言つた。折柄一臺の自動車が向ふから疾走して來た。車中の人物こそ歸り道の洪國であつた。馮は「勉強中の身で外出するさへいけないのに公用の自動車で乗り廻すこは何事か」こ大喝し、隨行の衛兵に命じ棍棒で散々に打たしめた。見兼ねた馮夫人李徳全の勸止も聞入れず、打つここ二百。棍棒が折れたので更に取換へて打續けた。その後洪國は公署附屬の鐵工廠に送られ鐵工の見習をやらされた。馮玉祥は五人の子持ちで、平常はなか／＼の子煩惱だが、時にあら削りの野性をむき出して、可愛い子にも、手こはい折檻をすることがある。

十四 馮玉祥の言論

天才に磨きをかけた雄辯・牧師、先生、そして志士
・思想上の三大變革・共和擁護ニ衣食住行論・文書
は冷靜平易、辨論は熱烈過激・「二草一木民膏民脂」
・朝會の問答・三句六字七問八綱十誠

馮玉祥は恐らく現代支那における武將中、最も優れた雄辯家であらう。彼がたいした學者でもなく、また深い思想家でもなくして、しかも驚くべき雄辯を揮ひ、聽衆をして感激悦服せしむるは、一はその青年士官時代から基督教に歸依し、軍隊及び市民に對して、傳道講演に馴れたことにも因るが、しかし彼の辯舌は單に修練の結果であるのみでなく、一面またその天才的であることも認めなければならぬ。即ち馮玉祥の雄辯は、天才に加ふるに、多年の修練を以てしたものである。

彼が演壇に立つて徐ろに口を開き、諄々説きだすあたりはまことに悠揚迫らず、牧師が學校の先生そのまゝの態度であるが、話頭一度帝國主義もしくは舊軍閥の攻撃に及ぶや、その銅羅聲を張りあげ、卓を叩き乍ら、慷慨悲憤の熱辯を振ふありさまは、眞に愛國熱血の志士である。しかも一轉して一般の世事に及べば、聲を和らけ、巧みに滑稽諧謔を加へ、人をして抱腹絶倒せしめる。やがて、結論に近づき、いよく熱して來るに、肺腑の底から吐き出すやうな太く強き大音聲を、滿堂の隅から隅へ響かせ、滿面朱を注ぎ、爛として光る眼をもつて聽衆を睨みつける、その見幕、その勢ひ……敵も味方も、彼の雄辯にジエスチュアにはおぼえず動かされてしまふのである。

私は十七年の夏、馮玉祥が北京に來た時、外交大樓の午餐會に招かれ、その席上、親しくその長廣舌を聽き、深くその能辯に驚歎した。殊にその甘肅行軍の苦辛談は悲壯を極め(第六章参照)、ま

た赤化問題に對する釋明は實に妙を得たものであつた。その一節に曰く

世間は云ふ、馮玉祥は「赤」である。また「南赤」は蔣介石、「北赤」は馮玉祥である。云ふ。もし「赤」を云ふことからして云へば、余は正しく「赤」であるに相違ない。余は赤血を以て赤人。戦ひ、赤心赤誠をもつて、無數の困苦告ぐるなき窮民を救はんことを志してゐる。しかし彼の共產主義の「赤化」は違ふ。また布を量る尺（「赤」も同音）も異ふ……

諸君は今日家を出られる時、夫人達は「馮玉祥の吃飯（赤化）も同音」に行くは危険だ」と止められたこと、思ふ。然し、卓上御覽の通り馮玉祥の吃飯は「赤化」でない……

巧妙なる諧謔は満場をして、思はず、ドット抱腹せしめた。

二

馮玉祥の幕僚にして、主に政治方面の宣傳に當つてゐる孟憲章はその編纂に係る「馮總司令之言論」なる一冊子の序文において、馮玉祥の雄辯を評して、左の如く讚賞してゐる。

馮玉祥は演説に長じ、また演説を好み、能く個人の精神と意思を全軍の最下層にまで、徹底せしめるに巧みである。初めて馮玉祥に接するものは、馮氏の魁梧な軀幹、さす黒い風貌、粗末な装を見て、かゝる粗放な人が、辯舌に長じてるやうとは……と怪しみ、馮氏の「演説の才」が實にその「治軍の才」と相伯仲してゐることを知らぬ。馮玉祥の演説を分析すること、そこに幾種かの特

長がある。(一)人情に練達し、理を説いて微に入る。(二)言葉は平易であるが、意味深長で、雅俗ともに賞讃に値する。(三)情態の描寫は全く眞に迫るばかりに巧みである。(四)諧謔を雜へて妙言頗を解かしむる風である。(五)音調の抑揚、語氣の緩急、顔面の表情は悉く情文の輕重によつて變化し、能く聽く者の耳鼓をして、時に馳み、時に緊張せしめ、快慰の感あらしめる。馮玉祥の辯舌は上述の如く種々の特長を具有してゐるので、毎次の講話は、高級士官たるは、兵卒人夫たるは、或は學識該博の學者たるを問はず、均しく精神振作し、感興勃然として湧き起り、數時間聽いてゐても、倦怠を感じないのである。

馮氏は平時と戦時の別なく、常に部下の訓練と民衆の工作を忘れぬ。而してその訓練の方法として(一)朝會に政治問答をする。(二)講堂或は野外で通俗訓話をする。(三)隊伍を檢閲する時、各種の問答を試みる。(四)軍中必修課目の試験を行ひ、たゞせば中山革命語録、精神書等について、各種の問答を試みる。(五)官兵に個別的に談話する。(六)各方面の民衆を招集してこれと談話する。(七)起床の時は早起歌あり、就寢前に睡覺歌あり。その他、彈丸節約の歌、地物利用の歌、渡河の歌、行軍歌等を作つて、常に官兵をして高唱せしめ、歌によつて教養をはかるのである。彼の毎次の講話は少くも數十分、長い時は二、三時間に達する。彼の毎日の講話の時間は、平均二時間以上である。馮氏會つて曰く、「古人の語に、民を治めるには温情政策を必要とし、慈

泡を飛ばし、背裂け怒聲天を衝く云ふ體の熱烈なる愛國演説である。殊に馮玉祥の反帝國主義論は極めて猛烈なもので、その措辭用句も狂暴激越に走るを常とするが、それだけ兵卒や下層民衆によく徹底し、大向ふを唸らせるのである。

四

馮玉祥はこれまで三度思想上の變革に會したと思ふ。その第一はクリスチャン・ヂエネラル時代の第二は北京クーデターの敢行と國民軍建設の前後で、第三は赤露修行と五原誓師の頃のことである。

クリスチャン・ヂエネラル時代の馮玉祥は基督教徒たる關係で歐米人とも交際の機會が多かつたので、保舊頑迷の支那武將間にあつては、勿論比較的新しい風潮に觸れ、従つて多少進歩的な思想に傾いてゐたことは争はれぬ事實であるが、しかし當時の馮玉祥に、一定の徹底した思想上の理解があつたか否うかは疑問である。また實際クリスチャン・ヂエネラル時代の馮玉祥の言論は主として基督教義の傳道と、禁煙、禁酒、禁賭の宣傳に止まり、思想問題は云ふまでもなく、政治問題にもあまり深くふれなかつたのである。

しかし、民國十三年北京クーデター決行の頃から、彼は眞剣に、政治、經濟、思想、科學等各方面の研究に力を入れ、張家口の總司令部では、顧問その他について、屢々講演を聞き、その識見を廣

めんこに努力した。但し當時馮玉祥がソウエート・ロシアに接近し、幾多のソウエート顧問を張家口に招聘したことから推して、馮玉祥は赤化した云ふ説が、頗りに傳へられたが、この「赤化」云ふ意味が、單に「左傾」もしくは「過激化」を指すならばともかく、嚴格に「共產主義化」の意味とするならば、それは少しく事實と違ふやうに思はれる。その頃即ち民國十四年六月、馮玉祥は「國事芻言」なる一小冊子を刊行して、内外識者の間に配布したことがある。その内容を見るに、たゞ極めて穩健なる民主主義の提唱に止まり、共產主義に對しては、「支那の現狀に適せず」この理由の下に、明かにこれを排除してゐる。左記はその要譯である。

國事芻言

民國成立以來十四年、内争の禍未だ寧息せず、人民生命財産の損失擧げて數ふべからず、而も國際地位は日に益々低落して今日に至り、民生の凋落は己にその極に達す、此上再び内争を見るに堪へず。況んや外人の經濟的權威侵略の下に處す、豈に吾人の長く此の混沌たる現狀の繼續を許さんや、宜しく人民の爲めに、政治を正軌に入らしめざるべからず。

予淺學不才素より政治を談ぜざるも、奈何せん、屢々諸同志及び各知人より意見を徵せらるゝを以て、已むを得ず、次の四項に就き、卑見を述べ、以て中外明哲の前に披瀝せんことを。宏達の士、教誨に吝かならざるを祈る、幸に垂覽せられん事を乞ふ。

一、共和確定の主張

我國の國體は、共和に確定して以來既に十四年を経たり。而も猶ほ「共和を確定せよ」と云ふは寧ろ贅言たるを失はず。然れども予竊に我國の情勢を察するに、今日の共和國體は、特に國內各方面の勢力均衡の下にある一種の現象なり。故に若し此の局面を維持して、真正なる共和の軌道に向はしめんせば、

第一は社會教育に注意し、國民をして共和の眞諦を了解せしめ、
第二に共和に違反する一切の潛勢力を掃滅せざるべからず。

前者に對しては教育を以て利器と爲し、廣く宣傳して民主思想を喚起し、國民の共和を擁護する實力を養ひ、共和に違反するものは之を公敵と爲し、帝制の禍根をして再發するに由なからしめざるべからず。後者に對しては之を國民の心理につき鑑査するに、尙保守的傾向を有する人少なからず、往々人民の共和に不了解なるを口實として、國體變更の説を唱ふるものあるに至る。茲に於て淺見の野心家は、此種の心理を利用して、共和推倒の運動を爲し、結局身を亡し、名を汚し、争を紛起せしむ。此れ即ち洪憲復辟の二事件を發生せし所以にして、國民の心目に痛傷を與ふるこゝ實に深刻なり。故に共和に違反し、國體を變更せんことを説くものは、宜しく法律を以て之を禁止し、社會は之に制裁を加へざるべからず。民國十三年以前、溥儀帝號を存して廢せざ

りしを以て、此の虚名を籍りて外國と結托し、頑冥の徒彼の爲に計畫し、其陰謀を逞ふし、機を見て動くに至れるのみならず、我國の歴史美術及文化上に關係ある國寶を、内宮より盜出し盡く外國の博物館に陳列し、中國に貽るものは單に復辟の奇禍を重ねたるのみ。この害毒を受くるものは皆に人民のみならず、溥儀も亦人の傀儡となり、其自滅を招くに至る恐れあり。故に予は清室に對し、常に帝號の取消、宮禁の解放を主張し、而して旗民生計の安定に對し、其の援助を必ふるこゝに努むるは、職としてこの故なり。今已に溥儀の帝號は撤廢したるも、公私の財産は必らず之れを區劃せざるべからず。然る時は溥儀も亦た中華民國富者の一人となり、而も危険なる境遇より脱出するを得べく、國家として亦共和に違反する禍根を消滅し、公産を保存するこゝを得べく、これ實に一舉兩得の策と云ふべし。且つ民國の首都に帝號を虚擁する皇帝を容れ、衣冠制度儼然として一の小宮庭をなすが如きは、其の影響人民の心目に留まり、單に共和の本意を失ふのみならず、友邦の嘲笑を招く。況んや一國首都の中心に國旗の及ばざる處あるは最も不可なり。

夫れ共和國體は宜しく尊重すべく、斷じて犯すべからず。已に共和制度確定したる以上、更に變更の餘地なし。今後共和の擁護存續は、國民全體の責に屬す。予も亦た國民の一員として卒先其の責任を全うせんことを希ふ。

二、民治發揚の主張

我國既に民主國家に改易したる以上、政治の發展は當然民主主義を實行するにあり。予は歐米の學說及び各國の成法に對して未だ研究の足らざるものあるも、我國の情勢は之を審知す。故に彼を以て我を論ずることをなさず、其の學理を研究するのみ。蓋し學理上の立論は相當なる論據を有せざるはなく、國を論ずるものは其論據を充分に了解し、社會潮流の由來する所を探索せざるべからず。茲に於て政治施設相補ふを得べく、聞くのみにしてこれを洪水猛獸となし、徒らに逃避するの必要なしと認む。但し國情を顧みて萬事盲從す可きに非ざるも、亦一意阻遏す可きにあらず。要はその撰擇取捨を善くするにあり。

今日何れの國家と雖も、其の一切の典章制度は皆な歴史習慣風俗、及び文化の沿革により、民情に適合するところを標準となし、固より盡美盡善なるものなし。民主主義は本是れ人々を治め、人々に治めらる、即ち自由博愛、平等互助、人の壓迫を受けず、而も人に壓迫せられざるを云ふ凡そ人類は皆なこの心に同じ、歐米各國之を行つて適合すれば、即ち我國に於ても亦實行し得べし。視聽を民と同じくし、好惡を民と共にする歴史及文化風俗習慣に徴するも亦た違拓する處なし。これ實に之を發揚して其實行に盡力すべきものなり。只、我國積弱の極、經濟的に落伍し、生産の機關缺乏を以て共產を行ふ能はず。共產主義は我國の國情に適合せざるを以て採用すべき

に非ず、而して「赤化」の名に至つては、嫁禍の陰謀をなすもの、所爲にして、別に用意あり、論ずるに足らず。所謂民主主義を用ひて國を建設するの道とは如何。即ち法治の精神を本とし、民權を發展し、國家の安寧及進歩を擁護するにあり。現代世界の潮流民權日に益々伸張し、治者と被治者との階級斷じて存在の可能なし。我國は民治思想の發達遅々たりと雖も、之が例外たる能はず。只立國以來十餘年禍亂相繼いで起り、憲法未だ制定せられず、地方自治毫も根據なく、民主の名を虚擁するのみにして民治の實なく、前代の遺風を踏襲して、仍ほ官治の國家たり。これを以て國家の進歩を求むるは、木に縁りて魚を求むるが如し。故に憲法の制定をその首要とす。國憲成立せば國家の基礎安固たり。中央政府は法によりて確立し、省縣の自治もまた法によりて成立す。此に至りて軍政時代終を告げ、始めて自治の時代に推行す。一切の階級的障礙を掃除し平民を補助し、眞正民治の軌道に到達す。然りと雖も自治を實行するには、必ず人民に相當の知識を要し、相當の訓練を経て、一切専門事業の運用に適當なる人才を養成したる後、始めて自治の實効を收むることを得べし。自治の事業は學術に關係すること十中の六七、地方特殊の情勢に關すること三四に過ぎず。故に宜しく知識及び技能を標準となし、之に加ふるに經驗を以てし、今日の狹義的地方主義の陋習を矯正すべし。然らずんば地方自治は少數なる地方劣紳の利源となり、事業を壟斷し、郷里を魚肉するの弊之れによつて生ず。故に吾人は自治を推行する當初に於

て、先づ人民をして自治の意義を明瞭ならしむべく、之れが爲め中央政府及び地方政府は、多額の經費を以て研究所講演會等を設立し、之を宣傳するを要す。宣傳一般に普及したる後、之れが推行に着手すべく、その順序を規定し、方法を設けて指導をなすを要す。更に視察團を組織し、實際的に自治の進程を觀査す可し。斯の如く一定の宣傳時期、一定の指導時期、一定の推行時期を経て、更に時々視察を加ふれば、自治事業は必らず成功すべし。其の基礎已に立たば、序を追ふて漸進し、その發展期して待つべきなり、

三、平和維持の主張

國家の建設は如何なる方法を採用するに論なく、先づ國內の兵禍を除去するを要す。人民をして安居業に樂ましめて後、始めて事業の建設あり云ふべし。予が武力統一に反對する所以の根本要義は即ち此に在り。故に人民を以て權位又財富を取得するの犠牲品となすは、敢て余の贊同する所に非らず。

蓋し權位に就て言へば、民國の官吏は素々特殊階級に非らず、人民の公僕たるに過ぎず。身高位に居り、人民の福利を謀らざるものは、その虚榮を久しく支持せられざるのみならず、惡名を無窮に遺傳することに至るべし。財富に就て言へば、國民の財を少數の人の手に積み、人民をして窮困ならしめば、遂に之を導いて險に走らしめ、禍亂忽ち起り、結局其の集まりたる財を自保す

る能はざるのみならず、危險其の身に到らむ。民國以來其の例に乏しからず。故に權位を争ひ、相殺戮するより、寧ろ同心協力して國家の地位を強盛ならしむべく、財富を争ひ相掠奪するよりは、寧ろ利源を開發し、國民經濟を充裕ならしむべし。

此の主旨に基き、予は今後の時局に對して、極力平和を維持することに主張せんを欲す。苟も亡國の慘禍あるに非らざる以上、予は決して戰爭を欲せず。即ち不幸にして免かるゝを得ざる場合に於ても、亦た和解截止することに盡力し、戰に参加せざるを以て最低限度となす。斯の如くすれば機會を利用するものは其の挑撥を用ひる所なく、建設に熱心なるものは相互協同するに至る可し。

予の此意を有すること遠く數年以前に在り。故に管轄する所の軍隊に對しても、専ら戰術及び戰鬪の訓練に注意せず、軍人たる衛國の信念、及び公民として有すべき常識を養成せり。故に彼等にして入營すれば兵となり、軍事上相當の能力を得せしめて、國家の干城たるを失はず、退營すれば職業上の工作技能を養成して、盜匪に淪陷せしめず。予は常に軍士に對し、軍令を嚴にして其の禁戒を守らしめ、教育を提倡して其の知識を啓き、道徳に注重して其の品節を教くし、更に技能を練習して、生計の準備を爲さしむ。數年以來兵士は自身の天職及び人類生活の要件を明にし自ら身を守つて詐欺掠奪をなさざるのみならず、禁令なし雖も自ら非をなさず。所謂民を侵

さす云ふは徒に軍令の森嚴なるに非らず、平和維持を主張し、而も民を助くるにあり。蓋し荷も養兵の主旨、専ら城を攻め、地を略するに偏重して、健兒を收容するここには務むれば、その流弊人の家を毀ち人の財を奪ふを免れず。其の退營するに及んで、其の害益々甚し。予の練兵の要は戦に勝ち、殺を去るにあり、また衛國保民を以て務みなす。而して紀律整肅訓練純熟、外侮を防ぐのみならず、退營の後良民たるの名を失はず。

主張同じからず、趨向自から異なるも、平和の維持は、予が治軍の精神たり。且つ此の精神に基き國內各方面の同情を求め、従前の相争相殺の風習を一掃し、以て漸次真正平和の境に達せしめんこす。

四、經濟發展の主張

今日列強環立の中に處し、先進國の後塵に追歩して、而も富國の計をなさん欲せば、國民經濟の發展を計らざるべからず。我國地廣く物多きは、列國の注目する所たり。然るに經營宜しきを得ず、貨を地に棄て、而も國民は、資本主義の壓迫を受け、物力凋落し、生計困窮なれり。この儘にして圖らずんば、勢ひ全國の經濟權は悉く外人の手に操縱せらるゝに至るべし。我國は天産最も富み、内地農業は地の利尙未だ多く利用せられず。礦産亦未だ多く採取せられず、山西一省の石炭の豊富なる實に全世界數世紀の用に供するに足る。此外、東北西北の廣漠たる平原は、

水草繁茂して世界上天然の牧場として、遠く南米の「あるぜんちん」に超越す。若し牧畜事業を發展せしめ、更に地を擇んで開墾せば、此の荒僻無人の境は、全世界唯一の農産品供給發源地となるべし。川邊、西藏、青海、新疆、滿洲、蒙古を總計すれば、其面積内地各省の上に在り、我國人口過多の患も憂ふるに足らず。今日國民の多數赤貧なるも、善く經營すれば數年ならずして直に殷富に至るべし。吾人は承受する遺産甚だ豊富なりと謂ふべし。

經濟建設は全く民生問題に屬す。元々吾人生活の需要する所は、衣を以て寒を防ぎ、食を以て身體を養ひ、住を以て棲息し、交通を以て行旅を利するに外ならず。故に衣、食、住、行の四者完備せば即ち安適たらむ。

然れ共人情は尙未だ足らずと爲し、器皿飾物有つて其の用をなし、美術音樂有りて其の樂を紓し然る後始めて人生の求むる所を満足す。蓋し人類の慾望は文明と併進するものなり。現代社會の中、民衣、民食、民住、民行、民用、民樂の六要素は皆人民慾望の要求する所にして、而して、之れを得る所以は經濟的發展の結果に由る。之を國民全體に就て觀察するに、生産衰微し、消費増進すれば必ず國民は「衣」「食」の需要を充すに足らず。資本缺乏し、工業不振ならば必ず國民の「住」「行」の需に足らず、技術粗淺文化不塞せば必ず國民の「用」「樂」の需に足らず。故に生産の擴張、消費の減輕、資本の増加、工業の振興、技術の増進、文化の發展は、皆經濟範圍に涉る

緊密なる要素にして、經濟發展すれば國民其の能ふ所を盡すの機會を有し、然る後に其の求むる所の地位を取得ず。

惟ふに近代交通大に開け、生産は交換に待つ所多し。故に吾人の經濟の發展に努力せんことを途徑も、亦た宜しくその趨向を知るべし。英佛各國の工業發達は、其の歴史は遠く百年以前にあり、學術の利用、技藝の精巧、物力人才我國の追隨を許さず。故に工業上に於て競争し、勝利を求めんとするも、一時に企及せらるゝものに非ず。惟ふに先づ無盡藏なる農業、礦産、林業、牧畜等の如き天産を開發し、原料品を以て工藝品と交換するにあり。天産の開發に努力せば其の結果工業も隨つて共に發達す、北米合衆國の如きは之が先例なり。

之に次ぐは鐵路國道の開築、工廠の増設、及び専門人才の養成、職工技術の増進、幣制の改良、金融の調劑之れなり。全國の經濟發展すれば、物力豊富となり、一切の弊根を掃除するに難からず。蓋し今日の内争は少數野心家が吞併の心理及び政客權謀縱横の動機に由るに雖も、亦一般人民の生計困難の致す所なり。假りに社會上の工作増進し、労働者をして優裕なる生活を得せしめば更に何ぞ内争匪患を憂へんや。之れ予が一意經濟の發展を以て治國の要道となす所以也。

五

その後、馮玉祥はソウエート・ロシアに遊び、百日間の「赤化修行」をつんだ。赤露旅行は云ふま

でもなく、馮玉祥の思想に、甚大の影響を及ぼした。彼の一度五原に歸つて、再舉の旗をあぐるやその宣言の冒頭において「余は瓦工の子なり」と聲明し、軍令に、また講演において、大いに「赤化振り」を發揮した。一時そのあまりに突飛なる過激振りには、ソウエート顧問すら舌を巻いたほどである。しかしこれは馮玉祥の物に熱中する性癖の然らしめたものであつて、彼は必らずしも共產主義者となつたわけでない。やがて陝西及び河南に進出するに至り、所在共產黨の左傾小兒病、似而非共產主義者の横暴跋扈にあてられたる馮玉祥は漸やくその過激振りを和らけ、近年はあくまで忠實なる三民主義の信徒、順良なる國民黨員を以て自ら任じ、頻りにこれを装ふにつこめてゐる。國民黨員としての馮玉祥は黨歴三年にも満たぬ新參者であり、また彼の三民主義の研究も、モスクワ滞在中にその手ほごきを始めたやうなことで、彼はごこまで孫文思想を理解するに至つたか、なほ疑問である。

十七年八月十二日、馮玉祥は南京來訪を機として、第五次全体會議に「國民黨の民生四大要件たる衣食住行の四者に對する最低限度の緊急施設建議案」なるものを提出した。同案は國民黨入黨後における馮玉祥の最初の正式意見の發表であるが、その内容を見るに、主として「最低限度」と「緊急施設」に重きを置き、孫文式の高遠の理想、架空の計劃には少しもふれてゐない。左記は同案の
大要譯文である。

總理平定の建國大綱第二條の劈頭に「建國の首要は民生にあり。故に全國人民の衣食住の四大要求に對しては、政府は正に人民と協力し、共に農業の發展を謀り、以て民食を充足し、共に紡織事業の發展を謀り、以て民衣を裕かにし、大計畫の各式屋舎を建築し、以て民居を樂にし、道路運河を修理して、以て民行を利せしむ可し」とある。是れを以て建設は民生を先きにし、而して民生主義の精髓は民食を充足し、民衣を裕かにし、民居を樂にし、民行を利せしむるの四大要件なる事を知る。

今や本黨の北伐終局を告げ、訓政の幕開かれんとし、萬端の建設皆な規畫を待つ時、われ等は總理の遺訓を遵奉して、先づ民生を首重しなし、全國人民の衣食住の四大需要に對して、緊急の施設をなさねばならぬ。或る者は、これは經費の問題である、これを政府に求むれば、財政困難なりと云ひ、人民に求むれば、百業疲弊の極にありと訴へ、事は不可なるにあらざるも爲し能はざるなりと云ふ。

然るに今や大戰終局を告げたる時にあたり、最大多數の人民は軍閥の虐政、水旱、兵燹の災に困しみ、その各自の衣食住行を失ひ、三民主義の建設の一日も早く實現し、以て救濟を受けんことを渴望してやまない。この時にあたり、本黨は建國治國の一大責任を負ひ乍ら、若し人民のこれ等の痛切なる要求に對して、その最低限度の扶助をすら盡すあたはざるに於ては、國民革命は全

くその意義を失ひ、且つ總理の遺訓に對して不忠を極むること、なるであらう。經費の窮乏はもとより事實に相違ない。然し一錢を準備しても一錢丈の事をなし得る。故に宜しくその最も緊急を要するものを選んで、政府の資力のある限りを盡し、總理の實業計畫中にある「國家經營」の方法を提唱して、次第に擴張し、人民の協力を要求すべく、こゝに緊急着手を要する事業について玉祥の愚見を左に記述する次第である。

第一 民食に關して

農業の振興は國民經濟發展の基礎問題である。この事業は廣泛にして、萬言の能く盡し得る所にあらず、又一時に爲し得る所のものでもない。茲に建議せんことを欲する所は僅かに目前第一歩の小規模のものである。

甲 政府は資本金二千萬元以上の農業銀行を設立し、各省區には支店を、各縣には代理店を設立し、總て無利息にて、農民に貸付け、以て棉麥種子並に農具の改良に資せしめる。

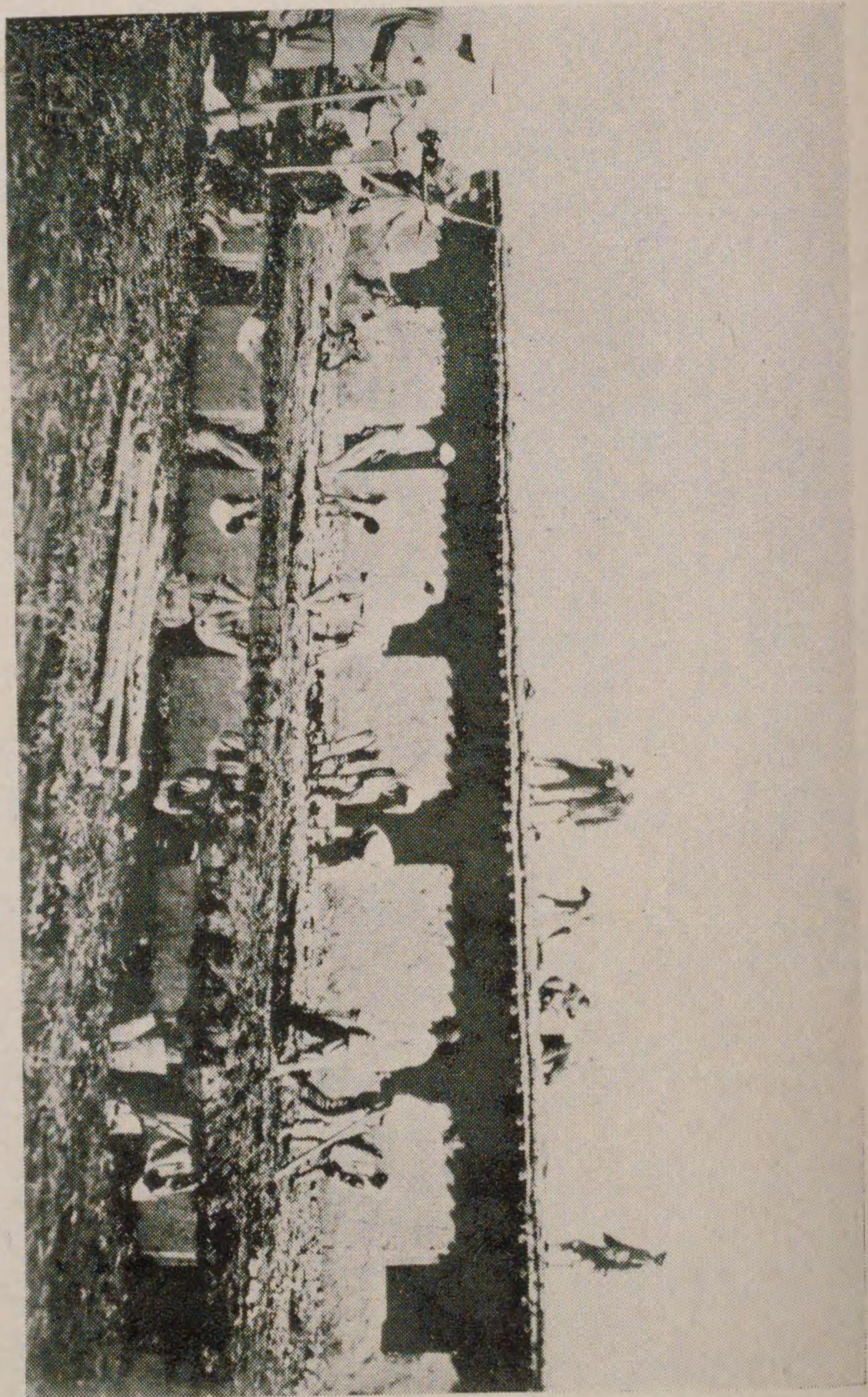
思ふに吾國の農業収入の薄きは、其の原因の一つは種子の劣悪なるにある。農民は農業上の智識乏しく、種子の貯蓄を行はず、他より購入せんとしても、その資金の融通には極端な高利を拂はねばならぬ状態にある。

舊式農具は當然改良を行ふ可きであるが、農民には自ら新式農具購入の資力なく、且つ戦亂區域

にあつては、軍閥匪兵のために、郷村在來の農具すら残り無く破壊されたるが如き有様にて、農具の缺乏は戦後人民の最も苦痛を以てする所である。

されば先づ國營の農業銀行本支店を設立し、専門家を聘してこれが設計をなさしめ、一面各縣代理店に於て、農具を種子を購入し、之れを最も貧しき農家に貸與し、特に各種組合の設立を奨励し、團體の手を以てこれを借らしめ、秋の收穫後これを返還し、收穫不足の場合には延期を許し、最も赤貧なるものには縣代理店より一定額内の補助金を給與し、その返済を求めない様な方法をこころが必要である。吾國農民は賦性純厚にして良く信用を重んずる故、公歛を費消して、返還を怠る様な事は決してしない。斯くする時は、國家に於て何等損なくして、貧農は莫大なる利益を蒙るのである。

乙 水利の振興は農業問題解決の唯一關鍵である。唯だこの事たる、非常に浩大範圍に亘つてゐるもので、且夕に辨ず可くもない。故に政府に於て、三千萬元乃至五千萬元の水利公債を發行し、専門機關を創設して、その管理にあたらしめ、全國河川中の最も治し安く、且つ最も治水の必要あるものを選んで、工事を始む可きである。淮河、永定河、涇河、渭水の如きは皆な測量を終り、その起工を待つ許りである。渠を通じて灌漑の便を図ることは、最も普遍を要するところであつて、それに要する人足は兵士を以てこれに充つるを得策とする。山西、河南、陝西、甘肅等



察 政 工 兵 の 祥 玉 馮

の諸省は四野溝渠に缺乏し、農民は最も旱害の苦を甜めてゐる。而して各縣の小河は局部的灌溉に便なるに過ぎない故、須らく多數の溝渠及び新式井戸を開掘して、以て水利に便ならしむ可きである。各省政府は、其の縣知事を督し、最も急務とする治水の要を極力提唱し、其の地方に駐軍あれば、同軍をして人民のために勞力を供給せしめ、また省政府は知事の成績を考察し、水利の功を第一に置き、之れが獎勵を行ふ可きである。北方農民は殆んど年々旱害に苦しみ、また旱魃あれば必らず蝗害これに伴ふを常とする。

十七年の黄河流域の如きは、蝗群天を蔽ひ、その損害は實に莫大なるものであつた。玉祥は部下の軍隊に通令して、人民の爲めに蝗を捕殺し、其の救助を行つたが、然し溝渠を穿つて灌溉を爲すの一事に至つては、手が及ばず、根本辦法を講ずることが出来なかつた。況や河道の如き、到底其の修理を行ふあたはず、爲めに雨なき時は、旱魃あり、雨多ければ汎濫する有様である。故に治水は實に救農の大本である。殊に淮、黄、兩河の流域を修むるは、實に億兆民生の根本であると思ふ。

第二 民衣に關して

吾國の最大恥痛とする所は、日に國產獎勵を爲すも、然も民生の一大需要たる衣料は其の過半を外貨に仰ふがねばならぬ事である。故に本黨はたゞひ帝國主義の打倒を以て革命の目的となす

も、若し帝國主義國家より、衣料の輸入が無かつたならば、國民は正に無衣の歎に苦しまなくてはならない。且つ外人は最低の價格にて、吾國より、綿毛を買ふて、原料をなし、綿布毛織品等を製造し、更に十倍乃至百倍の値段を以て、吾國に賣り返すのである。實に恥痛これより甚だしきはないのである。故に國家の力を以つて、綿布及び毛織事業を經營せんことは刻下の急務である。或る者は中國人は自ら紡績業を創業して、十年、漸次發達を來しつゝあれば、政府は只だ之れを獎勵保護すれば足り、國營の要はないといふであらう。然し、實際は然らず。民間經營の紡績工場は多くは歐戰當時投機的野心から興つたもので、その經營も幾多の缺陷あり、資本も不足し、且つ現在の状況を見るに、江河日に下るの有様である。政府は之等工場に對しては、無論保護する必要があるが、全國民衣の重大問題を彼等のみ委ねるは到底不可能なことである。且つ現在の工場は、多くは開港場にあり、内地に缺けてゐるが故に、廣く一般の需要に應ぜしめることが出来ない。毛織工場に至つては殆んそ絶無に等しい有様である。されば政府は緊急全國に適當の地を擇んで、國營の紡績工場、綿織工場、毛織工場若干を開設し、紡績、綿織兩工場は規模の大なるものよりも、數の多きことを期し、紡績工場は各々一萬繰り、或は五千繰りを以て標準をなし、綿織工場をこれに附屬せしめ、所用の棉、石炭、水等の供給便利なる地點を擇んで開設し、原料の廉き、運搬の便きを圖り、價格を輕減して、人民に便し、政府はこれによつて利を求

めず、只だ資本を賸ひ得れば足るをなし、輸出の必要なく、只だ地方の用を満たさんことを期するのである。次に毛織工場は西北の産毛區域に大規模の工場一二ヶ所を創設し、廣く原料を集めて、粗製羅紗、毛布及び毛絲等を製造するのである。羊毛は中國主要輸出品である。然も自ら毛織物を作るあたはざるために蒙る損失の如何に莫大なるやは今更論するに及ばないのである。大多數の人は毛織の類を身に着ける事無く、北方の兵士等は盛冬嚴寒を雖も身に着くるは只だ一枚の綿衣のみ。一度び雨雪に遇はば直ちに凍濕膚を刺す有様である。西北はこれ等の原料に富裕な地であり乍ら、然も軍民共に厚暖の毛衣を着る事の出来ないのは痛心の至りである。故に工場開設の舉は速に行ふを要するのである。創設資金及び經營の方法は先づ三千萬元の資金を準備し、二千萬元を以て紡績工場及び綿織工場の設立費に充て、残りの一千萬元を以て毛織工場費に充てる。而して紡績、綿織各工場一ヶ所の資本五十萬元とする。かくして四十ヶ所の工場を設立し得る。毛織工場は張家口、寧夏の二ヶ所に各一つを設立し、各工場の資本を五百萬圓とし度いのである。又資金の募集方法に就いては、中央政府並びに各省政府協力して一千萬元を支出し、其餘は國內の銀行團よりの借款によるのである。之等の事業は皆な有利なもので、殊に毛織事業は其の最たるものである。全國の軍用並びに官吏の制服を供給するのみにても、只兩工場のみでは足りない位、需要が多い故に決して損失を心配するに及ばぬ。其の管理宜しきを得さへした

ならば、決して缺損は起らないのである。又借款は決してその調達に困難はない。或る者は凡そ國營の事業は成績あけ難しと云ふが、苟も革命精神を以てこれを行ひ、技術は之れを専門家に、管理はこれを黨員の手に委ねたならば、必らず、幣害を除き、良好なる成績をあげるこゝが出来らるであらう。右の如き小事をすら實行する能はざるにおいては、吾黨は建國治國を論ずる資格がないと云はねばならぬ。

第三 民居に關して

總理の實業計畫第五計畫第三部に、特に居室工業發展の必要が説いてある。總理の住居問題を重んぜる、實に斯くの如くである。

思ふに吾國人民の居室は元來極めて質素陋狭である。西北諸省には、今尙穴居する者多きが如き有様である。然るに連年の戰亂あり、天災人禍交々至り、爲めに貧民多くは其の居所を失ひ、流亡道に横はり、身を容れる地にてはないのである。又都會地方を見るに、茅屋櫛比千百人、その中に雜居して居る。然もそれすら得られない者が、何萬人居るかわからないやうな有様である。されば今日こゝに民居問題を云ふのは、敢て家屋を有する者の爲め、その改良を爲さん云ふのではなく、家無き者の爲めに新たに住居を興へんこゝのである。前者は實に建國の宏謀であり、後者は即ち救濟の切計である。故に政府は正に内政部に命令し、特に平民家屋建造計畫を定め、

先づ左記數項に分つて處理す可きである。

(一)各特別市及び市は皆な官有の空地に、平民家屋數千戸を建て、最低の家賃を以て、各戸一家族乃至數ヶ族を收容し、赤貧者よりは家賃を取らず、期限を定め、その職を得るを待つて、情狀酌量して、これを取り立てるのである。これが建築費は各市の自辨とし、全市の家屋税を定めて、これを擔保とし、以て市公債を發行するなり、或は其他の方法に依ること。

(二)凡そ機械工場は必らずその附屬勞働者の全員を容るゝに足る宿舍を建設し、廉價にこれを貸與へることとし、新工場設立の際はこれを以てその必要條件の一つとする事。

(三)各縣城及び町に於ても亦、家屋建築計畫を行ひ、貧民を收容す可く、その詳細は省政府より地方の情狀を酌量し、別々に之れを定める。これ等建屋費は國庫より支出す可く、先づ暫定額を一千萬元とし、政府より專税を指定して、これを財源とし、特殊公債を發行し、各省人口の多寡及び罹災の輕重に應じて、各省に分配し、至急實行にかゝる事。

以上の三項は同時に實行に着手し、一年以内を期して、全國に新造の平民家屋數百萬戸を建て、清潔堅固を旨とし、華美に流れず、運動場、娛樂機關等を附設し、且つ平民學校、補習學校等を開設するのである。玉祥は河南に於て、平民村數ヶ所を設け、又開封、鄭州等の各地には、軍中衣食を節して得た資金を以て、平民家屋數百戸を建築し、貧民は皆な其の便益に浴してゐる。惜

むらくは戦時匆忙の際、尙ほ之れを廣く實行するこゝが出来ない。今後は政府に於てこの事を以て總理遺訓中最も重要なものとなし、速かに、全國無居の民の爲めに、この一大問題を解決してほしいものである。

第四 民行に關して

交通ニ國家の民生計畫の如何に緊密なる關係にあるかは今更贅言を待たぬところ。即ちこゝには其の辦法に就いてのみ云はんを欲する。思ふに燒眉の急務は鐵道ニ道路ニである。先づ鐵道に就いて云はんには、總理の計畫によれば、起工し得べきものは元より多いが、現在緊急完成を要する幹線は粵漢及び隴海の二線である。粵漢線は回收が行はれてより後、僅に武長株長廣韻各地區間が通じたのみ。中間の千餘支里は長らく工事を停め、未だ着手を見ず、南北の交通上多大の障害を受けつゝあるが、聞く所によれば粵漢各地の諸同志は已に積極的に計畫を進行し、將に着手せんとし、其の經費は英國返還の庚子賠償金により、萬事滞りなく、正に着工を待つのみにあること云ふ。隴海線の方は西部の新工事であつて、既に靈寶潼關に達せんとして居るのであるが、軍閥河南に禍ひし、爲めに延引二年、今に至るも尙ほ列車は陝州以西に至り得ないのである。此の線は西北唯一の起工未完成の幹線である。全線の開通が一日早ければ、即ち西北の開発も亦一日の早きを得、沿線數省人民の命脈もたゞ此に繋るのである。玉祥は西北に服務し、人民の交通の不

便より受くる苦痛を目撃するごこに、實に痛心の切なるものがある。政府に於ては、該線並に粵漢の二線を、等しく建設の最緊急事業となし、一日も早く工事を起され度い。思ふに該線の觀音堂より陝州に至る區間の工費はベルギー會社の出資による如く傳へられてゐるが、實は内國銀行團の投資によるものであつて、連年の軍事の爲め、缺損も固より多いが、一度び完成の曉は其の利益は座して望む可きである。故に宜しく政府は關係銀行代表を召集し、新債の發行方法を協議し、陝潼、潼關及び西安蘭州各區間の大体計畫を規定し、期限を定めて、工を終るやう、切望にたえない。以上兩線に必要な兵工はその地方の駐在軍隊を以て極力擔任せしめ、其の詳細の事項は軍事機關をして計畫せしむる。

次ぎは道路であるが、之れは纔かの費用を以て築造し得る故に大量運搬に必要な幹線には皆な道路を築造して以て民行に利せしむ可く、政府は宜しく全國國道計畫を規定し、各省の經濟狀態に照して、夫々毎年道路若干里を作らしめ、五年以内に全國の道路を完成し度いものである。それに要する人足には兵士を以てこれに充つるを便にする。又一方政府は自動車製造工場一ヶ所を設立し、製造不能の機械は大量輸入によりて購入し、製造可能の物及び木工の部分は總て本國の機械工場をして製造せしむ可く、揮發油は陝西、四川等にその原料がある。又國營工場をおこして積極的に經營し度いものである。以上に必要な經費は夫々公債の發行なり、又は株式の募集

なりにより、先づ第一期計畫を假定し、一億元を以て限りこなし、分期調達すればよからう。これ等は皆な有利な事業なる故、管理其の宜しきを得れば、投資者は決して損せざる可く、政府は須らく斷然その實行に着手す可きであると思ふ。

以上述ぶる所は纔かに梗概を擧げたに過ぎず、玉祥は實業方面に關しては元より其の研究を缺き述ぶる所實に幾多の缺點を免れないが、只少より郷間に生長し、一般人民の衣食住の困難に付いてはあまねくこれを知つてゐる。而して連年西北に轉戦し、荒涼を目觀し、親しく艱難を體驗し、國民の困苦を悲しみ、常に遺訓の精髓を念ず。今や軍事稍々定まりたる時に當つて、本黨の民生衣食住行四大需要に對する建設の實行はその困難を問はず、實に一刻もゆるがせにす可からざる大事と思ひ、愚見を擧げて右建議をなす次第である。望むらくは、全會あまねく衆議に諮つて議決し、更に最善の辦法を明定して、國民政府の名により、速に實施され度く、茲に總理の民生主義の漸次實現され、全國人民も亦、本黨を信じ、徒らに空莫たる革命理論に耽らず、總理在天の靈を慰め、また人民倒懸の急を救はんも、只だ此の舉にありこ信する。是否のある所、謹んで公決を請ふ。

私はこの建議案を一讀して、(一)同案のすべてが、孫文式の高遠の理想を避けて、馮玉祥式の實行本位主義で一貫してゐること、(二)全國的建設案の中にも黃河流域の治水及び隴海線の完成を入れて、我田引水をはかつた巧みさの二つの外、(三)幾多の點において、彼がロシアで得て來た智識を注入して居ることに、多大の興味を感じるのである。

民食の項において馮玉祥の主張せる農民救済銀行計劃は全くソウエト農民銀行に範をこつたもの、殊に貧農に對する農具や、種子等の無償貸付案等は、馮玉祥のロシア土産の一つに相違ない。また馮玉祥は各種事業の經營にあたり、「専門家の採用」「黨員の管理」をくりかへし切言してゐるがこれも亦レーニンがソウエト經濟の建設に當つて高唱した二大モットーそのまゝである。たゞにこの建議案のみならず、馮玉祥の言論の中には、幾多ソウエト・ロシアで得た智識の加はつてゐるのを見るのである。

六

馮玉祥の言論はこれを文書において發表する時は、前項二通の意見書の例に見る如く、措辭慎重、論調また穩健、それだけ、堅苦しく、面白味が少い。しかし演壇の上から、口舌を以て發表する言論は、警句百出、奇想天外、時に圓轉滑脫、巧みに諧謔を交へ、また時に熱烈火の如く、氣焰當るべからざるものがある。

左記は馮玉祥の演説集から、「馮式演説」の例として二三の講話を抄録したものである。

十六年八月二十九日、馮玉祥は鄭州にあり、總理の紀念週を機會として、將校を集め、「大事は小事より」この題下に、その得意の「一草一木民膏民脂」論の訓話を試みた。この日馮玉祥はその營舎から、總司令部に行く途中荷車數臺に薪を満載して曳き行くを見るや、その荷車の上から一束の薪をぬき取り、それを手にし乍ら、演壇に立つた。

諸君、余は今何のためにこの薪の一束を携へて來たか。諸君にしてこれを察知するここが出来ぬならば、試みに一考され度い。薪の材料は頗る見事な樹木である。數年を待てば、たゞに卓子、椅子を造り得るのみならず、またよく大厦の棟梁ともなるであらう。然るに村民が十數年苦辛して成長せしめた樹木を今日薪となすべく一朝にして切り倒してしまつた。諸君が目前に見らるゝ如く、樹皮はなほ青々としてゐる。

恰も二十才前後の青年が、軍閥と帝國主義の爲めに蹂躪された如くである。まことに痛ましくもまた惜むべき極みでないか。

おもふに國家決して材なきに非ずして、澤山立派な材料があるのである。また埋没してゐるに非ずして、蹂躪されてゐるのである。余はこの事に想ひ到る毎に、滿天下の失意の志士と共に哭泣し度いと思ふ。余は本軍に對して三令五申、以て石炭を燃料と爲し、樹木を燃料と爲すべからざることを嚴命した。然るに今日余が小車を曳いて行く者に問ふて、始めてこの樹木は執法司が兵

站部に命じて、薪となしたるものなることを知つた。兵站部は縣署村落に向つて要求し、縣署村落では總司令部の所要を聞いて、直ちに伐採せざるを得なかつたのである。しかもこの事ばかりしも執法司の命令に出づ。眞に法を知つて法を犯したものと云はねばならぬ。

軍法司司長、科長等はよろしく炊事夫に向つて、たゞ石炭を用ふべく、薪を用ひてはならぬことを嚴命すべきである。民間の樹木を尊重してこそ、始めて國民軍たるに耻ぢぬのである。(下略)

十七年三月二十六日、馮玉祥は新郷の營舎に士官を集めて、左の「吃教、特教、用教三派の攻撃論」を試みた。長く基督教徒であつた馮玉祥は宗教に關しては相當の智識をもつてゐる。而して赤露旅行中、ポリシエウイキーから宗教反對の宣傳を受けて來たので、彼の宗教攻撃論は、よく内幕を知り抜き、徹に入り細にわたつたもので、頗る興味深いものがある。

凡そ宗教の名の下に、パンを得て居る者を吃教派、宗教に名を借りて人を脅かす者を特教派、宗教の一部を利用して、利益を得んとする者を用教派と云ふ。基督教に就いて言へば、自分の家にあつて喰へない幾多の人が、異人さんのお尻に喰つついて、教會に通ひ、バイブルを念じ、審判の晝なさを貼り廻して食を求め、その一部の連中は、半可通の癖に、一通りバイブルを見たゞけ

で、異人牧師の踵について、下つ端の牧師にすみまし、安々々月々世元の月給をせしめてゐる。彼等は宗教に寄生して、それに依つて食を得てゐる者である。この種のパン専門の和尚や、道士、牧師なき云ふ手合は、各宗教に従事するもの、所謂宗教家と稱するもの、三分の二以上を占めてゐるのである。

次に特教派とは何か。これは宗教の美名の下に人を脅かし、別になすあらんことをする者である。例へば、こゝに張と李と云ふ二人の者があつて訴訟を起したとする。そして張と云ふ男の方が不利だつたとき、彼はその地方の縣知事が、基督教をこわがつてゐることを聞いて、教會にお参りし、異人牧師に向つて「私はイエス様の熱心なる信者で御座ります。私はすつと以前から入教致し度いと思ふて居ました」と云ひ、そこで基督教信者となり、翌日またその牧師の許に行き「私は教徒になりましたが、李と云ふ男が何時も私を欺いて、困ります。到底私として黙つて忍んで居られません。さうか私に一枚の名刺を與へて、私を御助け下さい」と云ふ。此の一枚の名刺がまた無上の權力を有し、一度びこれをもつて、知事の前行き、「大英帝國の牧師様が李と云ふ男は、何時も私を欺く故、是非貴方から重く罰してやつて下さる様申しました」と云ふたとする。するに縣知事は直ちに異人様の仰せ付けださるので、その爲めに上役の御覽えを悪くしては、張の云ふ事をその儘受け入れて、李をば處罰するのである。かくの如く基督教の勢力

の偉大なるを見るや、皆な來つてその下に参り、所謂信者となるのである。もごより斯くの如く、宗教の名の下にその勢を恃まんとする手合はその地方に於ても、全く人の齒牙にもかゝらぬ様な者許りで、彼等は圖々しく教會の中に這入り込むのである。之等の虎の威を恃む連中を指して特教派と云ふのである。

用教派とは何か。これは多くの人が吾が中國は頽敗の極にある、尼姑教も、和尚教(佛教)も、皆な役に立たぬ。たゞ基督教を信する者のみが、放足もする、文字も習ふ、衛生を講ずる、阿片を吸はない。他の宗教に比してたしかに優つてゐる。……基督教に依つたならば、社會の改造も實際可能である。他の何等の具体方法を知らない宗教よりは良い……と云ふのである。かゝる人々を總て用教派と云ふのである。私は常德に居た頃、常に、不平等條約は吾々を壓迫する。吾々は救國の道に努力しなければならぬと云ふて居たが、或人が私に向つて「馮先生、貴方はいつも救國を高唱して居られるが、然し基督教と云ふものは、救國を講ずるものではなく、世界の救濟を講ずるものであります」と云ふた。そこで私は「救國を講ぜぬ様な教理なら、私は信じません」と云ふた。多くの外人牧師等は政治上の野心をもつて中國に來り、宣教によつて野心を實現しやうとしてゐる。彼等にまつて、私の救國提唱が恐ろしく聞へたのは當然である。

以上説いた所は基督教に就いての吃教、特教、用教の三派であるが、その餘の各派宗教も亦同様

である。例へば佛教の如き、その本來の眞精神は我れ地獄に入らず、誰か地獄に入らん云ふ確固無畏の精神を有する。回教にも亦その獨立の精神あり。そして耶蘇教は博愛利他の大精神を有する。勿論それは所謂何々佛教維持會とか、或は保教會等の名の下に、寺廟に集喰ひ、善男善女から金錢を掠める者や、又美食を喰ひ、美衣着け、破衣破帽の貧乏な信徒の不潔を壓ふて、禮拜堂にすら入るを許さないやうな牧師を指すのではない。この種の職業的教徒は我が革命政府が寺廟を學校に改修し、禮拜堂を平民學校とし、有爲の青年の教育を爲し、寺廟の所得を公益に充てんごするを聞くや、大忙てにあはて、先づ佛教何々會とか、何々學校なる看板をか、け、朝夕阿彌陀佛の前に叩頭する和尚道士が校長となり、教員となり、そして學生は二三の小坊主だ云ふ様な有様である。これを以てしてもかゝる佛教徒の意氣地無さがわかるのである。社寺に於て神を祈り、佛の御名を稱へるのも、皆なこう云ふふざけた氣分からである。

光緒二十六年の義和團事件の時の如き、瑞徵とか神奇とかを説き、一時關公、趙子龍、張天師等が下界に天下られ、外人の鐵砲や大砲を封じて仕舞ふ云ふ様なことを云ひふらしたものだ。實は私はあの時保定に居つて彼等が外夷に抗するを聞き、それに入會しやふと思つたが、後になつて皆な彼等一派の口から出まかせの大駄法螺なる事がわかつたので、こんな荒唐無稽な取るに足らぬ事を云ふ様では、必らず何か動亂を發生するだらふと思ふて居たが、果して彼等は數人の外

人を殺した爲に、八國聯合軍の太活砲臺占領となり、北京及び天津は攻略され、國民は到る處で、殺人、放火、姦淫、劫奪に遇ひ、この一事變の爲めに我國は、地を割き、賠償金を拂ひ、不平等條約の鎖に繋がれる等、あらゆる災難が我等の身の上になりかゝつた。實に此の亂こそ、迷信、無智、精進料理を口にし、佛畫を拜し、口に念佛を唱ふる落伍敗殘の輩の惹起した一大國禍である。中國人の迷信によつて受くる損失と害毒は殆んど測り知るべからざるほど深刻なのである。今や革命の時期にあたり、われ等は救國救民の責任を負ふてゐるのである。吃教、恃教、用教の徒輩をして喚醒せしめなければならぬ。われ等の責任は三民主義の實現にある。三民主義に合せざる迷信はすべてこれをあくまで革除しなければならぬ。



昨年夏、馮玉祥は南京滯在の當時、一日國民政府の巨頭連ごもに棲霞山に遊んだ。山上の寺に入るや、多數の僧侶が出迎へたので、馮玉祥は例によつて一場の演説を試みた。即ち曰く今や革命は全國人の革命となつた。從來僧侶はあらゆる政策を超越し、これに干與しなかつたが、革命の治下にあつては僧侶もまた國民の一分子として、革命に同化しなければならぬ。寺廟の財産は元來國民の金によつて造られたものであるから、僧侶はよろしくこれを學校、醫院等の公共機關のために提供し、國民のためをはかるべきである。殊に醫院を建設して、仁術を施

すは、佛教の慈悲の本旨を完うする所以であらう。寺廟の財産を無益のことに徒費してはならぬ。

佛はよくこれを祭るべきも、佛像は決して素りに高大華麗なものを望んではならぬ。かくの如きは徒らに金錢を浪費し、節儉の道に反する。僧侶も國民の一員たる以上、愛國の精神に缺けてはならぬ。

僧侶は妻を娶るべし。日本、西藏、蒙古においては、僧侶も亦妻帯してゐる。もし僧侶にして妻帯せざらんか、佛を信仰する地方は結局人類のあこを絶つことゝなるであらう。(満場哄笑)

七

馮玉祥の雄辯術において、特に指摘すべき點は、彼が講演の一段落毎に聽衆に向ひ「わかりましたか」「賛成か反対か」等の質問を發して、その答辯を求めるところである。この點も學校の先生式であるが、なか／＼その質問を發する手加減が巧妙なもので、必らず聽衆をして、學校の生徒が先生から質問された時のやうに、正直に聲をそろへて答へしめるのである。左の問答はその一例である。

問「汝は何國に屬する軍人なるや」
答「中華民國」

問「汝の食ふ糧食は何人の作るところなるや」

答「農民」

問「汝の總司令が皇帝たらんせば如何」

答「直ちにこれを殺さん」

最後に「もし予即ち馮玉祥が皇帝たらんしたならば予を何うするか」この問に對して「總司令を殺します」に答へしめるのである。

民國十六年馮玉祥は西安において閱兵臺上に立ち、萬餘の兵士に向つて講話した時、手を舉げ、大聲疾呼し、「若し不肖玉祥救國救民に努めず、個人的利權や地盤に吸々たる場合は、諸君のうち誰れでもかまはぬ、銃を採つて予を打ち殺されよ」に叫んだ。時に満場寂然として聲なく、聽衆はたゞ感激に打たるのみであつたに云ふ。馮玉祥の雄辯はいつも大向ふを唸らせる。

八

馮玉祥はクリスチャン・ヂエネラル時代、毎日朝夕軍隊をしてバイブルを讀ませたものであるが、近頃はバイブルをやめて、馮玉祥自ら作製した「毎日朝會の問答」なるものを、毎朝食事前に朗讀せしめてゐる。問答の題目は歴史や時事問題をこらへて、救國愛民、反軍閥、反帝國主義等の思想を宣傳するのである。中には途方もない排日宣傳もある。左記は馮玉祥の近作の二つである。

一 不 忘

問 我が軍歴年戦争に従事す。これ我が國を侵略する帝國主義と賣國軍閥を倒さんがためである。汝等これを理解せるや？

答 理解してゐます。

問 我等の反對する帝國主義と賣國軍閥とは何を指すか。曰く。民國四年、われに二十一ヶ條を強迫した日本、民國十四年五月三十日我が學生と労働者を殺害せる英國がそれである。而して日本は張作霖と結び、英國は吳佩孚を援助す。是等の走狗と戦ふ、これ即ち國家を救ひ、人民を救ふ所以、豈一人や二人のためをはかるものならんや。汝等これを知るや否や？

答 知つて居ります。

問 我等兄弟は國家を救ひ、人民を救はんがため、死して葬埋するなく、傷ついて薬治なく、傷つかず、また死せざるも衣食なし。汝等これを忘れはせぬか。

答 決して忘れませぬ。

問 直隸、山東、北京と東三省一帶の老百姓は土匪軍隊のために奸淫擄掠を蒙り、生活不能の窮狀にある。我等は彼等を救はずして可なりや？

答 救はねばなりません。

問 事態は斯くの如し。如何にせばよきか？

答 死を恐れず、錢を愛せず、忍苦耐勞、主義を明白にし、國家を救ひ、人民を救ひ、此の恥を雪がんことを誓ひます。

二 國 耻

問 外國人が我等中國人を欺侮し始めたのは何時頃からのことか？

答 阿片戦争の時からです。

問 阿片戦争は英國人が強制的に我が國へ阿片を入れんとして起つた戦争である。我が國不幸にしてこの戦ひに敗れた。これより後、われ等は幾多の不平等條約の締結を餘義なくされた。汝等これを痛恨させざるや？

答 痛恨の至りです。

問 庚子の年、八ヶ國の聯合軍北京に入り、奸淫擄掠、到る所焚殺し、領土の轄讓、賠款、京津の駐兵を強要した。轄讓地は永久に還らず、賠款の負擔重く、京津駐屯の外國軍隊は、武威を以てわれを壓してやまない。汝等これを罪惡と思はざるや？

答 非常の罪惡であります。

問 日英佛米等の帝國主義的國家はわが國をして領事裁判權を認めしめた。彼等は中國にあつて殺人放火をなすも、われ等はこれに干渉することが出来ぬ。しかも中國人にして外國に赴かんか

答 不平状態にあります。
到る處必らず外國の法律によつて勾束される。汝等は法律上平等の状態にあると思ふか？

問 日英米佛等の帝國主義國は我が國の關稅を把持し、われ等はわが國に輸入される外國貨物に對して自由課稅の權利を持たぬ。しかも中國人にして外國に貨物を輸出せんか、彼等は勝手に關稅を賦課する。汝等の經濟的地位は平等にあるか、或は不平等か？

答 不平等であります。

問 日英米佛等の帝國主義國は我が國にあつて幾多の租借地を有してゐる。外國人は中國國境内において、幾多の獨立小國を建設し、中國の權利を奪取してゐる。汝等これを恥辱と思はぬか？

答 恥辱の至りであります。

問 わが國の鐵道及び鑛山はすべて彼等のために強奪されてしまつた。われ等は交通の運輸、石炭鑛の發掘の自由を失ひ、ために工業及び商業の發達が妨害されてゐる。人民ために困窮し、生活に苦しむ。汝等これを苦痛とせざるや？

答 傷心の至りであります。

問 十四年五月三十日、英國人は上海において幾多のわが學生及び勞働者を殺し、また廣東、漢口、南京、重慶等においても慘殺した。その後また英國軍艦は四川萬縣においてわが同胞二千餘人

を慘殺し、市街を焼きはらつた。彼等は何故しかく我等を欺侮するのであらうか？

答 われ等が自衛の力をもたぬからであります。

問 兄弟よ。以上の事態を見るに、われ等の國家、われ等の種族は滅亡に瀕してゐるのである。たゞ帝國主義と賣國軍閥を打倒し、中國の獨立と自由を確立することによつて、始めて一條の活路を打開し得べし。これ誰の責任か？

答 われ等の責任であります。

九

馮玉祥はその部下の將卒及び官吏に對する講演や、布令の中に、「三口號」「三大要件」「十誠」「治政八綱」「三句不忘的話」なき云ふ數字附の標語、もしくは座右の銘式の訓示を與へる。その多くは馮玉祥自ら作製したもので、その時環境に適切なる字句を並べ、簡潔にして要領を得てゐる。左にその二三の例を掲げて見やう。

◇

馮玉祥は民國十五年秋、ソウエート・ロシアから歸つて、五原に誓師するや、左の「三個口號」なるものを作製し、將卒をして、教練や体操の折毎に、口號せしめた。

一、本軍政治化革命化每天要讀政治問答。（本軍は政治化、革命化のため、毎日政治問答を讀む

べし)

- 二、打破官僚惡習建立同志軍隊。(官僚の惡習を打破し、同志軍隊を建立す)
- 三、拔除虛偽惡根。(虚偽惡根を拔除す)



十七年三月、馮玉祥は洛陽において、教導團に對する訓示演説の劈頭「忘るべからざる三句」なる標語を示し、「時々刻々記着すべし」を命じた。即ち曰く

- 第一句、我們的國家快要亡了、我們要不努力定要亡國奴了。(われ等の國家は將に亡びんとしてゐる。われ等努力せざれば即ち亡國の奴となるであらう)
- 第二句、我們的種族快要滅了、我們要不拚命定要滅種了。(われ等の民族は今や將に滅亡せんとしてゐる。われ等生命を賭けて努力せざれば、わが民族はやがて滅びてしまふであらう)
- 第三句、我們四萬々民族的國家、被那幾百萬幾千萬民族的國家欺倭的連「孫子兒」連猪狗都不如、我們還不覺悟？(四億の民からなるわれ等の國家は彼の僅か數百萬、數千萬人位の國家に孫子か猪狗のやうに欺瞞侮辱されてゐる。それでもなほわが民族は覺悟がきまらないのか?)



十七年四月蘭封にゐた頃、馮玉祥は士官を集めた席上、訓示演説において、左の「三要件」をか、

け、士官教育の標榜をなした。

- 第一件、作事要結實。(事を作す、結實たるを要す)
- 第二件、作事要責任心。(事を作す、責任心を要す)
- 第三件、作事要有自動的精神。(事を作す、自動的精神あるを要す)



馮玉祥は十七年八月四日、南京中央播音臺上から、民衆に向つて「三十二字的貢獻」なる公共精神獎勵の標語を投げ、大いに喝采を博した。

- 互相原諒、互相輔助國家之利、個人蒙福、切勿猜疑、切戒挑剔、不慌不忙、合而爲一。
- (互によく理解し合ひ、互に助け合ひ、國家の利益についても、個人の利益についても、みだりに猜疑するやうなここのないやうに、またみだりに剔決するここのないやうに、あせらず騒がず互ひに一致して事に當れ)



馮玉祥は對外方針を談する時、「必らず十四個字最要緊」を題する左の標語をくりかへすを常としてゐる。

無事時以禮相待、有事時據理力爭。(無事の時は禮を以て相待ち、有事の時は道理に據つて力爭

する)

馮玉祥は國民軍と地方人民との接近をはからんがため、全軍の士官に向つて左の「十事」を命令した。

- 一、國民軍の將士は常に人民のために、道路修繕をなす。
- 二、人民のために街道各處の汚穢を掃除し、清淨にする。
- 三、人民のために、井を掘り、溝渠を開き、また堤防を築造し、水災を防ぐ。
- 四、人民のために、樹木を植ゑる。
- 五、各所に、官立平民學校を設立し、以て人民をして、文字を識らしむ。
- 六、病人のため、一切の救助をなす。大小を論ぜず、人民に利益することならば、早速これを行ふ。
- 七、軍用の騾馬は、主として人民のために使用し、或は田を耕し、或は貨物を運搬せしむ。而してそのための人馬の勞に對しては、人民より報酬を受くるを許さず。
- 八、車輛はこれを人民に貸し與へ、運搬用或は種まき、施肥に使用せしむ。
- 九、軍樂隊は毎日民衆の集合する地點に奏樂して、人民の心を悦ばすべし。

十、軍醫は、民衆中特に醫者にかゝる金なくて困つてゐる病人を見舞ひ、病氣を治療し、また、病氣の發生せぬやう十分注意すべし。

以上の十項は各階級の軍人官吏達が同胞の生命、安全、幸福のためにその力の限り努力し、その土地によりその時に應じてこれを行はんことを切望する云々。

馮玉祥最近の標語に「六字口號」なるものがある。即ち曰く
要少、要小、要好。(少くせよ、小さくせよ、好くせよ。即ち使ふ人は少く、責任を負ふことは小さく、しかも事業は最も好くこれを遂行せねばならぬ)。

國民軍は馮玉祥個人の私兵でなく、國民の軍隊であることは、馮が常に國民軍の將卒に説いてゐるまゝころである。馮玉祥は新兵の入營毎に、この國民軍の「軍是」を理解させるため、その訓示演説の際中、左の「七個問題」を口號し、新兵をして、一齊に即答せしめる。

- 一、我等の父母は誰か? 答、老百姓です。
- 二、我等の兄弟は誰か? 答、老百姓です。
- 三、我等の親戚は誰か? 答、老百姓です。

- 四、我等の隣人は誰か？ 答、老百姓です。
五、我等の友人は誰か？ 答、老百姓です。
六、我等は家に歸る時何をなすか？ 答、老百姓になります。
七、然らば汝等は誰の軍隊か？ 答、老百姓の軍隊です。

▼儒將としての馮玉祥▲

馮玉祥は煥章を號し、平常習字を好み、顔真卿体を習ひ、特に篆字の大字が得意である。興至れば幾首かの詩を賦し、談笑中にも依然として儒將の風格をあらはす。二十歳近くまで目に一丁字無かつた一兵卒が、二十餘年の後、よくもこれだけの漢學者になつたものである。近年の彼は舊い漢學の外に、經濟學や社會學などの研究にまで手をつけてゐるさうで、にゐた時の如き、金陵大學の應用化學の聽講生になつて、あの巨軀を時々せつせと大學に運んだ。

十五 反 蔣 戰 争

蒋介石の「六大罪」・三年がかりの瞞蔣策・監禁か親
戚待遇か・三國史の劉備を真似たか・蔣の財力と馮
の武力・馮玉祥の「達磨藝」

一
本著は本年十月上旬脱稿したるが、その後印刷中に國民軍將領旗擧の事あり、かねて豫期された
る反蔣運動はいよくその本幕に入ったので、特に本章をここに挿入することにした。

十月九日、國民軍將領宋哲元以下二十餘名は連署を以て、反蔣通電を發し、翌十日、更に山西省
五台山下に閑居の馮玉祥及び閻錫山にあて、大要左の第二次通電を送り、馮、閻推戴、蒋介石打倒
の決意を天下に宣言した。

九日發通電は已に披見されたこと、思ふ。窃かに省るに、國事の崩壊は今日に至つて極まれりこ
云はざるべからず。昨年北伐完成して、蒋介石氏が政權を握つて以來、暴政の跡は數ふるに違な
い。ここに敢て尊臺に對し、痛哭して之を陳ぶ。國民政府は黨治運用の下にある限り、國民公有
の政府で、決して何人にも雖も、私すべきでない。然るに蔣氏が主席の職に就いて以來、威權を濫
用し、第三次全會を私造し、黨を以て一人の黨となし、中央を一人の中央となし、中央集權の名を
籍つて、獨裁專制の實を行ひ、總理の遺訓に「天下爲公」にあるにも拘はらず、蔣氏は實に之に反
して、天下を私した。是れ大罪の其一である。革命政府は廉潔を重んじ、新興の國家は綱紀を最
も嚴にすべきに拘はらず、蔣氏中樞を占めて以來、政治は賄賂の高に據つて左右され、政府要員
及財政官吏は閹閹、又は一味を以て固め、其貪汚の風は、昔日の北京政府よりも、遙かに甚しく

開國の正氣は總て蔣氏に依つて破壊されて餘す所なし。是れ大罪の其二である。連年水災旱魃は全國に遍ねく、僅かに西北數省にして、災民は二千萬人に上り、難民は野に滿ち、奄々死を待つてゐる。更に革命に従事した將卒に對して、十餘箇月に渡つて、一文の給料も支給せず。戦死した者には撫恤せず、負傷兵には醫藥も與へず、僅かに生還した者には衣食を給せず。而して蔣氏一味の私黨は驕奢淫逸の限りを盡し、自から帝王と異らない生活をなして居乍ら、軍民の困苦は少しも顧みない。蔣氏が南京に盤據して未だ三年ならずして、前後約四億二千萬元の公債を發行しながら、財政を公開せず、其用途を聞けば答へず。而して蔣氏自身は特別費其他の名義にて數百萬元を費消してゐる。革命進行の途において、人民よりは諸種の美名の下に膏血を搾つてゐるが、是れを如何にして償はんとするか。是れ大罪の其三である。國を治めんとするれば總て誠意公明を主としなければならぬに拘らず、蔣氏は陰險な共產黨の離間策を利用し、革命同志を故意に危地に陥れてゐる。其の好適例は廣西派を始め、四川、湖南、湖北の各地に戦禍絶えぬに見ても明かである。是れ畢竟蔣氏に政治道德が缺けてゐるが爲である。是れ大罪の其四である。裁兵は救國の最大要項である。編遣會議を開いて、裁兵の實施を行はんとしたことは好いとしても、裁兵せんとするれば、各軍平等に行はねばならぬに拘はらず、友軍の裁兵のみを強いて、自己直属軍は盛んに新兵を招募し、更に獨逸等より盛んに武器を購入し、表面和平統一を裝ひ乍ら、武力を

以て併呑せんとしたるは、大罪の其五である。蔣氏の不義は國人の許す可からざるころであるが彼はナポレオンを夢見て、外交問題を利用し、國人の眼を轉せしめ、屈辱的に濟南事件を解決し今次東支鐵道問題發生して、數箇月を経るも未だ解決する所なく、數百萬邊境人民を流離せしめ、財産の損失は數千萬元に達してゐる。是れ喪權辱國の尤なるもの、痛心すべきことで、大罪の其六である。以上六大罪は彼の罪禍の最大なるもののみを擧げたるものであるが、此の外編遣公債を發行して資金を手に入るや、張發奎、俞作柏、方振武等の革命同志を賊軍と呼び、大兵を發して討伐してゐる。右諸氏は孰れも革命の功勞顯著である。若し蔣氏の此の倒行逆施を打捨て置くに於ては、黨は破壊され、國は國たらず、三民主義革命は消滅するに至るべし。茲に於て、吾等四十萬同志は救國の爲め、起つて、國賊を亡さんとする。何卒兩總司令は大義を重しとし、私交を輕んじ、速かに救國の計を定め、機宜を授けられんことを請ふ云々。

總指揮、宋哲元、劉郁芬、孫良誠、石敬亭、龐炳勛、孫連仲、張維璽、劉汝明、梁冠英、程心明、魏鳳樓、張凌雲、田金凱、馬鴻賓、吉鴻昌、馮治安、趙席聘、陳毓耀、門致中、鄭大章等以下全軍官兵一同。

二

これより先き、第十一章所述の通り張發奎先づ宜昌において反蔣運動の烽火をあげ、これに廣西

の愈作柏等呼應して起てるが、最初この運動の黒幕視された國民軍は、案外にも張、愈等とは何等の關係なきを表明して、特に十月初め、劉郁芬及び熊斌の二氏は南京に來り、鹿鍾麟も亦に蔣介石に伺候し、如何にも中央に對して二心なきを装うた。

この案外におこなしき國民軍の態度には流石の智者蔣介石もマンマ載せられたものか、北支那の形勢は憂ふるに足らずさなし、その最も信賴する朱紹良の第八師及び毛炳文の第三師に命じて、廣西叛軍討伐のため廣東の陳濟棠軍の應援に赴かしめた。然し、その間に鹿、劉、熊等は國民軍の編遣軍縮費及び冬季防寒具費若干をせびつて、これを手に握るや、密かに南京を抜け出して、上海に逃れた。かくして、一、蔣介石軍の精銳を南方廣東に送り出さしめ、同時に、二、軍資若干をまきあげ、二重に蔣介石を瞞し終るや、突如陝西において國民軍將領は一齊に起つて反蔣の旗をあけた。

馮玉祥は五原誓師以來、一方蔣介石を國民革命軍の總帥としてかつぎあげながら、同時に他の一方窃かに蔣をなめてやらうと、常に術數を廻らしてゐたのであるが、蔣介石も去るもの、仲々馮の手にはのらない。否な十八年春、武漢戰役及び韓復榘の寢返りには、馮の方が却て蔣のためにしてやられたのである。しかし十月初旬の反蔣旗擧的一幕においては、蔣介石はたしかに一本參つたかたちである。國民軍將領叛起の報に接した蔣介石の驚愕は一方でなく、南京政府は一時非常の憂色

につ、まれた。

三

國民軍將領の反蔣通電の南京に達するや、蔣介石は先づ、

第一、編遣委員會をして、國民政府に左の宋哲元以下馮派將領討伐の呈請をなさしめ、

宋哲元、石敬亭等は編遣を破壊し、中央に背叛し、逆跡顯著である。依つて通緝剿辦の明令頒布を請ふ。

竊かに査するに、馮玉祥は擅に軍隊を移調し、鐵道を拆毀し、統一を破壊し、中央に反抗したので、國府より免職逮捕を明令したが、旋て其罪を悔いて引退し、自ら外遊を請ふに至り、國府は寛大の態度を以て、其の處分を免じ、新生の道を與へ、並に其の所屬部隊も、原來國家の軍隊であるが故に、屢々剴切に宣慰し、一視同仁し、此の數ヶ月來は、軍費、食料、衣服等も均しくその時々給與し、此外にも要求あれば、隨時照發してゐた。

最近編遣を実施するに當り、有らゆる第二編遣區編遣事務は、前第二集團軍の幹部をして、責任を以て辦理せしめ、國府は各該部隊に對し、誓に絶對に岐視の意なきのみならず、其體恤して成全する所以のものは、蓋し此の外侮頻りに到る際、民生憔悴し、中央を鞏固にし、統一を完全するは、實に救國唯一の方法であるからである。殊に編遣實施會議の決議は全國武裝同志一致の公意

に出でたもので、各該將領に少しでも良心があれば、宜しく誠意中央に服従し、切實に編遣を辦理すべきである。

乃ち宋哲元、石敬亭等は陽に服従を表明し、其の餉款騙取の企圖をなすも、陰に編遣を阻撓し、封建勢力の保全を求め、本會の派遣せる點驗人員を竟に敢て任意に羈留し、其の職權行使を許さず。且つ屢々中央に向ひ、軍費糧食を請求し、更に武力をかつて飢民が僅かに餘せる食物を没收し、運糧を扣留した。少數人の轄據の私心を以て、數千萬人民を死地に置くを惜しまず。其の廣く新兵を募集し、部隊を移動せるについては、屢々各方面より報告あり、既に實證がある。査するに本年一月編遣會議第一次大會を開ける時馬福祥の報告によれば、該區兵數は廿七萬であつた。而して八月實施會議の時には、該區の報告によれば、兵數三十九萬である。從來該區に屬する韓復榘、石友三、馬鴻逵、劉鎮華、楊虎誠、席液池等の部隊十餘萬人は現在既に中央に直屬してゐる。而も兵數が却て擴大したのは明かに撞に新兵を招募し、土匪を收編し、以て其の勢力を擴張せるに因る。中央が叛將を懲罰するに、少しでも寛假すれば、編遣實施は再び勵行し難いであらう。

乃ち本月九日、宋哲元、石敬亭等は聯名で通電を發布し、中央を誣毀し、並に公然即日出兵を聲言して、毫も忌憚するなし。これ統一を破壊し、編遣を阻撓し、中央に背叛する逆跡を明かに

したもので、實に再び寛容することを許さぬ。こゝに謹みて一致國府に呈請す。直ちに討伐を明令し、並に宋哲元、石敬亭等を一律に免職逮捕し、懲罰せんことを。各該部隊は或は甘心附逆し、或は脅迫されて盲從せんも、應に分別して剿辦緩撫を請ふ。馮玉祥が倡亂を主使したか否かに至つては、應に調査明白を待つて再び核辨を行ふべし。

本會は専ら編遣を司り、和平統一の擁護を以て職志をなす。苟も萬止むを得ざるに非ざれば、豈に輕言達伐に忍びん。唯叛逆除かざれば、編遣進行せず、和平統一も實現すべきなし。救國救民のため、この際斷然たる處置を請はざるを得ず。伏して垂示を希ふ。

第二、國民政府の名を以て、十月十一日左の第二編遣區將頭討伐の命令を發布し、

國軍編遣委員會の報告に據れば、宋哲元、石敬亭等は編遣を破壊し、中央に背叛し、兵を構へて亂を作せんとする逆賊的行爲は昭然たるものがある、明令を發して其官職を免するに共に、逮捕査辨されたし云々ある。よつて宋哲元、石敬亭等の官職を免じ、逮捕令を發し、逮捕の上懲戒に附す。彼等の節制下にある部隊にして、彼等の甘心を買はんがために雷同し、或は脅迫されて盲從するに於ては、即時各路討伐軍總指揮に命じ、分途進撃掃討せしめ、以て亂源を斷つべし。茲に法紀に照し此令を發す。

第三、十四日附を以て、「全國將士に告ぐるの書」を題し、

世界いつれの國も統一するに非ざれば遂に強國たる能はず。平和によるに非ざれば以て國を救ふべからず。編遣は實に國家治亂の關はり、民族存亡の繫がる所である。凡そ民族の危亂を念じ、國家の苦痛を憐れむる所は、如何にして中央を擁護し、編遣計畫を實施するかにある。然るに馮玉祥、宋哲元、石敬亭等の諸逆は、唯だ統一の完成をこれ恐れ、群雄割據の慾望を満足し能はざるため、編遣の實施を喜ばず。専ら其の野心の發揚に努め、只管編遣の實施を妨害し、統一を破壊して快くしてゐる。數月以來中央に對して、陽には服従を表示し、陰に不軌を企らみ、以て軍費を騙取し、内部に對して糧食軍備を整へ、兵を練り、饑饉省に盤據して、人民の膏血を搾り、災民救濟資金及び穀物を沒收して、逆軍養兵の資に供してゐる。中央は民生及び統一を顧念し、當然疾に討伐すべきであつたが、努めて和平的手段を以て、彼等を改過遷善せしむるため、被服及び食糧を支給したるに拘はらず、彼等は今次事實を捏造し、黑白を混同した通電を發し、舉國和平を渴望せる際、公然叛旗を翻へして平和を混亂し、統一を破壊し、政府力行の編遣を阻碍し、國法を蹂躪し、民意を視ると草芥の如し。是は強いて忍ぶべしとするも、吾人の忍ぶ可からざるは、革命をして消滅せしめて仕舞ふことである。且逆軍は土匪共產黨の結合した封建的集團の團體あるを知つて、主義あるを知らず。彼等は地盤觀念のみ強く、同類に非ざるものは片つ端から剪除してゐる。此逆軍を除かざれば、革命は成功する能はず。革命軍隊の生存は一日として脅迫され

ない日はない。諸將士が今日まで努力した革命建設の功績は根本から覆へされてしまふ。今日まで中央を擁護して來た忠誠なる諸將士は、革命を完成する見地からも、革命軍隊の生存も、革命軍人の人格を保持するため、また反革命の集團を討滅するために、戦はねばならぬ。各將士は成敗を知り、是非を決し、利鈍を以て順逆を定めなければならぬ。逆軍は編遣を破壊し、統一を破壊し、和平を阻碍し、民意に違反してゐる。此の順逆に據つて已に成敗は定まつてゐる。此の逆軍の討伐を終れば、中國の統一は完成されるのである。されば諸將士は過去において革命の爲に奮闘した如く、今次の逆軍の反抗に對しても、一致奮起し、黨國の爲に犠牲となり、反動勢力を削除し、革命軍人の天職を完成されんことを望んで止まない。

云々を公示し、以て國民軍討伐の決意を天下に聲明した。

四

國民、南京兩軍は十月中旬行動をおこし、月末に入つて前線一部は早くも戦闘を開始した。兩軍の勢力比較は如何。

西北國民軍は本年春、第二編遣區に編入され、鹿鍾麟を同區編遣主任、石敬亭を副主任となし、先づ全軍をあけて、大体左の如く改編した。

第二十師

孫桐萱

洛陽

三旅

第二十一師	梁冠英	濟寧	三旅
第二十二師	程心明	泰安	三旅
第二十三師	魏鳳樓	許昌	三旅
第二十四師	石友三	南陽	三旅
第二十五師	張自忠	開封	三旅
第二十六師	田金凱	汝南	三旅
第二十七師	張維璽	南建	三旅
第二十八師	宋哲元	西安	三旅
第二十九師	曹福林	信陽	三旅
第三十師	吉鴻昌	河南	三旅
第三十一師	孫連仲	河南	三旅
暫編第十四師	龐炳勳		
暫編騎兵第二師	鄭大章		
暫編第一混成旅	門致中		

その後、孫良誠軍の山東撤退、韓復榘、石友三、馬鴻逵、席液池軍の離叛、馮玉祥の下野等の事あり、

國民軍各部の配置移動にともなひ、内部の編制にも少からぬ變更があつたものと思はれる。各方面の報道を綜合するに、國民軍の總司令部は陝西の西安にあり、宋哲元が現役總指揮中の最故參謀として總司令を代理し、石敬亭が總參謀長に當つてゐるらしい。

國民軍の中堅部隊は孫良誠これを率ゐて、反蔣通電發布と同時に潼關より河南省に進出し、司令部を洛陽に進め、隴海線に沿つて東進し、一部の枝隊を以て京漢線の中段をつかしめ、これと同時に張維璽等の率ゆる有力なる部隊は漢水を下つて襄陽より湖北の西北方面に長驅し、武漢を窺はんとするもの、如くである。

これに對し、南京側では唐生智軍をして鄭州正面を守らしめ、武漢方面に對しては劉峙軍を配備し、蒋介石は全軍の指揮をこゝるため、十月二十八日軍艦永綏に座乗して南京を發し、三十日漢口に到着、翌三十一日許昌方面の前線に向つた。

五

蒋介石の討馮戰出陣は、征師の辭、出陣の演説なき、仰々しい鳴り物入りで、頗る賑やかなものであつた。即ち蔣は幾度か逡巡躊躇をくりかへした後、十月末いよいよ前線指揮のため、自ら出馬するに決するや、先づ二十七日附を以て、「政府當面の責任は國民現在の危機に懸し、

一、馮玉祥氏はロシアの侵攻に呼應して、中央に背叛した。依つて余は中央政府の討伐令を奉じ

て、生死を顧みず、討伐に邁進する。

二、馮玉祥氏の第一回叛亂に對し、政府は政治的解決方針に依り、寛大なる處置を執つたが、その結果として、第二回叛亂を惹起するに至つた。これにかんがみ、今回は徹底的勦滅を期する。

三、現在中央政府の最大責任は、黨國の基礎を建設し、封建的勢力を芟除するにある。然らざれば支那の擾亂は遂に永久に絶えないであらう。

四、此際全國民衆は中央を擁護し、一致團結、以て國民革命の障害を除き、三民主義を破壊する反動分子の驅逐に當らねばならぬ。

この布告を發し、翌二十八日、即ち出征の當日、國民政府紀念週の機會に當り、政府の役員を集めて、

今回の叛亂さへ鎮壓すれば、革命は將來永久に成功を確保し得るであらう。目下前線では政府軍既に勝利を得てゐるので、余自ら大人氣なく出馬する必要はない。然し前線の將士が敵を侮り、思はざる失敗を招かぬでもないから、自ら出馬することにした。馮玉祥氏は既に閻錫山氏に監視されてゐるので、西北軍は單なる烏合の衆に過ぎないが、たゞ氣にかゝるは、余出陣後の留守のここである。各位一致して前線の將士に後顧の憂ひなからしめよ。

云々にて、壯烈なる激勵演説をなし、更らに軍裝に身をかためて、紫金山頂の孫文廟に到り、故總

理の墓前に、本日征途に上る旨を報告し、「反革命分子勦滅の目的を達成せざるかぎり死すとも歸らず」の悲痛なる征師の辭を朗讀し、次いで、午後二時に至り、陸海空軍總司令旗を高く檣頭にか、けた軍艦永綏に座乗し、中山碼頭拔錨、一路漢口に向つて、長江を遡航した。

かくして、中央軍の總帥蔣介石が、芝居氣たつぷりの、鳴物入りで、賑々しく南京を發し、前線に向つて出陣せるに當り、對手の西北軍本尊馮玉祥は如何に云ふに、彼は今なほ山西省の五臺山下建安村にあつて、悠々自適の隱居生活を送つてゐる。

最近における馮玉祥の行狀はあくまで瓢箪鯨式で、まごをつかんでも、その正体を捉へるここが出来ぬ。馮玉祥の既往二十年間を通じ、恐らく山西入り後の昨今ほごその「馮式狸振り」を發揮したるはなからう。

彼はこの春失敗窮迫の揚句、自らわが身を山西に投じたのであるが、しかし、ころんでもたゞは起きぬ馮玉祥のこゝこである。彼はいつの間にか閻錫山の懷中におし入つて、その喉元に喰ひ下り、最近悠々として、閻の故郷に出かけ、閻夫人の實家たる建安村に閑居し、政治も軍事もそしらぬ顔をし乍ら、ひそかに西北軍將領に密令して、反蔣戦争の火蓋を切らせ、しかも自ら出馬して陣頭に立たうとせず、一部の世間からは閻のために監禁されてゐるかの如くにも見せてゐる。かうして置けばたまひ反蔣戦争が失敗に終つても、自家の安全が保ち得られ、再舉をはかる餘地を存するこ

こが出来よう。閻錫山を利用せんがためには、あくまで閻の前にあたまを下げる。腰を屈する。われ
こわが家族を人質に投ずる……同時に、閻の懷中に喰ひ入る。喉元に喰ひ下る。そして閻錫山を誘
つて、反蔣運動の味方、少くとも同情者に抱き込む……云つた變通自在の遣り口、その凄味と圖
々しさも來ては、馮式狸藝もこゝに至つてその奥義を極む云はねばならぬ。

私が馮玉祥の經歷を閲して、彼の眞骨頂も云ふべき最大の傑出點を見出すは、いつもその失意
逆境にある時である。彼は今日まで幾度か失敗窮迫、進退兩難の逆境に陥つたことがある。しかも
彼はその都度反撥的に奮起し、よく捲土重來の機會を捉へた。馮玉祥はころんでも直ちに起きあが
る術に長じてゐる。馮玉祥の爭覇術の奥義は實はその「達磨藝」にあるのである。

おもふに馮玉祥の山西入りはまさに三國史の劉備が孫權に身を投じた同一の筆法を見るべく、
まことに古今好一對の「達磨藝」云はねばならぬ。

私が支那現代の人傑中、特に馮玉祥の爲人に注目し、その性格と行動について興味を禁じ得ない
所以の一つは實に彼の「達磨藝」である。彼はその失意の境に處して、失望せず、自暴自棄に陥らず
常に一寸屈して一尺伸びる用意を、敗を轉じて勝をなすの計を有することである。英雄の眞價はそ
の失意逆境の時において、最もよく發揮される。馮玉祥の眞骨頂はその既往の二十年間、常に失意
時に處して反撥的に躍進し、その都度新らしい運命を開拓し來つた點にある。

されば、この夏馮玉祥の山西に入り、今にも蔣介石の彈壓下に屈服して、外國におし出されはせ
ぬかと思はれた失意の頂上時においても、私は英文大阪毎日の支那號(八月十四日附)紙上に寄せた
一篇において、

馮玉祥は今や太原の郊外、晋詞に卜居してゐる。彼はかくして蔣介石の彈壓に對して巧みに身を
かはし、南京軍との正面衝突を避けることに成功した。しかしその現狀は極めて苦しい立場にあ
る。彼が最近ある人に「日本に遊び度い。それが出來ぬ間はこゝで閻錫山の厄介にならねばなら
ぬ」と語つた如き、以て彼の現狀の如何に淋しく、如何に失意であるかを推すことが出来るので
ある。然し、馮玉祥の偉らさは逆境に處して絶望せぬところにある。彼は屈して後、如何に伸び
るのであらう。彼の敗を轉じて勝をなすの成算は如何。私は「失意の馮玉祥」に對して「得意時代
の馮玉祥」以上に興味を感じる。

上記したのである。果して、その後二ヶ月にして、今回の反蔣戦争が勃發した。

六

馮玉祥は十一月の初め建安村を訪へる新聞記者に對し、極めて意味深長なる發表をなした。即ち
馮の語るところによるこゝ、

九月十七日某氏(閻錫山を指す)が來訪し、時局問題に就いて意見を交換した。某氏は南京政府

の外交及び内政上に於ける失敗、編遣會議の不公平等をあけて、蒋介石を攻撃し、われ等はこの討蔣遂行の方針を決定した。また反蔣軍が勝利を得た場合、全國の兵工廠を停業し、革命運動に努力した功勞者に協力して、新政府を組織することにについても、意見の一致を見た。かくして萬事某氏に協議を遂げた後、秘書長に十月十日發した通電を起草せしめたのである。

反蔣旗擧後の西北軍の軍隊の名稱に就いて、種々議論が出たが、予は「救民軍」もしくは「保民軍」が好からうと云つたが、某氏は「國民軍」が好い。吾等の目的が、國民を主とした國民政府を組織するにあるを以て、「國民軍」と云ふことが最も相應しからうと云ふので、遂に國民軍と稱することに決定した。而して某氏を總司令に任じ、予が副總司令と云ふことになつたわけで、今次の戰爭を開始するに當つては、予が六割、某氏が四割の責任を負ふたのである。而して、われ等両者は鄭州の陥落をまつて、石家莊に赴く豫定である。

戰勝後の新政府は矢張り國民黨の政策を實行するが、現南京政府の如く、街道や壁上にピラを貼るが如き、宣傳にのみ重きを置かず、事實に即した方針を取りたいと思つてゐる。

新政府の設立地點も戰勝後の代表會議の決定に俟つてあらう。

と云ふのである。これによつて見れば、今次の反蔣旗擧は、馮、閻兩氏間完全なる協定によつて決行されたものと見なければならぬ。しかし、西北軍の旗擧に對して、山西軍呼應せず、却て閻錫山

は十一月五日討逆軍副總司令に就任した。但し、閻は病氣を稱して、引つこもり、山西軍は今尙ほ馮、蔣いづれの側にもつかない。

私が本稿を擱筆するまでは、西北對中央兩軍の戦局はまだ決勝戦に至らず。たゞ河南の正面において、十一月初めに至り、西北軍逆襲に轉じ、中央軍の旗色振はずとの報道が傳へられた。もこより西北國民軍は軍資、武器、糧食等の物質方面においては、遙かに中央軍に劣るであらうが、その各部隊の結束、多年困苦に缺乏に戦ひ來つた試練に修養、逆境から脱け出よう、難局を打開しようとする覇氣に闘志においては中央軍をのんでかゝるの勢ひである。而して支那の内亂においては闘志の強き軍隊が勝利を占むるを常とし、單に武力だけの勝負においては、勝ち味は西北軍の側にあるやうに思はれる。然し蔣介石には往々にして武力以上の力たる財力がある。彼はいさゝと瀨戸際に、金をバラ撒いて、灰色軍を買収してしまふ。時には對手方の内部に喰ひ入つて、寝がへりを打たせる。この春韓復榘、石友三等を買収して、馮玉祥を參らせた手並みは實に凄いものであつた。今度の反蔣戰爭においても、馮玉祥の方寸では、國民軍にして一度起てば、全國の灰色軍は期せずして反蔣軍に加擔すべしとの目算であつたらしいが、蔣介石の財力一度動き出すや、已に一旦反蔣軍になつたと傳へられた陳調元や孫殿英等すらいつの間にか中央擁護に豹變し、また最初態度を疑はれ、一時南京で監禁説を傳へられた唐生智も亦、今現に鄭州方面において蔣介石軍の先鋒隊を承

つてゐる。

私は本年一月、故田中前首相との會見に際し、

今年から來年にかけての支那の時局は「馮玉祥の武力」を、「蒋介石の財力」の二つの力によつて動いて行くものと観てゐる。

と語つたが、その後の事態は悉く私のこの豫想を如實に現出した。而して結局「馮玉祥の武力」と「蒋介石の財力」と、そのいづれが勝つか。勝敗は兵家の常であり、また時の運で、豫測の限りでないが、もし、蒋介石にして戦敗せんか、恐らく、國民政府首席の地位を保持することは至難であらう。しかし馮玉祥は戦ひ利ならざれば、たゞ再び陝西、甘肅の山奥へ引つこむだけであらう。國民軍の地盤が交通不便、物資缺乏の西北地方であることは同軍の最大弱味であると同時に、また何よりの強味である。國民軍にして一度陝西、甘肅に引つこまんか、これを追撃し、これを討盡することは到底不可能のことである。

十六 未知數の馮玉祥

老獪、變節、赤化、排日・「親日」・「排日」の両刀使ひ
・個人感情に支配さる、國際政策・「英雄涙多し」・
叛逆者か革命家か・未成品の強味・孫文・馮玉祥・
支那のクローンウエルかケルマ・バシアか

馮玉祥に對するわが識者一般の批評を聞くに、多くの人は、一、彼は老獪である。二、彼は豹變常なし。三、彼は「赤」である。四、彼は常に排日を宣傳してゐる………云ふのである。更らに嚴しく馮玉祥を攻撃するものは、彼は長上に叛き、同僚を陥れ、常に旗幟を不鮮明にして、肝腎な危機に、平氣で洞ヶ峠を下る變節漢である、彼は表面耶穌の清教徒を装ひ、質素朴訥なる如く見せてゐるが、その實内に財を蓄へ、權力を用ゐて、私利を營み、また人に接するに謙讓の態度をこり、聲を低くして、容貌を和らげ、いかにも温厚の君子なる如く見ゆるも、腹の中では、人を屁とも思はず、平氣でウソをつき、顔に色をあらはさず、表裏の一致しない偽善者である云ふのである。馮玉祥の性格及びこれまでの閱歷、行動、政策を見るに、たしかに、彼は老獪である、また幾度か豹變もした、また「赤」に見られ、「排日主義者」に見なされるべき事由も少くない。

たごへば、彼はモスクワ滞在中ボリシエウイキーの歡心を買はんがために、「レーニンの眞似」なごして所謂「赤色扮装」の芝居を打つた。彼は蒋介石を籠絡せんがために、その居室に蔣の寫眞を孫文の寫眞ならべてかけたなりなごした。昨年秋南京にゐた頃の馮玉祥を來ては、蒋介石、譚延闓、はては胡漢民や、戴天仇等の下風に立つて、おごなく、行政院副院長兼軍政部長でおさまり、最も柔順、忠實な三民主義の信徒、國民政府の一役員として「猫をかぶり」、「爪をかくして」ゐたあり

さまは、煮ても焼いても喰へぬ老獐振り云はねばならぬ。

また彼の既往の閱歴を見るに、段祺瑞に用ゐられ乍ら、その命令にたてついて武穴に唱和し、吳佩孚の配下にあつて出征し乍ら、中途から馬首をかへして、北京クーデターの犬芝居を打ち、曹吳の直隸派を一蹴したこゝなごは、みな長上に對する叛逆、即ち明白なる豹變、寢返へり、裏切りである。

また馮玉祥の陝西や、河南における督軍振りを見るに、善政の美名の下に、随分烈しい強制的改革を斷行し、一部の人民から怨みを受けたものである。人に對する應接振りにしても、眞に誠意があるのか、さう見せてゐるに過ぎないのかわからぬ場合が多い。また基督教徒であつたものが、いつの間にか、ボリシエウイズムに傾き、また更らに三民主義に變り、はつきりした定見を持たないやうにも見へる。

たゞ馮玉祥の「赤色」に至つては、最初から疑問さされ、適確にこれを肯定すべき論據はないが、しかし、彼が自らソウエート・ロシアに赴き、ボリシエウイキーの援助に倚つた事實から推して、世人の多くが、彼を「赤」目するに至つたのは、固より當然のことである。

馮玉祥の「排日政策」は十數年來有名なものである。彼は曾て自ら排日宣傳標語を作り、國民軍の兵卒をして、その體操の號令に代用せしめたこゝさへある。

然らば馮玉祥は變節漢か、「赤」か、排日主義者か。おもふに、凡そ、物には表と裏とがある。かりそめにも馮玉祥の如き、よかれ悪しかれ、支那の大勢を左右して居る大人物を捉へて、たゞその半面のみを觀察して、直ちにその全体に批判を下すは、あまりに早計であらう。

私の觀るところ、馮玉祥はその半面において、老獐であると同時に、他の半面において、眞面目な熱血漢である。彼の閱歴には寢返へり、裏切り等の事實が幾度か繰りかへされたが、その全局を通じて見れば、彼は革命家を以て一貫し來つたこゝも云へると思ふ。

二

馮玉祥の排日主義には因つて來るこゝろがある。即ち第一、彼はそのクリスチャン・ヂエネラル時代、外國人とは主として米國の宣教師と交際したが、宣教師等は馮に向つて、何よりも熱心に、排日宣傳をたきつけた。第二、彼が陝西督軍をしてゐた頃、朝鮮人數百名同省に移住して來た。彼等も亦さかんに馮玉祥に日本の惡宣傳を吹き込んだ。第三、彼が河南に督軍をしてゐた時、同省に在住した日本人は主として、禁止品販賣を業とする商人であつて、禁煙、禁酒を第一の法度とする馮督軍の目には、是等の日本人は甚だしい不良分子に見え、自然馮の日本人に對する印象が益々惡化したわけである。第四、北京クーデターの後、馮玉祥が京畿方面に勢力を振ふに至り、張作霖と中原逐鹿を争ふや、常に彼の目に張作霖を援助し居る如く見えた日本は、彼にまつて、最も惡むべ

き外敵となつたわけである。第五、馮のロシアに接近するに至り、ボリシエウイキーも亦、彼に日本の「帝國主義」反對熱を吹き込んだらしい。

かゝる幾多環境の事情から、馮玉祥は日本及び日本人に對して、深刻な反感を抱き、また従つて彼が機會のある毎に、自ら排日宣傳をなし、常に排日政策を提唱したことも事實である。しかし最近數年來、彼は屢々親しく日本に接觸する機會を得、また自ら日本の事情を研究した結果か、大分よく日本を理解するやうになつた。これについては、民國十三年の秋頃から、度々國民軍の賓客または、顧問として、彼に起居を共にしたわが陸軍の松室中佐の勸説に感化も、また與つて力あつたやうである。

馮玉祥の日本を解し、日本人を識ることも、彼の對日反感はやがて日本人に對する尊敬、親愛の情に變つて來た。近年この傾向が益々顯著になつて來たやうであるが、しかし濟南事件以後の馮玉祥の日本に對する態度は、「排日」でもあり、同時にまた「親日」の如くにも見える。即ち、彼は到るころ、講演や演説において、その得意の雄辯を揮つて、濟南事件に對する日本罵倒の獅子吼をなし、また國民軍の將卒をして、極端なる排日宣傳をなさしめた。しかし、これと同時に、馮玉祥はつこめて、日本及び日本人に接近し、また、その長子洪國をして日本に留學せしめ、恰かも彼がロシアに接近した頃、その子女をモスクワに留學せしめたと同じ政策をくりかへしてゐる。然らば

彼の眞意は「排日」か、「親日」か。彼はその軍隊の士氣を鼓舞し、その結束を固くするための政略としては、濟南事件の如き機會は大いにこれを利用して、排日熱を鼓吹するを得策したが、しかし、馮玉祥の目指す目的は、第十章所述の如く、「海」にある。「港」にある。これを換言すれば、山東とその良港青島こそ、國民軍の目標地であつたのである。而して、その山東の鐵道沿線及び青島には日本軍が駐屯してゐる。山東の主人公たらんがためには先づ日本との諒解、親善關係が必要である。一説によれば濟南事件についての日支交渉の行惱んだ時、馮玉祥はひそかに王正廷に向つて多少の讓歩をなしても速やかに解決すべきを勸告したと云ふ。即ち馮玉祥が内、國民軍及び民衆に向つては「排日」を宣傳し、外、日本に對しては親善接近政策をこつたのは、決して偶然のこゝでなく、かくしてその後の馮玉祥は「排日」に「親日」の兩刀使ひをやつてゐるのである。

三

日本の識者の多くは馮玉祥を嫌ふ。而してその理由とするところは、馮は、第一、排日主義者である、第二、彼は「赤」であると云ふにある。

馮玉祥の「赤」については、色々の見方があつて定説がない。但し彼の「赤化」を以て、たゞロシアの援助を得んがための方便であつたを見るは、聊か皮相の觀察の嫌ひがあらう。馮玉祥の思想的左傾は固より疑を容れぬ事實である。たゞ問題はその左傾の程度である。彼はどこまで現在左傾して

るるか、また將來左傾するであらうか、興味ある問題である。然し、彼の左傾の共產主義に至るまでには、尙ほ遠い距離があり、たゞひ彼が將來更らに深く左に傾くにしても、恐らく共產主義に達する程度まで、赤くなるやうなことはあるまいと云ふ人もあるが、これにて漠然たる豫想に過ぎぬ。

但し、假りに馮玉祥は事實、共產主義者である。レーニンの弟子である。「赤」である……としたところで、この一事を以て、直ちに彼を嫌忌し、排斥するは何うであらう。たゞへば同じく國民革命軍の巨頭たる蔣介石の如きも、馮玉祥と同じくロシアにも行き、またボリシエヴィキーから援助も受けた。たゞ十六年の春以來、蔣は赤露と斷ち、また共產黨を討つたので、わが當局者の中には蔣介石ならば手を握り、親交を結び得るものがある。しかし馮玉祥も亦同じくロシアと斷交し、共產黨を排除した。馮玉祥にしてなほ日本の敵と目すべきならば、蔣介石もまたわれと齡すべきでないしなければならぬ。また蔣、馮両者の日本に對する態度、政策から觀ても、いづれを「親日」とし、いづれを「排日」とするか。蔣介石を主席とする國民政府は常にその排外運動の鋒先を日本に向けてゐる。馮玉祥が「親日」と「排日」の兩刀使ひをやつてゐるに、蔣介石の口に「親日」を語つて、手で「排日」を行ふに過ぎただけの差があるか。

馮玉祥は對外政策の上においても、未知數であると思ふ。彼は最初日本及び日本人について無智

識であつた。朝鮮人や米國人の宣傳にあやまれた。そのために排日政策に傾いたのである。従つて彼が親しく日本人と相識り、日本の實力を認め、日本の政策を理解するにこそ、彼の從來の極端な排日的態度は幾分緩和されて來た。されば今日「排日」であるの故を以て、明日の馮もまた排日と目して、無暗に毛嫌ひするの非なるは、昨日彼がロシアと親めるを見て、今日の馮もまた「赤」であるになし、日本は永久馮と相容れずとすの說の當らざるに同然であらう。

おもふに蔣介石も馮玉祥も、畢竟同じ支那人である。同じ支那人を捉へて、甲を嫌ひ、乙を親しむは、偏見の譏を免れぬと同時にまた、單に蔣介石を好くのを以て、南京と親しみ、馮玉祥を嫌ふが故に、國民軍と絶つべしと云ふは、あまりに單純過ぎる考へである。

「革命の支那」に對して、わが一部當局の持つてゐる態度を見るに、恰かも往年「革命のロシア」に對してされると同じく、對手の人物に對する「好き」「嫌ひ」によつて、その政策を加減せんとする傾向があるやうに思はれる。而してその結果、對露策の全然失敗に終つた如く、對支策も亦この點において失敗をくりかへしはせぬか案ぜられるのである。由來國際のことは、對手方に對する「好き」「嫌ひ」によつて、加減し得るやうな單純なものでない。そこには複雑なる關係があり、盤根錯節表裏相反することが多く、對手方に對する感情なきに支配されて、冷靜な判斷をあやまる如きことがあつては大變である。

馮玉祥は直情徑行の熱血漢で、また極めて涙もろい情の人である……云ふならば、あの煮ても焼いても喰へない老獐そのもの、奸雄に、涙なきあらうか。反問するものもあらうが、彼に親しく近接するものは屢々彼の涙を見るのである。たゞせば、十七年十二月十三日、南京におけるその行營で、國民軍將領の授賞式に際し、訓示演説において、話頭の漳河の戦における陣没將士のこゝに及ぶや、彼は哭いて聲を成さず、滿場をして感泣せしめた云ふ。また同年の春、南口の陣没將士追悼會における彼の演説は、實に聲涙もに下るの慨があつた。

馮玉祥の性行について、その側近者の語るところを聞くに、彼の特色とするところは、その強烈なる感激性にある。彼は非常の熱情家で、一度悲哀の感に打たる、こゝがあるこゝ、慟哭、流涕してやまない。まゝこゝに英雄涙多しである。又一度憤怒するや、その恐ろしき見幕には部下の諸將はたゞ震ひあがるのみで、傍へよりつくこゝも出來ぬ云ふありさまである。馮玉祥の感激性はあらゆる不正行爲、罪惡に對して、烈しく働らき、これに對する憎惡の念が強烈を極める。

彼は一面、親しきものに對して涙もろいと同時に、他の一面、味方敵を問はず、不正なるものに對して憎しみに燃えるのである。その部下の不品行、過失に對する詰責、處罰はまゝこゝに厳しい。馮玉祥は半面において、圓轉滑脫、老獐を極むる同時に、他の半面、直情徑行、あくまで善

を愛し、惡をにくむのである。

馮玉祥には敵が多い。その原因の一つは、彼の敵に對する憎惡の念の強いこゝである。馮玉祥は曾てモスクワにあつた頃、張家口の張之江に於て、「張作霖は敵なり、敵は轉じて、味方みなすを得べし。吳佩孚は仇なり、仇は到底和すべからず」の手紙を寄せた。而して彼は吳佩孚は永久的に不倶戴天の仇敵たるのみならず、張作霖もつひに和するこゝが出來なかつた。老獐冷靜なる馮玉祥にも、他の半面において斯くの如き熱烈燃ゆるが如きものがあるのである。

五

馮玉祥の人となりについて考察する時、私はいつも先づ彼の魁偉なる體軀に注目せざるを得ない。馮玉祥は身の丈六尺に近い偉丈夫である。曾つて躰格自慢の白井哲夫氏が、北京に遊んだ時、馮玉祥に會つて「支那には乃公より大きい男がある」と驚歎した云ふ話がある。それほゞ馮玉祥は大きな躰格の持主である。而して彼は身体の大きさに比例して精力も強く、意志もかたい。彼は強健なるが故に、人並み以上の勉強と困苦に耐える。夜おそく寝ね、朝早くおきて働く。智識労働にも強ければ、肉體労働にも頗る強い。それに彼はまた粗衣、粗食、粗住に對して平氣である。兵卒と全然同一の生活をして、すこしも弱らない。かつて國民革命軍第二集團軍の政治委員として、馮玉祥の北伐行軍に隨從した簡又文はその馮玉祥の批評において、特に彼の体力の旺盛なるこゝを指

摘し、

馮玉祥の父はもこ北方の軍人であつた。そのためであらう。彼の体格もまた非常に魁梧壯健である。頭は大きく圓く、赤面肥大、髪の毛は盡く刈つて唇の上には少し許りの鬚を蓄へてゐる。それが又まここにチヨツピリで、その巨軀にそはない感がある。この強健なる体軀があつてこそ彼はよく普通人の及ばざる刻苦耐勞もなし得るのである。之れ實に彼の天賦最善の資産であり、又成功の利器もなるのである。

こ論じてゐる。

馮玉祥の性行はその頑強なる健康の反映として、一面意志堅く、陰忍力強く、あくまで剛直である。同時に、他の一面荒削りで、やゝもすれば粗暴に失する嫌ひがある。

馮玉祥は「天賦最善の資産」「成功の利器」たる非凡の体力をもつて、萬事先頭に立つて實踐躬行に當る。彼の部下も亦勢ひこれにならざるを得ない。國民軍が常に困苦缺乏に耐え、甘肅行軍の如きを敢行し得たるは多くその總帥馮玉祥自らあらゆる肉体的試練にあたり兵卒の師範となつたからである。この點恐らく支那現代の武將中他に比肩するものはなからう。

然し、馮玉祥はその頑健なる軀軀を以て、自ら何事も實踐躬行して、將卒の師表となる。自らよく難行苦行に耐え得る故を以て、無暗にこれを他に強ひ、部下にしてこれに服せざる時は、嚴酷

なる制裁を加へる。近年はやめたが、二、三年前迄では軍棍、罰跪、釘鐐等の体刑をさかんにやつたものである。この体刑は兵卒ばかりでなく、將校にも加へる。しかも馮總司令自ら棍棒をこつて處刑の役に當るここさへある。

曾て馮玉祥が豊鎮にあつた時、張某なる團長が屢々禁酒を訓戒したにも拘らず、酒氣を帯びて、兵營にあらはれたのを發見するや、そこに居並ぶ士官に軍棍二百に處すべきを命じた。各士官は同僚を打つに忍びずこつて、固辭するや、馮自ら棍棒をこつて、張團長をした、かに打ちのめした。

馮玉祥がかゝる手荒き暴力を揮ふは、要するに一つは不正、曲邪を惡む性癖の強烈なるにも因るが、また一つは彼自身の性格に缺陷があるものこ見なければならぬ。

馮玉祥はその人格の修養においても、また未成品である。彼の性格は荒削りである。されば彼は今もなほ修養を積んでゐる。戰爭に、政策に、失敗を重ねる毎に、深刻なる教訓を受けつゝある。殊にこの春の蔣介石の彈壓、韓復榘等の離叛は馮玉祥にこつて、何より嚴しき修練の機會を與へたものであらう。彼は今山西省閻錫山の郷里に隱遁生活をやつてゐる。彼を訪ふ人は、みな馮玉祥は最近見違へるほご角がこれて圓熟し、その性癖の狷介なこころがなくなり、荒つほい、もしくは人を喰つたやうな態度をあらはさないやうになつたこ云ふ。

最近國民軍附政治委員として馮玉祥の帷幄にあつた簡又文は昨年秋「一個の忠實なる革命家」を題して、馮玉祥に對する批評の一篇を草し、その冒頭において、

反革命家は馮玉祥を評して彼は倒戈の常習者であるを罵り、帝國主義者は彼は信義無く、友人を平氣で賣るを非難し、また國民軍に對して私憤を抱くものは、彼は主を賣り、榮達を求むる大逆無道の奸賊であるを罵つてゐる……

と記して、馮玉祥が支那人間にも、甚だ不評判なることの事實を肯定し、

然し一般の愛國者は三民主義の立場から馮玉祥を観察し、全くこれと異つた批判を下してゐる。

さて、先づ「馮玉祥は革命家である」この斷定を下し、左の如き説明をこれに加へた。

馮玉祥の革命性は社會及び經濟的背景を有するものである。彼は無産階級の出身で、一身一家は非常な經濟的壓迫を受け、且つその懇親のものもまた飢寒交々迫るの窮乏をなめ、悲惨なる環境の中に成長したのである。馮玉祥の剛直勇俠の品性、殊に長上に對して抗爭する資質は、その幼年の頃から惡環境、惡運命との奮闘によつて鍛へられたもの。即ち社會及び經濟的不平不満から反抗心をおこしたもので、彼が革命家として身をおこすに至つたのは、この端を發してゐるのである。その後馮玉祥は萬惡叢集せる北京軍政界に伍し、官僚軍閥の淫惡驕奢の生活に、そ

の國を禍し、民を殃する行爲を目撃するに及び、彼の革命性は更らに強き刺戟を受けて、益々堅固を加へたのである。而して、彼の信仰せる基督教中の「善惡不兩立」及び「犠牲救人」等の教義も亦、彼の人格を鍛へ、その革命性を養ふに力があつた……

もこより國民軍幕僚の馮玉祥論には相當のかけ値あるものを見なければならぬが、しかし彼の迂餘曲折に富む閱歷を仔細に通觀するに、終始一貫革命の途を進んで來たものではなからうか。世人の云ふ「豹變」「寢返り」「不信義」もその一貫した革命の素志に、その時代の潮流につれて變り行く思想の上からこれを觀れば、悉くその時、その場合における舊勢力に對する反抗、即ち革命行爲であつたことも云へるのである。

彼は清朝陸軍の一兵卒より身をおこして、民國革命の劈頭これに加はり、袁世凱の帝政運動に反對し、張勳の復辟軍と戦ひ、次いで吳佩孚等の舊式軍閥の配下にあり乍ら、これを裏切つて顛覆し、北京クーデターの後、ロシアの後援を利用し、南方を提携して、先づ段祺瑞を逐ひ、張作霖を向ふに廻して北伐戦に奮闘した……等の事實は、これを一つ／＼さらへて批判すれば、たしかに長上に對する叛逆に相違ないが、しかし、革命家としての馮玉祥の立場からこれを云へば、彼は常に舊式軍閥、反動勢力と戦ひ來つた、即ち革命をもつて終始一貫したと云へるであらう。更らにこれを詳説すれば、馮玉祥は廊坊に旗を擧げて、張勳の復辟を討滅した。叙府の回師によつて、袁世

凱の帝政運動に反対した。武穴に平和を唱へて、南方革命派のためをはかつた。北京クーデターにより、直隸派の反動軍閥を倒して、國民運動の發展を招來した。即ち馮玉祥は事變の度毎に、歩一歩革命の途を、左へ左へ進んだもので、この點から見て、彼は少しも豹變してゐないとも云ひ得る。

たゞ、彼が北方の守舊軍閥の中に伍してゐたるが故に、その時々行爲が、叛逆もしくは豹變見られたのである。むしろ守舊派勢力の間に介在し乍ら、迂餘曲折をくりぬけて、革命の歩を進めた……云ふところに、策畧、權謀を要し、裏切り、寢がへりも已むを得なかつた云へるのである。

七

馮玉祥はかくして政治的に幾多の變轉を經過し、その變轉毎に革命の道程へ、歩一歩深く進んだのである。而してそれと同時に、彼の思想も亦白から赤へ、また赤から桃色へ、色々變化した。殊に馮玉祥の思想的變化は(第一)クリスチャンになつた時(第二)、ボリシエウイズムに近よつた時の二期において、最も急激を極めた。

民國四年ジョン・アール・モットー大僧正の説教に感激して、クリスチャンになつた馮玉祥はたゞに自ら清教徒として、自制を克己につこめたのみならず、またこれを部下の軍隊に傳道し、次い



墨子讀む馮玉祥

でその所轄地方において、禁酒、禁煙、廢娼を勵行し、基督教義による善政を布かうとした。たゞ彼の善政勵行のやり方が飽くまで、武斷的強制手段により、またあらゆる慣習の打破に向つて猛進し過ぎたため、彼の「善政」には國民は却つて多大の迷惑を感じ、中には烈しい反感を抱くものもあつたのである。

但し、バイブルの力によつて、部下を統御し、軍紀の肅清をはかつた點において、馮玉祥は確かに非凡の手腕を揮つた。彼は同一宗教の教徒として、その軍隊の結束を固め、また士卒の智育と操行を向上することに於いて、大なる成功をなし遂げた。然し、基督教徒としての馮玉祥はここまで深いものであつたか、それは大なる疑問である。固より彼は基督教をもつて單に自家の政策に用ひたに過ぎないが如きは、餘りに苛酷な批判に失する嫌があるが、馮玉祥はいかにひいき目に見ても徹底した基督教徒であつたとは思はれぬ。

馮玉祥は平素墨子を愛讀してゐる。兵馬恠愾の裡にも、彼は墨子の一卷を手からはなさぬ。馮玉祥側近のある人の談によれば、「馮氏はバイブルよりも、また三民主義よりも、墨子が好きだ」と云ふ。私は昨年秋、南京で馮を訪うた時、「墨子と三民主義との共通點如何」の質問を發したが、彼はこれに答へて「墨子には幾多の意思も、救世的説話の同じきものがある。その善なるものを選択つて、これに従ふべし」と云ふのである。但し墨子の教義の中、迷信的なる點はこれを排除しなければ

ばならぬ」を語つた。馮玉祥の思想には墨子の學説が多量に加はつてゐる。彼はその言論に、演説に、屢々墨子を引用してゐる。

八

民國十三年の北京クーデターの頃から、彼はそろ／＼基督教から足を洗ひ始めた。張家口へ引つ込み、ロシアに接近するや、彼は基督教からレーニン宗に宗旨替への一步をふみ出した。これと同時に彼はまた思想上の大變革に會した。それはその筈である。神の信仰から、一躍して唯物主義のボリシエウイズムに行かうと云ふのであるから、その變革は極めて急激であつたわけである。

馮玉祥をして基督教から遠ざからしめた第一因は、ボリシエウイズムでふ新らしい思想が、彼の頭にはいつて來たことにあるが、また彼が英米の宣教師の支那において、土地を買入れ、教會を建て、奥地へ深くはいつて、布教に従事するに同時に、帝國主義の手先役をつとめてゐるものである。云ふ事實を知つたこと、宣教師のあるものは教會の不可侵權を利用して、或は支那の婦女子を引き入れたり、胎兒を殺したりした等の醜惡なる事實が、幾多發見されたことなごも、亦その有力なる動機であつた。殊に五卅事件の際、基督教徒の多くが、明らかに所謂帝國主義の列強側に立つて學生工人を暴徒亂黨に罵つたことなごは、馮玉祥をして、いよく深く基督教の博愛主義に對して、懷疑の念を抱かした動機であつたのである。

しかし、長い間、基督教徒となり、クリスチャン・ヂエネラルとして、自ら基督教を信仰し、又人にもこれを傳道して來たものが、今更ら急に基督教を脱するわけにも行かないと見え、今日でも彼は決して基督教をやめたことは云はない。私が十七年秋南京で馮玉祥を訪うた時、彼も基督教との關係をたづねて見たが、彼は「實行の基督教は口説の基督教は別ものである。われ等の信するは人類のために有益な事を實行する基督教である」と答へた。(第一章參照)

民國十五年、ロシアから歸つた後の彼は、陝西や河南で度々迷信反對の演説を試みた。(第十四章馮玉祥の吃教、特教、用教三派論參照)

ソウエート・ロシアから歸つた後の馮玉祥は「口説の基督教」もしくは「迷信の宗教」に對する攻撃によつて、巧みに基督教から遠ざからうとしてゐる。しかしさればこそ彼は全然基督教と縁を切つたか云ふこと、さうでもない。そこらは甚だ曖昧である。不徹底である。而して彼の基督教との絶縁の不徹底であること、同一の程度に、彼のレーニンズム入りも亦、不徹底である。彼はロシア滞在の百日間、具さにソウエート政治を視察し、その善悪いづれの方面もよく觀察研究して來た。而して十五年九月、ロシアから歸つて五原に誓師した當時の馮玉祥は、その頃國民軍に附いてゐたボリシエウイキーの顧問さへ、舌を卷くほど過激な「赤い熱」を吹いたものである。

五原誓師にも國民軍は悉く國民黨に加入し、三民主義を標榜して起つたのであるが、當時の

馮玉祥は國民黨云つてもその最も極端に左傾的なものであつた。殆んど共產黨に近いまで云はれたのである。然るに甘肅から陝西、陝西から河南に入るや、いつの間にか彼の赤色は桃色になり、鄭州會議では鄧演達等と喧嘩し、徐州會議では蔣介石にも明かに反共方針をこらに至つた。即ち彼は「赤」から「桃色」に退却したのである。

しかし、國民黨内における馮玉祥は今日においても、依然として、その左翼を背景とし、蔣介石の中央派及び右傾派に對して、常にあきたらぬのである。

九

馮玉祥はかくして、思想及び信仰において、幾度か變化をくり返へした。これと同時に彼の政見、把持、主張も亦時によつて變動を重ねた。即ち馮玉祥は思想と信仰の上においても、豹變、裏切り、寢返りをくりかへした變節漢である云はれるのである。しかし、彼が時と環境によつて、その主義主張を變へるのは、「知らなかつた」からである。一度彼が一つの新しい思想に執着し、一つの主義を主張してゐる現在においてはあくまで眞剣なのである。何人よりも熱心なのである。その信ずる思想に心酔し、その主張する主義に忠實なのである。たゞ自身の教養の向上と、時勢の變化につれて、よりよき信仰、よりよき思想に逢着した時は、彼は直ちに舊きを棄て、新らしきにこびつく癖をもつてゐる。そしてまたその新らしき信仰、新らしき思想に向つて、心酔し、熱

中するのである。馮玉祥の思想は變化してやまぬ。しかし現在信ずる思想には忠實であり、また極めて熱心なのである。たゞ今日心酔してゐる思想も、明日これをすて、しまふ。そこに大なる矛盾があるが、それには相當の事由がなくてはならぬ。私は思ふに、馮玉祥は要するに思想的に未成品である。彼は思想上においては、まだ研究も足らず、修養も足らぬのである。されば思想上の彼は甚だ幼稚である。彼の主義主張には矛盾がある。不徹底なところがある。従つて變化を免れぬのである。しかし、彼の思想には深味がない、甚だ淺薄である云ふことは、他の一面において、それだけ實際的である。通俗的である云ふことをもの語るものである。彼はその思慮が直截簡明、複雑でない、考へが淺いだけに、あまり深く考へず、思案に凝りず、直ちに實行にうつる。彼は自ら信じたことを率先して實踐躬行するのみならず、その部下の國民軍をいつでもその自ら信ずる方向に向け得る絶對的力をもつてゐる。而して國民軍は現下における支那有数の優勢な軍隊である。即ち彼は一、決斷が早いと同時に、二、大きな實行力を有する。そこに馮玉祥の強味があるのである。彼の思想の幼稚であり、未成品であることを、さらへて、一概にこれを冷笑に附してしまふわけに行かぬのである。未成品の強味は將來を有することにあり。

孫文は三民主義を提唱し、國民黨を創立して、然る後に革命軍を建設した……云ふよりは客軍によつて革命武力をあつめた。然るに馮玉祥は先づ國民軍なる武力を建設して、然る後に主義主張

を見出し、政黨を創設、否な、他人の建設した國民黨に加入した。前者は政綱の樹立を先きにして、これを遂行すべき實勢力の建設を後にし、後者はその反對に、先づ實行力を築きあげ、然る後に政策を求めたのである。孫文がその政治的生涯四十年の奮闘を以てして、つひにその在世中に、革命の志を成し遂げ得なかつた所以は、主として「實力」をもたなかつたことにある。然るに馮玉祥には、實力がある。しかしその思想、主義、主張、政策において未熟である。未知數である。往々にしてその行くべき道に迷ふのである。

孫文は革命思想をもつて起ち、これが實行の力を握らうとして、握り切らぬ中に死んでしまつた。馮玉祥は武力を握つて然る後に革命思想にふれ、思想の熱せぬ中に、力のみ膨張してしまつた。

深淵な理論的解説の如きは、今日の馮玉祥にまつて、甚だ無理な註文である。その代り彼の主張は通俗的で、何事も手つ取り早く、善かれ、悪しかれ、實行して見せようとする。彼は國民黨に入黨して、孫文の弟子となり、三民主義を標榜して起つた。しかし孫文の高遠雄大な思想は彼のがらに合はぬ。その代り簡明にして實際的な主張を唱へ、且つごくその實踐躬行に當らうとする。十七年夏、南京第五次大會に出した「衣食住行四大案」の如きは、(第十四章参照)一面馮玉祥の思想的に幼稚なることを語ると同時に、他の一面彼が如何に實際家であるか云ふことを證するものである。

である。また馮玉祥はよく當面の時勢を洞察し、時勢に人心に投ずる標語を案出するに、一種獨特の手腕を持つてゐる。たゞへば民國十三年秋、北京クーデターを決行した際、彼の率ゐた軍隊は國民黨に改變すると同時に、各將卒はその上着に「不擾民眞愛民決死救國」を書した白布をつけた。彼が五原に誓師して再擧した時、その西北軍は國民革命軍となり、全軍を擧げて國民黨に加入せしめ、その將士の上着に「我們爲廢除不平等條約而拚命」を書せる白布を着けた。これは云ふ迄でもなく孫文主義の中からこつた標語であるが、特に只だ不平等條約の撤廢だけを捉へたことは、彼をして用意の周到を極めたもの云はねばならぬ。今直ちに社會革命階級打破等の急激な標榜を採る時は、内は共產黨に乗ぜられ、外は赤化の非難を受ける恐れがある。然し、今日の軍隊は命令だけでは、統御が出来ぬ。何か民心に投ずる標榜がなくてはならぬ。ここにおいて彼は三民主義中の民生及び民權主義には、深くさわらず、たゞ民族主義の一端を捉へて、不平等條約の廢除を高唱することとした。彼は帝國主義打倒、不平等條約撤廢の標榜によつて、三民主義に國民黨に忠義立てし、またその部下軍隊の愛國心に訴へて、その士氣を鼓舞し、また地方人民の後援を得ることにつこめたのである。

十

馮玉祥はかくして思想的に幼稚である。未成品である。それだけ、彼には將來がある。また彼は將來においても、その環境によつて思想上の變化をくりかへすであらう。問題は彼の變つて行く方

向如何云ふことである。それによつて彼自身の成敗も決するであらうし、また支那革命の運命も決するであらう。

彼がかりに支那の大勢を思ふが儘に支配する地位に達するか、もしくは全然支那を征服し、其一手に政權を握つたか假定したならば、彼は如何なる政治をなすであらうか。彼は反動に逆戻りして、専制軍閥なるか。或は左りに急進して、社會革命、經濟革命まで漕ぎつけるであらうか。馮玉祥には富豪の味方たるよりも、貧民の肩をもつ方の可能性が多い云ふ説もあるが、又他の一方には、彼の終局の野心は「帝王たるにある」云ふ如き突飛な説をなす人もある。兵卒衣食住を共にしてゐる彼が、成功の暁、袁世凱の洪憲皇帝、もしくは張作霖の大元帥にならつて、宮殿裡に納まらうとは思はれぬが、然し又彼の權勢慾の熾烈にして、部下に對する獨裁專制的な點から推して、結局彼の目的は「天下取り」に外ならぬを見るも、また一概に否定出来ぬところである。

馮玉祥は會つて張家口にゐた頃、ある日本人の訪客に、ここに挿入のセビロ服を着けてすましこんだ寫眞を與へ乍ら、

私の顔は大總統にも似合ふ顔つきでせう。

と笑ひ乍ら語つたさうである。この寸言尺語の談笑裡、馮玉祥の野心の那邊にあるか、窺はれるのである。ここにまた一説がある。曰く、馮の終局の目的は急進的民主政治にもあらざれば、また反



馮玉祥

動的獨裁政治でもない。彼は兩者をつきまぜたものにならうとしてゐるのである。即ち民主的獨裁者たるこゝが、彼の終局の理想である。換言すれば彼の理想はレーニンでもなければ、袁世凱でもない。彼は將來「支那のケマル・バシア」たらんことをするのである。

十一

北伐完成の前後における支那革命の全局を通觀するに、先づ國民黨の著しき右傾に注目せざるを得ない。十六年から十七年にかけて、廣東の李濟琛、武漢の李宗仁、即ち舊廣西派は湖南の共產黨運動及び廣東の十二月政變を鎮壓して以來、極端なる反共方針をとり、李濟琛の如きは最近數年間反英政策の根據地であつた廣東において、香港の英國當局と親善交驩をなすの奇現象をさへ生ずるに至つた。南京政府は蔣介石が十六年末、汪兆銘と提携せんとしたので、一時再び左傾した如く見へたが、十二月の廣東政變後汪兆銘の去るに及んで、またくケレンスキー式のセントリズムを發揮して右傾派と接近し、同時に財政上の關係から、いつの間にか南京政府は上海の財閥と密接なる聯携をとり、北伐軍費の如きも、主として上海資本家の據金にこれを仰いだ。かくして南京は常に上海の財政的支配下にあると云ふ状態で、國民黨のブルジョア政黨に化せるも亦やむを得ぬ勢である。已にロシアと縁を切り、共產黨員を虐殺し、財閥方面と手を握るに至つた國民黨はいよく所謂ブルジョア革命黨たらざるを得ない。

然し、國民黨の革命的であり、能動的である所以は、主としてその左傾分子の力にある。そのプログラムの中にも左傾思想が濃厚に加はつてゐる。従つて國民黨は一時そのリーダーが臨機の政略に支配され、また當面の財政的關係から、右傾するこゝがあつても、その下層には常に左傾分子が左へ左へ動かうこゝしてゐる。

由來國民黨の弱點は、その基礎とする階級が一定不變でないこゝにある。そのプログラムに右か左か不明の點が多い。否な「中正」主義の現幹部が各自勝手に解釋しやうとする點にある。これがため、國民黨は常に内訌をくりかへし、終始ぐらく動搖をやめない。

然らば、馮玉祥は國民黨左右兩派の分裂に當り、その何れに走るであらうか。馮玉祥の既往の閱歴及び平素の性癖からこれを推すに、左に傾く可能性もあると同時にまた右に結ぶボツシビリチーも多量にある。即ち、第一、彼は前章にも記せる如く感激性に強い。而して彼のこの強い感激性は、何事か新らし味に觸れた場合に於て、最も強く刺激を受ける。さきに基督教に歸依し、次いで愛國運動に狂奔し、最近は三民主義に熱中して居るが、それはみな主として、その時、その環境に對する感激性の作用である。従つて今後もまた何か新しい思潮が起つた場合、彼は今の三民主義を捨て、それに落ち込むかも知れない。新らし味に動かされ、それに没頭する性癖を多量に有する馮玉祥は、今後更に左傾思想に向つて急進的に傾くであらう云ふは、決して豫期されぬこゝでない

十二

然しこゝにまた、馮玉祥はその本來の思想に於て、決して左傾しては居らぬ。むしろ彼は何れか云へば、右傾傾向の人である。國民黨内にあつて、眞に彼が心をゆるして親しみ、また事を共にして居るは、主として右派である……云ふ説をなすものもある。

この説をなす人達の云ふこゝによれば、現に馮玉祥が國民黨の左派を提携し、汪兆銘の手を握り、以て蒋介石の中央派、胡漢民その他の右傾派を對抗せんとするは、たゞ自家の政策上、大衆を味方に引き入れんとするもので、決して主義上左派の思想に心から共鳴してゐるものでない云ふのである。主義において右し、政策において左する云ふは、甚だしい矛盾であるが、しかし此説はまた同時に前記の「馮の終局の目的は急進的民主政治でもなければ、反動的獨裁政治でもない。兩者をつきまぜた民主的獨裁者たるにある。即ち支那のケマル・バシアたらんとするにある」云ふ説を符合するやうにも思はれる。ケマル・バシアは土耳其國民黨の左派に據つて、政權を把握し、其大統領となるに至つて、徹底せる獨裁專制權を樹ち立てた。馮玉祥の志は即ちこゝにある云ふのである。

馮玉祥は三四年來、頻りに土耳其の現勢に注目し、ケマル・バシアの新土耳其建設に就いて研究を始め、昨年夏の如き、土耳其に關する研究資料を部下の將士に頒つたこゝさへある。この事實から推しても馮玉祥の理想とするこゝは、「支那のケマル・バシア」たるにある。彼は新興支那の

上に、民主的獨裁權を樹立せんとするのである……云ふ説に對して、一概にこれを否定するわけに行かぬ。

私は昨秋南京における馮玉祥との會見に際し、特に

今日の中國は歐米の帝國主義との抗爭上、數年前における土耳其に相似た状態にある。總司令はケマル・バシアの採り來つた政策と行動の總てを是認する、や。

この甚だ廻りくさい質問を發したが、それは馮玉祥がケマル・バシアに對して、如何なる感情を抱いてゐるか、彼の理想が支那のケマル・バシアたるにあらざるかを探らんがためであつた。而して馮玉祥は私の質問に對し、即座に筆をこつて

ケマルの行爲は誠に世界的であつて、その有爲の人物たるについては、これを敬佩せざるを得ないこの筆答を與へた。即ち馮はケマル・バシアに對して賞讃の辭をならべたが、しかし、自分の理想は彼にあることは明確に語らなかつた。そこで私は更に遠廻はしをかけて、次ぎの質問を發して見た。

總司令は世界一流の人物はすべて尊敬するに云はれたが、その中でも主義主張において共鳴もしくは近似すに認めらるゝは誰か。

此質問に對し、馮玉祥は「現代には完全に理想すべき人物がない」と語りつゝ、再び筆をこつて、私の携行した原稿紙上に、

華盛頓、林肯、吉林威耳、弗須、興登堡、乃木大將、諸葛亮、岳飛……………

の名を書き並べ乍ら、「クロンウエル最もよし」と附言した。

おもふにクリスチャン・デネラル時代の馮玉祥はたしかにクロンウエルを理想とした。クロンウエルは宗教の勢力を背景とし、同時に武力をもつて政權を奪取し、狂暴なるチャールス一世を倒して、護國官となつた。馮玉祥が基督教と國民軍、即ち信仰の力と武力によつて、北京クーデターを決行し、宣統帝を放逐した如きは、クロンウエルを學んだものではないかとも思はれる。しかしクロンウエルの時代と現代とは時勢が違ふ。宗教の力だけでは、政權は取れない。信仰の力だけでも民衆を指導することが出来ぬ。馮玉祥はこれにおいて、レーニンに教を請ひ、また孫文の弟子となり、思想の力で人心を把握し、大衆の動きを指導し、以て他日民主的獨裁者の地位を得んとするのであらう……云ふ豫想もおこつて來るわけである。たゞ成敗は時の運にして、少くも彼は終局の目標をそこにおいて居るに觀て、或は當らずとも遠からぬかも知れぬ。但し將來のことはたゞ豫測を下すだけで、斷定は出来ない。未知數の馮玉祥に對して、今直ちに將來の判定を下すは、尙早であり、また不可能のこゝである。われ等はたゞ馮玉祥の過去と現在から推して、第一、彼の今日はまことに失意不遇である。將來もまた失敗をくりかへし、苦境に陥るこゝがあらう。第二、しかし、彼は逆境にあつてひるまず、常に「達磨藝」を演ずるに妙を得てゐる……と同時にまた、第

三、彼は既往におけるが如く、將來においても、思想的に變化する可能性を有する。第四、しかし一度一定の方向に狙ひを定めんか、彼はそれに向つて邁進する勇氣と實行の力を有する。従つて、第五、彼の思想の變り行く方向次第で、彼自身の政策のみならず、支那の大勢も亦左右される……云ふことを考慮に入れて、彼の將來を注目し度いと思ふのである。

支那國民革命
馮玉祥 (終)

昭和四年十一月二十五日印刷
昭和四年十一月三十日發行

不許複製

著者
印

發兌

支那國民革命と馮玉祥
定價金貳圓

著者
大阪府豊能郡池田町廣壽寺七二三
布施 勝治

發行者
東京市日本橋區吳服橋二丁目五番地
濱井 松之助

印刷者
大阪府西區阿波座中通一丁目三八ノ一
荻野 伊太郎

東京市日本橋區吳服橋二丁目
大阪屋號書店
振替東京一三七
電話日本橋(24)四三三
五六七五
三八三五
五九七五
番番番
(支店) 大連、旅順、奉天、京城

一七三	馬鴻逵	三五八	俞々	愈々
一八二	叫合	三六〇	睡り	睡り
一九五	脚絆	三六三	發刺	發刺
一九七	擲げ打つ	三六六	鹿鍾麟	鹿鍾麟
二一二	龐炳勳	三六八	織滅	織滅
二一七	打例	三六八	始め	極め
二二九	補獲	三七三	矯矢	嚆矢
二三〇	真拔	三八二	桿棒	棍棒
二六四	殺那	三八四	李鳴鐘	李鳴鐘
二六九	機微	三八九	薛篤弼	薛篤弼
二七一	李石層	四〇二	督辯	督辨
二七八	偏破	四〇四	辨論	辯論
二九九	救出主	四〇五	悠揚	悠揚
二九九	輿望	四三〇	燒眉	焦眉
二九九	惟	四五〇	依然	居然
三二六	面悟、漂然	四五〇	にゐた	南京にゐた
三四四	東西發二	四六八	軍隊の名稱	名稱
三五一	樊鐘秀	四六九	討逆軍	陸海空軍

一八	出廬	八八	惰落	墮落
二七	李鳴鐘	九一	揚宇霆	楊宇霆
三九	政教	九三	牧拾	收拾
四三	鞭々	九五	取りはずす	取りはずす
四六	薛篤弼	一〇九	杭州	杭州
四八	言語同斷	一〇九	周陰人	周蔭人
五四	きわまる	一三一	不俱載天	不俱載天
五九	驅り	一三四	漢口	漢口
六六	遍する	一四〇	矯	鎬
八一	鹿鍾麟	一四〇	敵慨心	敵愾心
八四	胡砂	一五二	轄據	割據
八四	絶体	一五五	愛嬌	愛嬌
八五	徑緯	一六八	黨のために犠牲	黨の犠牲
八七	協調	一六八	人心收攬	人心收攬
八七	絶体	一七〇	天倫	天稟

正誤表

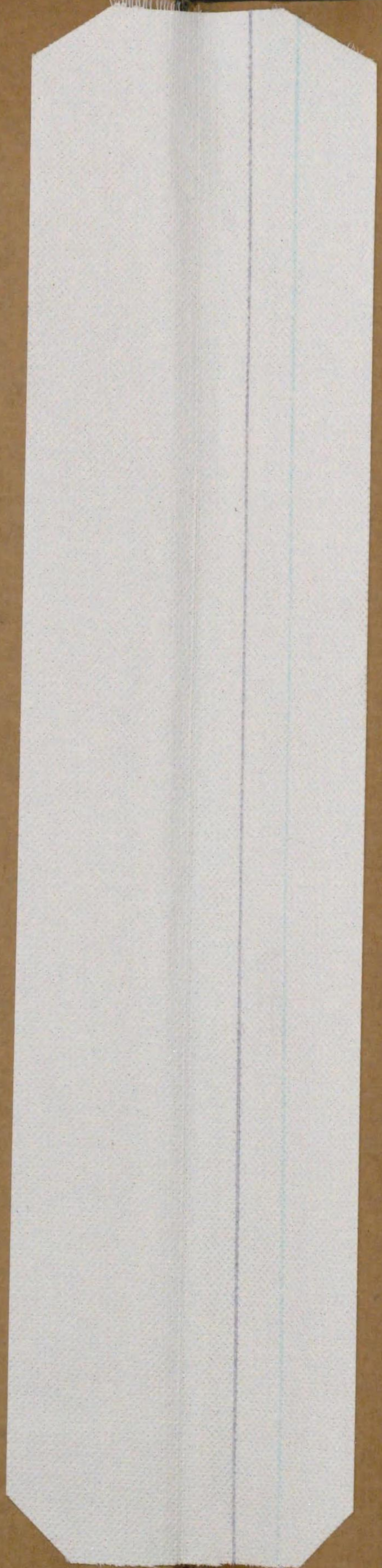
59
13

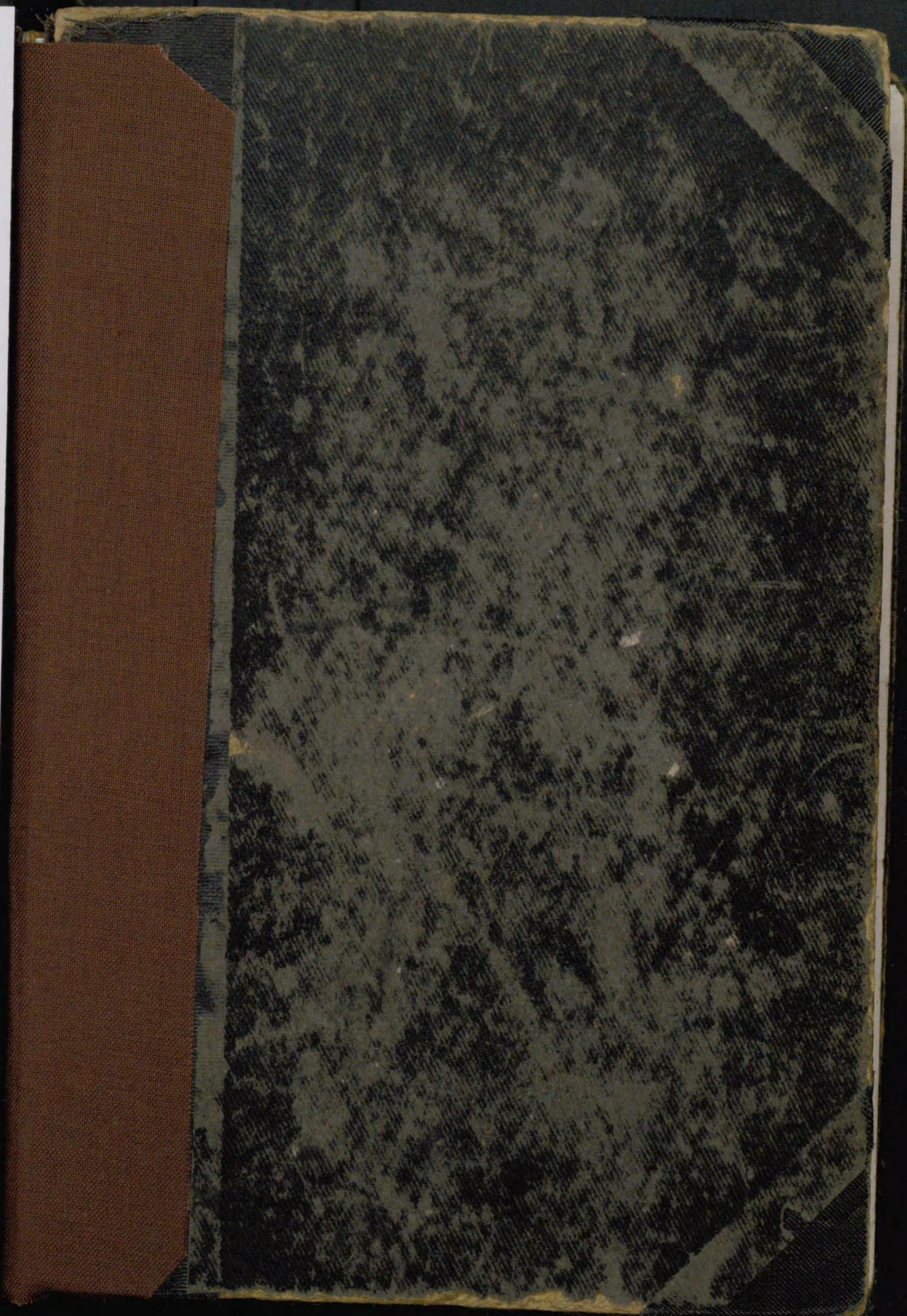
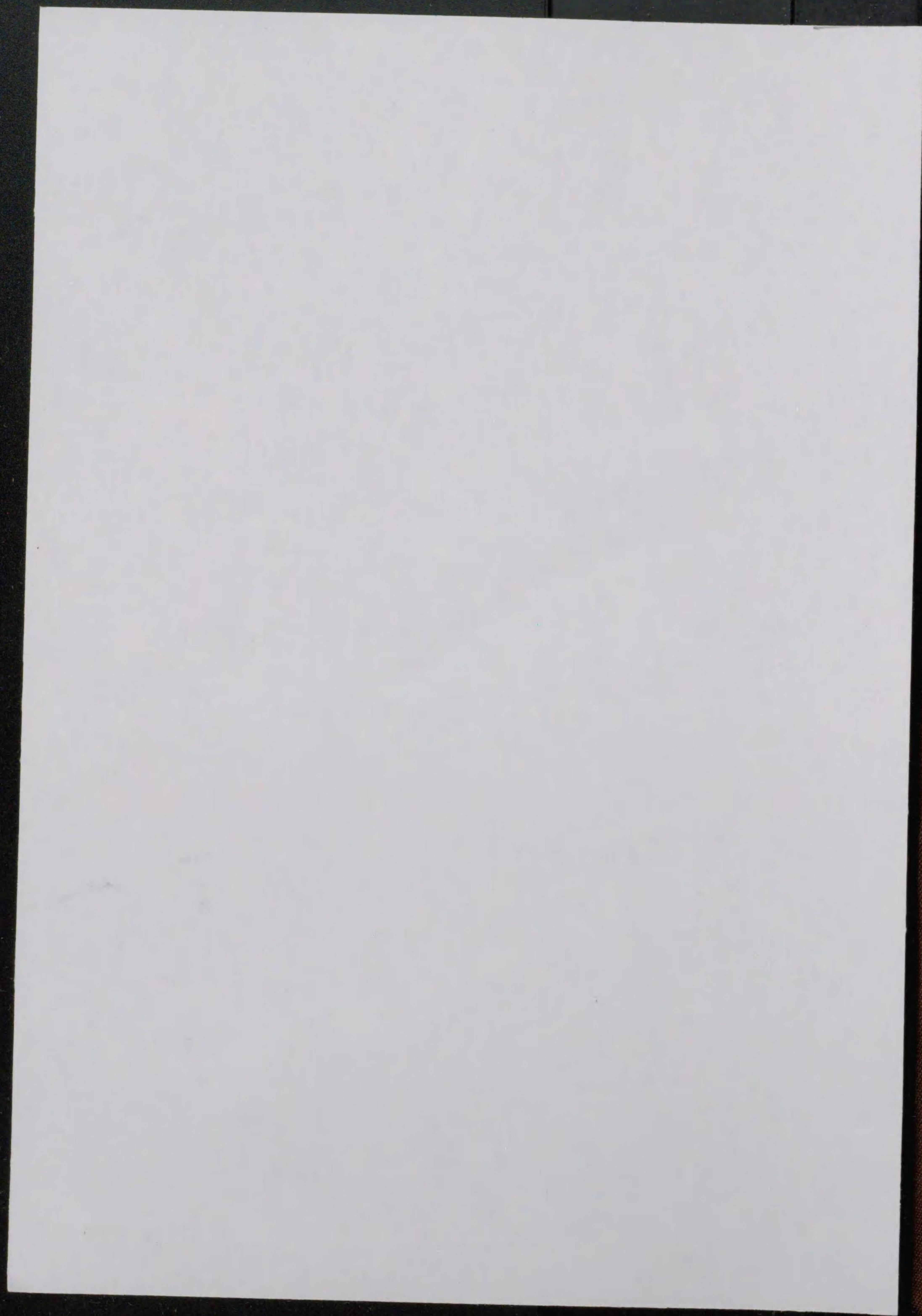
同	同	布施勝治著
□	□	□
(英譯)ソウエート東方策	ソウエート東方策	ロシヤの孫文の支那
□	□	□
送金料五拾八錢	送金料貳金四十五拾八錢	送金料貳金四十五拾八錢

59

13

599
131



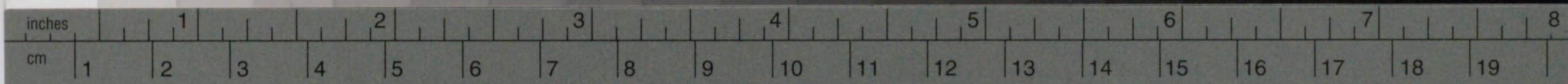


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

